

(8) 貝類

貝類は生息場所により陸域、淡水域、海域の3つに分けられる。海域の場合は河口など汽水域に生息するもの、海浜に生息するもの、深い海などに潜って調べなければならないような海水域に生息するものまである。ここでは陸域の陸産貝類、淡水域の淡水産貝類に加え、汽水産貝類及び海浜産貝類などのうち、絶滅が心配される全ての種を対象に調査を行なった。ただし、調査対象候補種のうち、次の各種は未記載なので今回は取りあげなかった。陸産貝類：ヒメピルスブリムシオイガイ（仮称）・クロツノナメクジ・シロヒメベッコウ・ヒメキヌツヤベッコウ（仮称）、淡水産貝類：マメシジミの一種、汽水産貝類：イヨカワザンショウガイ・カハタレカワザンショウガイ・ナギツボ、海浜産貝類：ヒナユキスズメ・イリエゴウナ。

香川県には現在までに亜種、未記載種を含め陸産貝類約140種、淡水産貝類約40種、汽水産及び海浜産貝類約300種が確認されている。そのうち、陸産54種、淡水産16種、汽水産及び海浜産77種を選定し、現状とそれら種の保全などについて解説した。

① 陸産貝類

本県の陸産貝類（陸貝）の特徴は、一口で言うと生息環境には恵まれていないにもかかわらず、狭い県面積の割に多くの種を育てていることである。

陸貝の生息のためには彼らの好む石灰岩地の有無が大きな要因の一つとされている。石灰岩地のある四国の他県では石灰岩地に生息する固有種が記録されているが本県ではそれがない。もう一つ、陸貝は広葉樹林のブナやケヤキの原生林的な森林に好んで生息するが、県にはそのような環境にも恵まれていない。対照的な例として同じ四国の高知県と比較してみる。即ち高知県は香川県の約4倍弱の面積をもち、中央部山岳地帯には東西方向に細長く伸びた広い石灰岩の鉱脈があり、そのうえブナ等の原生林も各地に残っており、自然環境が多様性に富んでいる。さらに、西部には大きな離島部もあって生息種数では未記載種も含め約200種記録されている。それに対して、香川県ではその不利な条件にもかかわらず140種近い種が記録されており、単位面積の割にすれば多種が分布していると言える。

その理由は高知県などを分布の中心とする種、例えばシロマイマイ（EX）、トサギセル（CR+EN）、トサシロボソギセル（CR+EN）などが香川県の山岳部にまで分布していることである。また、小豆島・豊島の離島部においてその対岸などに分布している種、ヤハタマイマイ（CR+EN）、チャイロオトメマイマイ（CR+EN）、マヤサンマイマイ（CR+EN）、ハタケダマイマイ（CR+EN）など、本州を分布の中心とする種やそれが隔離分化したと思える種が分布していること、ナラビヒダギセル（CR+EN）、ツムガタギセル（VU）など近畿地方に分布する種が淡路島を經由して香川県東部から西部にかけて分布していること、その上、石灰岩地のない県にもかかわらずヤノムシオイガイ（CR+EN）、イソムラマイマイ（CR+EN）、ショウドシマギセル（VU）などの固有種やアキラマイマイ（VU）、モリサキギセル（NT）など準固有種（岡山県、徳島県などの隣県と香川県の局限分布）が生息していることも要因であろう。雨の少ない乾燥した環境に局所的に適応した種が多く、種数は多いが生息地が局限していること、生息個体数も多くなると絶滅が心配される種が多いことなどが香川県の陸貝の大きな特徴といえる。その他、シリプトゴマガイ（CR+EN）、カゴシマノミギセル（CR+EN）など分布の中心が九州にある種が香川県に飛び石分布している例もあって県の陸貝相に厚みをもたらしている。

② 淡水貝類

本県の淡水産貝類の特徴は、近県と比べるとかなり貝類相が貧弱だということである。その理由は水

が少ないことに起因する。

典型的な瀬戸内海式気候の香川県は、年間を通して降雨が少なく晴天日が多い。四国 4 県の県庁所在地の年平均降水量を比較してみると高松市の 1,082.3mm に対して同じ瀬戸内海式気候の松山市は 1,314.9mm、隣の徳島市は 1,453.8mm と 2~3 割多く、太平洋岸気候の高知に至っては 2,547.5mm と 2.5 倍以上の降水量である。また、県内唯一の一級河川である土器川でも、長さ約 33km、標高差約 1,000m であり、降った雨のほとんどが留まることなく短時間で海に流れ込んでしまう。そのため、渇水期には中流域では流水がすべて伏流となって水無川になってしまい、魚類や淡水産貝類等、水生生物は生息できなくなる。一方、讃岐平野には長年苦しめられてきた干害を防ぐために大小さまざまなため池が作られており、その数は約 1 万 6 千個、日本で 3 番目に多く、ため池密度においては全国トップである。そのため、ため池や水田環境に適したタニシ類やヒラマキガイ類等の巻貝やシジミ類やドブガイ類等の二枚貝が広く生息している。

しかし、近年は地震や豪雨に伴う災害を防ぐための防災工事が進められ、河川やため池の堤防が護岸のためコンクリートで固められた。その結果、泥や砂が少なくなり、コンクリートからの溶出成分によって化学環境が変化し、マツカサガイ (CR+EN) やカタハガイ (CR+EN) など淡水産二枚貝類、マメタニシ (CR+EN) をはじめとする多くの淡水産巻貝類において、生息域が縮小したり、個体数が減少したりして絶滅が危惧される状態となってきた。また、食の多様性に伴う外国産貝類の移入、フィッシングブームに伴う外来魚の移入や熱帯魚の飼育、農地改良のための土の移動や香川用水による河川から河川への水の移動、水鳥による自然拡散などが原因でスクミリンゴガイやハブタエモノアラガイ、タイワンシジミ等の外来種が猛烈な勢いで生息域を拡大しているため、その侵入圧によってマルタニシ (VU)、モノアラガイ (DD)、マシジミ等が急激に減少している。更に、湿原や水田、ため池を埋め立てて宅地化が進み、淡水産貝類の生息場所そのものが減少していることも否めない。その一方で、淡水産貝類は水鳥や魚類、水草など他の生物の移動に伴って分布域を拡大することができるため、陸産貝類に比べて移入しやすい。したがって、在来種なのか移入種なのか境界がはっきりしない種も多い。

③ 汽水産及び海浜産貝類

本県の汽水産貝類の特徴は、元々の汽水域が限定されることに加え、河川改修など環境改変の影響を強く受け、減少傾向にある種が多いことである。

本県において汽水域が小さい理由として、淡水産貝類の項で述べた通り、降水量が少なく河川の発達が乏しいことがあげられる。必然的に河川の感潮域も小さくなり、汽水域の代表的な環境であるヨシ原がある程度の規模で存在しているのは土器川河口、新川河口など限られた河口域のみである。このためヨシ原を生息場所とすることが多いカワザンショウガイ科貝類は、産地では多産するものの生息範囲が狭い場合が多く、県下に生息するほとんどの種で絶滅が危惧される。ヨシ原内を流れる細流を好むタケノコカワニナ (DD) も、戦前の記録があるのみで近年の確実な報告例はない。ヨシ原と隣接する泥礫の干潟では、ミヤコドリ (VU)、ワカウラツボ (CR+EN)、ウスコミミガイ (VU) などが見られ、潮間帯上部の飛沫帯では、ヤマトクビキレガイ (VU)、ナギサノシタタリガイ (CR+EN) などが生息している。このような環境は護岸工事・河口堰の設置などによって容易に失われやすく、いずれの種も個体数は少ない。このほか、ミズゴマツボ (CR+EN) は金倉川河口周辺の底質の還元化が進んだ小河川という特殊な環境(人間の感覚ではかなり汚い)からのみ知られ、保全上の注意を要するだろう。

また、過去の塩田開発の際には、陸域と塩田間に小規模な水路が造成されたが、現在では水路内に土砂

が溜まり、意図せず貴重な干潟となっていることがある。三豊市の仁尾干拓、丸亀市・宇多津町の安達川河口、坂出市の木沢干拓、高松市の屋島西町などがそうである。こういった水路干潟の泥底では、前述した希少種に加え、ウミナ類が砂泥上に高密度に生息している場合が多い。香川県で記録のあるウミナ類のうち、イボウミニナ (CR+EN)、ヘナタリ (CR+EN)、カワアイ (CR+EN) はすでに絶滅してしまった可能性が高く、まだ健全な個体群が存在するウミナ、ホソウミニナの保護のためにも、水路干潟の保全が強く求められる。しかし、一般に水路干潟の重要性は認識されておらず、2010年以降に限っても、高松市朝日町、丸亀市塩屋町で埋め立てが行われ、カワグチツボ (CR+EN)、エドガワミズゴマツボ (CR+EN)、ニッポンマメアゲマキ (VU) などの産地が消失した。さらに近年では外来種の侵入も生じている。国外外来種のコウロエンカワヒバリガイは、2000年代の生息記録以降、県下でほとんど確認されることはなかったが、2016年に坂出市青海川河口で新たに個体群が発見された。2019年現在、生息範囲が拡大している兆候は無いが、今後の在来生態系への影響が懸念される。

2012年に公表された環境省第4次レッドリストでは、新たに内湾の干潟等に生息する種(内湾産貝類)が評価・選定された。これに伴い、本改訂では前版で評価対象外であった内湾産貝類を中心に、新たに海浜産貝類として種を選定した。

本県の海浜産貝類の特徴は、激しい環境変化によって多くの種で絶滅のおそれがあるものの、良好な環境が残存している場所では全国的に希少な種が生息していることである。香川県沿岸では高度経済成長期以降、浅海域の埋め立て、富栄養化に伴う水質悪化、底質汚染、海砂採取に伴う海底環境の荒廃など様々な環境変化が行われ、貝類の生息状況が著しく悪化し、多くの種で個体群が消失した。その典型例が食用として利用されてきた種の個体数の激減である。例えば、イタボガキ (CR+EN) は戦前まで数百トンの漁獲量があり、食用や絵画に用いられる胡粉の原料となっていたが、近年では全国的に極端に減少し香川県でもほとんど確認できなくなった。ミルクイ (NT) は今でも潜水漁による漁獲が行われているが、干潟では稀にしか生体が採集されない。また、ハマグリ (CR+EN) は言わずと知れた有名種であるが、実際に店頭で売られている「ハマグリ」は、国外から輸入されたシナハマグリであることがほとんどである。残念ながら、本来のハマグリは県東部から中部でほとんど絶滅状態にあり、さらに西部では放流されたシナハマグリと交雑していることが明らかとなっているため、香川県産ハマグリの実状は危機的な状態にある。このように過去に食用とされるほど多産した種であっても現在では個体数が激減している種は少なくない。他県では普通種のシオフキ (VU) やイソシジミ (NT) の確認例が、近年減少しているのも気がかりである。

一方で、著しい環境変化が行われず、生息環境が保たれている場所では希少貝類が健在な産地もある。県西端の観音寺市豊浜町から三豊市詫間町までは大規模な前浜干潟が連続して存在し、瀬戸内海全体を見てもここまで干潟が良好に残っている地域は珍しい。この自然度が高い環境を背景に、イボキサゴ (NT)、ムラサキガイ (VU)、オオトリガイ (VU)、フジナミガイ (VU) など、前浜干潟を特徴づける希少種が数多く生息している。中でも大規模な干潟を擁する三豊市仁尾町では、オオトリガイを「ドツプリ」と呼び、鍬の柄で干潟を叩き水管から噴出する水を探するという独特な手法で採捕している。「ドツプリ」という方言名や特殊な技法の存在は、貝類と地域住民との文化的な深いつながりを象徴しており、地域文化保護のためにも種の保全の必要性が強調される。

県中部は環境変化が最も激しかった地域であるが、速い潮流を反映した潮通しの良い磯や干潟、藻場が小規模ながらも現存する。特に坂出市土器川河口沖から宇多津町浜三番丁地先周辺は、前浜干潟やア

マモ場、自然石護岸など、多様な環境が比較的良好な状態で存在している。そのため、この海域は香川県沿岸で最も多くの希少貝類が生息している場所のひとつで、確認されている環境省レッドリスト掲載種は50種以上に及び、香川県沿岸でも特に保全上の価値が高い地域であると言える。一方で、本海域では最近になってゴマフダマ (CR+EN)、マルテンスマツムシガイ (CR+EN)、オリイレボラ (CR+EN) の生体が相次いで確認された。この3種はいずれも全国的に絶滅のおそれがある種であるが、同時に岡山県では3種すべてで他地域から個体群が移入された可能性が示唆されている。岡山県は本県と地理的に近く、幼生分散による侵入も可能なため、本県の個体群も外来個体群である可能性に留意する必要がある。

以上のように、香川県沿岸に生息する海浜産貝類の多くが減少傾向にあることは疑いがない。ただ、すべての海浜産貝類が減少しているという訳ではなく、中には回復傾向が認められる種もある。顕著な例がオガイ (VU) であり、2000年代後半には古い死殻しか見られなかったものが、2015年頃から急速に確認数が増加し始め、2019年現在、広く県内沿岸で生体もしくは新鮮な死殻が複数確認できるようになった。さらに、オガイと同所的に生息する場合が多いウネボラ (CR+EN)、ナガゴマフホラダマシ (VU)、ヒメエガイ (CR+EN) の記録も増加傾向にある。これらの種の回復要因に関してはいまだ不明な部分が多いが、水質汚染の改善による部分が大きいと推察される。今後、回復傾向を継続させるためにもより一層の環境保全が望まれる。

(矢野重文・多田 昭・塩田浩之・瀬尾友樹)


貝類の前回評価種数と今回評価種数の比較

		今回評価							合計
		EX	EW	CR+EN	VU	NT	DD	削除	
前回評価	EX	2	0	0	0	0	0	0	2
	EW	0	0	0	0	0	0	0	0
	CR+EN	0	0	22	0	0	0	1	23
	VU	0	0	6	10	0	0	0	16
	NT	0	0	0	1	8	0	0	9
	DD	0	0	0	0	0	1	0	1
	新規	0	0	37	24	29	7	0	97
合計		2	0	65	35	37	8	1	148

参考文献

種の解説の形態の記載に当たっては、以下のような図鑑類を参考にした。

- 1 吉良哲明. 1954. 原色日本貝類図鑑. 保育社(大阪)
- 2 波部忠重. 1961. 続原色日本貝類図鑑. 保育社(大阪)
- 3 黒田徳米. 1963. 日本非海産貝類目録(黒田徳米先生喜寿祝賀記念出版). 日本貝類学会
- 4 東 正雄. 1982. 原色日本陸産貝類図鑑. 保育社(大阪)
- 5 湊 宏. 1988. 日本陸産貝類総目録. 日本陸産貝類総目録刊行会(和歌山県白浜町).
- 6 東 正雄 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版. 保育社(大阪)
- 7 奥谷喬司(編・著). 2000. 日本近海産貝類図鑑. 東海大学出版会(東京).
- 8 奥谷喬司(編・著). 2017. 日本近海産貝類図鑑 第二版. 東海大学出版会(東京).

ツボミガイ <i>Patelloida conulus</i> (コガモガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑦* 健全な個体群は確認できるものの生息地点数は限定されている。		
種 の 特 徴	殻径約6mm。殻は笠形の高円錐形、殻頂は中央に位置し、厚い。殻表は細かい布目状となるが浸食されている場合が多く、灰白色の地に黒色の放射彩や網状模様が入る。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市, 多度津町, 丸亀市, 宇多津町, 坂出市, 高松市, 東かがわ市, 小豆島町。 県外: 陸奥湾から九州, 沖縄本島, 朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟に生息するウミナシガイ類の殻上等に附着する。ウミナシガイ類が多産する県中・西部の河口域では、本種も複数個体が確認されることが多いが、地点によっては個体数も少ない。また県東部ではウミナシガイ類の小規模な個体群しか存在しないため、生息範囲が限定されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種の生息には附着基質となるウミナシガイ類の存在が不可欠であることから、ウミナシガイ類の減少要因となる干潟の埋め立て、河川内の浚渫、河口堰の設置などが本種にとっても主要な減少要因であると考えられる。		
特 記 事 項	東京都では絶滅(EX)、千葉県では絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定されている。		被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹
文 献	10, 12, 24, 30, 40, 43, 70, 75, 128		執筆: 瀬尾友樹

イボキサゴ <i>Umbonium moniliferum</i> (ニシキウズガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦ 燈灘沿岸では大規模な個体群が存在するものの、その他の海域では個体数は少ない。 ⑧* 殻径約10mm、殻幅約15mm。殻は低円錐形で、硬質堅固。殻表は光沢が強く、数本の螺肋を有し、縫合部に低い突起を持つ個体が多い。殻色は黄、赤、紫黒色など多彩。		
種 の 特 徴	殻径約10mm、殻幅約15mm。殻は低円錐形で、硬質堅固。殻表は光沢が強く、数本の螺肋を有し、縫合部に低い突起を持つ個体が多い。殻色は黄、赤、紫黒色など多彩。		
分 布	県内: 県内沿岸に広く分布するが、燈灘以外では少ない。 県外: 東北地方から九州, 朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮通しの良い前浜干潟から潮下帯の砂泥底層に生息する。死殻は県内沿岸で広く見られ、燈灘には大規模な個体群も存在するが、燈灘以外で生貝が確認されることは稀である。また本種は個体群が周期的に消長することが知られており、実際に三豊市仁尾町では2013年前後に多産したがその後は衰退に転じている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	小規模な前浜干潟では稀にしか確認されないことから、埋め立てによる干潟の消失が主要な減少要因であると考えられる。またろ過食性で、還元的でない底質に生息するため、水質汚濁やそれに伴う底質環境の悪化、離岸堤の建設などによる潮流の停滞も減少の一因である可能性が高い。		
特 記 事 項	愛知、三重県で絶滅危惧 I 類(CR+EN) 6県で絶滅危惧 II 類(VU)に指定されている。		被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹
文 献	5, 10, 11, 23, 24, 30, 40, 70, 75, 99, 128		執筆: 瀬尾友樹

ウミヒメカノコ <i>Smaragdia paulucciana</i> (アマオブネ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 II 類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 II 類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦* 本種の生息には海草類の存在が不可欠であるが、本県では海草類が減少傾向にあり、本種も強い減少傾向にあると考えられる。		
種 の 特 徴	殻長約5.5mm。殻幅約4.5mm。殻は球形で厚い。殻表は平滑で光沢があり、白色の地に粗い波状の縦縞が入る色帯と、淡緑色の地に細かい縦縞が入る色帯を交互に巡らせる。		
分 布	県内: 三豊市(仁尾町・詫間町), 丸亀市, 坂出市。 県外: 房総半島から八重山諸島。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯においてウミヒメカノコなどの海草類周辺に生息し、その葉を専食する。本種が摂餌するウミヒメカノコ類は全国的に減少傾向が強く、本県でも絶滅危惧種とされている。そのため本種の生息地点も少なく、近年では三豊市仁尾町で生貝が採集されているものの、他地点では死殻しか確認できない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は海草類に強く依存しており、アマモ場の減少が本種の減少にも直結する。そのためアマモ場減少の要因となる埋め立て、海砂採取などの生息場所の破壊、水質汚濁による透明度の低下、底質環境の悪化などが、本種にとっても主要な減少要因であると考えられる。		
特 記 事 項	愛知、兵庫県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)、福岡・熊本県で絶滅危惧 II 類(VU)に指定されている。		被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹
文 献	24, 25, 30, 36, 70, 75, 102, 128		執筆: 瀬尾友樹

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ミヤコドリ <i>Phenacolepas pulchella</i> (ユキスズメ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦⑧※ 死殻は県内沿岸で広く確認されるが、生貝の個体数は少なく、生息環境が限定される。		
種 の 特 徴	殻径約10mm。殻は縦長の楕円形で、薄質、強く膨らみ笠形となる。殻頂は殻の中央に位置する(近似種ヒナユキスズメは左に寄る)。殻表は赤褐色で、顆粒状の放射肋を多数持つ。		
分 布	県内: 県内各地の沿岸に広く分布する。 県外: 三浦半島～九州、朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟を中心とした転石の下面に付着して生息する。本種は県内沿岸において広く死殻が採集され、河口干潟を中心に生貝が確認される地点も多い。しかし、生貝が確認される範囲は限定的で、一度に確認される個体数も少ない。2017年には丸亀市昭和町の多産地が埋め立てによって消失した。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は前浜干潟に近い環境にも生息するが、本県では河口干潟に分布の中心があるため、河口堰の設置や河川改修に伴う生息場所の破壊が最大の減少要因であると考えられる。またかなり還元化した環境にも生息するが、富栄養化に伴う過度の底質環境の還元化は生息に悪影響を与える可能性がある。		
特 記 事 項	兵庫県など3県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)、大阪府・愛媛県などで絶滅危惧 II 類に指定されている。		
文 献	5, 13, 23, 24, 30, 40, 55, 70, 75, 102, 128		執筆: 瀬尾友樹



被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹

イボウミナ <i>Batillaria zonalis</i> (ウミナ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ 過去の記録では個体数は「普通」であったとされているが、最近では古い死殻⑧※だけが確認されることがほとんどで、減少傾向が顕著である。		
種 の 特 徴	殻長約40mm、殻幅約13mm。殻は細長い塔形で、殻頂は尖る。殻表は灰黒色、数本の弱い螺肋と低い縦張肋があり、殻口外唇の上部は深く湾入する。		
分 布	県内: 三豊市、丸亀市、坂出市、高松市。 県外: 宮城県以南から琉球列島。韓国からシンガポール。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口から前浜干潟の泥～砂泥底の表層を匍匐して生息する。過去の記録では産出状況は「普通」とされ、近年でも死殻は県下の河口域で広く確認できるが、生貝が確認されることはほとんど無い。現存する生息場所・生息数共に非常に限定的で、極めて強い減少傾向にあると考えられる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口域の泥底に生息するため、河川改修や水質汚濁などの影響を受けやすいと考えられる。また、本種をはじめとしたウミナ類は全国的に強い減少傾向にあり、各地の個体群の消失が遺伝的多様性の喪失につながり、メタ個体群の崩壊を引き起こした可能性が示唆されている。		
特 記 事 項	東京・千葉県では絶滅。岡山、愛媛県など7県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定。		
文 献	5, 11, 23, 24, 28, 29, 30, 36, 40, 43, 55, 70, 73, 75, 102, 128		執筆: 瀬尾友樹



被写体: 高松市 撮影者: 瀬尾友樹

ゴマフタマガイ <i>Paratectonatica tigrina</i> (タマガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑥⑦ 現在生貝が確認できる地点は1地点のみであり、その個体群も国内あるいは⑧※は国外から移入された外来個体群である可能性がある。		
種 の 特 徴	殻長約25mm、殻幅約20mm。殻は平滑、球形で厚い。臍孔は狭いが深い。殻表は白地で、黒褐色の斑点が多数散在する。蓋は石灰質で、外縁に沿って2本の細い溝を有する。		
分 布	県内: 丸亀市、宇多津町、高松市。県西部からも記録がある。 県外: 三河湾以西から九州。インド・太平洋。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部の砂泥から泥底に生息する。過去の記録では死殻が普通に見られたとされているが、現在生貝が確認できる地点は土器川河口沖のみである。岡山県の個体群は種苗移植に伴い、有明海あるいは国外から移入された個体群である可能性が指摘されており、本県の個体群も外来個体群である可能性に留意する必要がある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮間帯下部を中心とした浅海域に生息するため、埋め立てなどの海岸開発、海砂採取、水質汚濁などの影響を受けやすいと考えられる。また、現在の個体群は外来個体群である可能性があることから、在来個体群への遺伝的攪乱も懸念される。移入を生じさせないためにも生体の種苗移植は慎重に行われるべきである。		
特 記 事 項	愛媛県・福岡県のほか4県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	5, 11, 23, 24, 36, 40, 70, 73, 75, 102, 128		執筆: 瀬尾友樹



被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

アダムズタマガイ <i>Cryptonatica adamsiana</i> (タマガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦ 過去の記録では死殻が「普通」に見られたとされているが、現在は死殻が確認されることも少なく、生貝が確認されることはさらに稀である。		
種 の 特 徴	殻長約20mm, 殻幅約18mm。殻は球形で厚く、平滑。やや光沢がある。殻頂付近は黒色、臍孔から殻口は茶褐色となる。蓋は石灰質で、外縁に沿って2本の細い溝を有する。		
分 布	県内: 三豊市(仁尾町・詫間町), 宇多津町, 坂出市, 高松市。 県外: 房総半島以西から九州。台湾。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から水深20mまでの砂泥底表層に生息する。1970年代には県西部で死殻が普通に見られたとされるが、現在では新鮮な死殻が確認されることは少ない。同所的に生息するフコガイダマシの方がより強い減少傾向にあるとされるが、本県では本種の方が確認例が少なく、減少傾向が強いように思われる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮通しの良いアマモ場周辺の干潟から潮下帯の砂泥底に生息するため、海岸開発、海砂採取、水質汚濁などが減少の要因となったと考えられる。本種は燈灘沿岸ではほとんど確認できず、備讃瀬戸沿岸の潮通しの良い地点を中心に確認されるため、富栄養化や底質環境の悪化に特に脆弱である可能性がある。		
特 記 事 項	福岡県など5県で絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	10, 11, 40, 70, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹

シラギク <i>Pseudoliotia pulchella</i> (イソコハクガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑦⑧* 死殻は比較的普通に見られるが、生貝が確認される地点は数ヶ所しかなく、個体数も少ない。		
種 の 特 徴	殻長約1.6mm, 殻幅約2.5mm。殻は低円錐形で、堅固。殻表は縦肋と螺肋が交わって格子状となる。殻色は白色だが、生時は赤褐色の付着物に覆われる。臍孔は明らか。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(詫間町), 宇多津町, 坂出市, 高松市。淡漉砂由来と思われる死殻は広く見られる。 県外: 東北地方以南から九州。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟から内湾奥部において泥底に埋まった還元的環境の転石下に付着する。1970年代の記録では個体数は「多い」とされており、近年でも浚渫された海砂に由来すると思われる摩滅した死殻は、県内沿岸で広く見られる。しかし、生貝が確認されている地点は数ヶ所しかなく、生息範囲も限定的で、個体数も少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	護岸工事など開発による生息地の消失、水質汚濁やそれに伴う過度の底質の還元化が主な減少要因であると考えられる。特に河口干潟の個体群では、元々生息に好適な泥礫地の面積が狭く、限定されることに加え、河川改修によって生息場所が容易に失われやすい。		
特 記 事 項	愛知・兵庫県など3県で絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	10, 12, 24, 30, 40, 41, 70, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹

ヒモイカリナマコツマミガイ <i>Hypermastus lacteus</i> (ハナゴウナ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦* 潜在的な生息地は存在すると推測されるものの、近年確認されている個体数は非常に少ない。		
種 の 特 徴	殻長約3.3mm, 殻幅約1.0mm。殻は円筒形、薄質半透明。殻表は白色、平滑で光沢が強い。胎殻はつまみ状に突出する。生時は軟体部の色が透けて見える。		
分 布	県内: 三豊市(詫間町), 多度津町, 坂出市。 県外: 三浦半島以西から九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口から内湾奥部において潮間帯上部から中部の砂礫底に生息するヒモイカリナマコの体内に寄生する。近年では三豊市詫間町鴨ノ越で生貝2個体が得られているものの、他地域では死殻も稀であり、個体数は極めて少ないと推測される。ただし潜在的な生息地は存在すると思われ、今後の生息状況の調査が必要である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	宿主であるヒモイカリナマコは陸域に近い潮間帯上部まで生息することから、護岸工事、埋め立てなどにより生息場所が容易に改変されやすく、それらが本種にとっても最大の減少要因であると考えられる。またヒモイカリナマコは粒度が粗く還元的でない底質を好み、水質汚濁や底質環境の悪化が、生育を阻害する可能性が高い。		
特 記 事 項	愛知・兵庫県など3県で絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	23, 24, 30, 36, 40, 70, 75, 102	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹

*選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ハツカネズミ <i>Macromphalus tomatis</i> (シロネズミ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦* 本県では1地点のみで生息が知られ、微生物環境も極めて限定的である。		
種 の 特 徴	殻長約6.0mm、殻幅約4.6mm。殻は円形で、堅固。体層は著しく大きい。殻表は白色で、7~8本の強い螺肋を巡らし、光沢は無い。臍孔は狭いが、明瞭に開く。		
分 布	県内:三豊市(詫間町)、高松市、備讃瀬戸沖。浅瀬砂に由来する死殻は広く見られる。 県外:千葉県以西から九州。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯に生息するユムシ類の巣穴内に付着する。浅瀬された海砂に由来すると思われる摩滅した死殻は、県内沿岸で広く見られるが、生貝が確認されているのは三豊市詫間町栗島の1ヶ所のみ。またユムシ類が生息していたとしても、本種が必ず確認できるわけではなく、微生物環境は極めて限定的である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種はユムシ類に強く依存しており、ユムシ類の減少が本種の減少に直結する。そのためユムシ類の減少要因となり得る海岸開発、水質汚濁、底質環境の悪化などが、本種にとっても主要な減少要因であると考えられる。ただしユムシ類が生息していたとしても本種が生息していない場合もあり、別の要因が存在する可能性もある。		
特 記 事 項	愛知県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)、三重・岡山県で情報不足(DD)に指定されている。		
文 献	10, 12, 24, 36, 70, 75, 76, 102, 128		執筆: 瀬尾友樹



被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹

ウネボラ <i>Gyrineum natator</i> (フジツガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I B 類 (EN)
選 定 理 由	③⑦* 近年、個体群に回復傾向が認められるものの、いまだ確認される個体数はごく少ない。		
種 の 特 徴	殻長約30mm、殻幅約26mm。殻は紡錘形、背腹に扁平され両側に太い縦張肋がある。殻表は螺肋と縦張肋が交わって小結節状になる。生時は厚い茶褐色の殻皮が覆う。		
分 布	県内:三豊市(詫間町)、丸亀市、坂出市、高松市、さぬき市、東かがわ市。 県外:千葉県以西の本州、四国、九州。インドから西太平洋。		
県 内 で の 生 息 状 況	低潮帯から潮下帯の砂礫地に生息する。1970年代に本種は県内から報告されておらず、この時点で個体数が非常に少なかった可能性がある。一方、2017年以降は県東・中部で継続的に生貝や新鮮な殻が確認され、個体群が回復傾向にあると推測される。しかし、一度の調査で複数個体が確認されることはほとんど無い。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	主に潮通しの良い潮下帯に生息するため、海岸開発、海砂の採取、水質汚濁などの影響を受けたと考えられる。また、本種は船舶用の防汚塗料として使われていた有機スズによってインボセックスを起こすことが知られており、これらによる繁殖不良が減少要因であった可能性も否定できない。		
特 記 事 項	岡山県で情報不足(DD)に指定されている。		
文 献	24, 33, 37, 41, 70, 77, 101		執筆: 瀬尾友樹



被写体: 高松市 撮影者: 瀬尾友樹

ナガゴマフホラダマシ <i>Engina menkeana</i> (エゾバイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 II 類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 II 類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ 近年、個体群に回復傾向が認められるものの、いまだ生貝の確認例は少なく、生息範囲も限定されている。		
種 の 特 徴	殻長約12mm、殻幅約5mm。殻は紡錘形で厚い。殻表は太い黒色の縦肋があり、その上を細い螺肋が走る。殻口の外唇は厚くなり、内側には数個の歯状突起を持つ。		
分 布	県内:三豊市(詫間町)、高松市、さぬき市、小豆島町。 県外:千葉県以西の本州、四国、九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の岩礫地に生息する。1970年代の記録では個体数は「普通」とされているが、近年では死殻が確認されることも稀で、同所的に生息するオガイ、ウネボラよりも個体数は少ない。一方で、2014年以降、備讃瀬戸海域を中心に生貝の確認例は増加傾向にある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮通しが良い転石地のやや遮蔽的な環境に生息するため、富栄養化や浮泥などの水質汚濁の影響を受けやすいと考えられる。また海砂採取や底質の還元化に代表される海底環境の荒廃、生息場所そのものを破壊する海岸開発も主要な減少要因と推測され、有機スズによる繁殖不良も個体数の減少を引き落とした可能性がある。		
特 記 事 項	岡山県で情報不足(DD)に指定されている。		
文 献	10, 11, 24, 37, 41, 70, 77		執筆: 瀬尾友樹



被写体: 高松市 撮影者: 瀬尾友樹

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

オガイ <i>Cantharus cecillei</i> (エゾバイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I B類 (EN)
選 定 理 由	③⑤⑦ 一時期生息記録が途絶えていたが、最近では県下全域で生息確認数が増加している。そのため、環境省レッドリストよりランクを下げて評価した。		
種 の 特 徴	殻長約40mm、殻幅約23mm。殻は太い紡錘形、顕著な縦肋がありその上を細い螺肋が走る。殻口内壁には滑層歯がある。生時は茶褐色の厚いピロード状の殻皮に覆われる。		
分 布	県内: 三豊市(詫間町), 宇多津町, 坂出市, 高松市, 備讃瀬戸沖。 県外: 房総半島以西から九州。朝鮮半島からシンガポール。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の岩礫地に生息する。1970年代の産出状況は「普通」であるとされているが、その後、ごく最近まで生息が確認されることはほとんど無かった。しかし、2015年頃から備讃瀬戸沿岸を中心に確認される個体数が急激に増加している。一方で、潮間帯で生貝が確認できる地点は少ないままである。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	ウネボラなどと共に潮通しの良い岩礫地に生息し、護岸工事、海砂採取などの生息場所の破壊、水質汚濁などの影響を受けやすいと考えられる。また、本種は船舶用の防汚塗料として使われていた有機スズによってインボセックスを起こすことが知られており、これによる繁殖不良が減少要因であった可能性もある。		
特 記 事 項	福岡・愛知県など4県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)、愛媛県で絶滅危惧 II 類(VU)に指定されている。		
文 献	5, 10, 11, 24, 33, 38, 41, 56, 70, 75, 77, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹

マルテンスマツムシガイ <i>Mitrella martensi</i> (フトコロガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑥⑦ 近年の生貝の確認例は少なく、現在確認されている個体群も他地域からの移入個体群である可能性がある。		
種 の 特 徴	殻長約15mm、殻幅約5mm。殻は細長い紡錘形、硬質。螺層の膨らみは弱い。殻表は殻底肋を除き平滑で、黄褐色の地に褐色の稲妻状の縦縞を巡らす。殻口外唇には歯状突起を持つ。		
分 布	県内: 丸亀市, 坂出市, 高松市, さぬき市(津田町)。 県外: 北海道南部から九州。朝鮮半島, 中国大陸。		
県 内 で の 生 息 状 況	干潟から潮下帯の砂泥～砂礫地に生息する。近年でも丸亀・坂出市で生貝が採集され、特に土器川河口沖では複数個体が採集されている。しかし、岡山県の個体群は他地域からの移入個体群であることが示唆されており、本県の個体群も移入個体群の特徴とされる大型の特徴を有するため、移入の可能性に留意する必要がある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮間帯下部を中心とした浅海域に生息するため、埋め立てなどの海岸開発、海砂採取、水質汚濁などが減少要因であると考えられる。また、現在の個体群は外来個体群である可能性があることから、在来個体群への遺伝的攪乱も懸念される。早急に遺伝解析を行い、本県個体群の在来性を検証することが望まれる。		
特 記 事 項	愛知・福岡県など3県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)、長崎県で絶滅危惧 II 類(VU)に指定されている。		
文 献	12, 24, 36, 40, 70, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	




被写体: 坂出市 撮影者: 瀬尾友樹


ウネムシロ <i>Reticulnassa hiradoensis</i> (オリエロフバイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦ 過去には個体数は多かったとされているが、近年ではほとんど確認されず、強い減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約14mm、殻幅約7mm。殻は紡錘形、硬質堅固。螺塔は高く、縫合のくびれはやや強い。殻表は強い縦肋と螺肋が交わり格子目状。光沢はない。殻色は一般的に黄色。		
分 布	県内: 丸亀市, 坂出市, さぬき市(津田町)。 県外: 北海道以南から九州。朝鮮半島, 中国大陸。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮通しが良い岩礫地から前浜干潟砂泥底層に生息する。1970年代の記録では個体数は「多い」とされているが、近年では生貝、死殻共に限定された範囲でごく少数の個体が採集されているのみである。極めて強い減少傾向にあるのは間違いなく、絶滅の恐れが非常に高いと考えられる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	主に潮通しの良い岩礫地から干潟に生息するため、干潟の埋め立て、護岸工事による生息場所の破壊、水質汚濁などが主要な減少要因であると考えられる。またオリエロフバイ科は有機スズによってインボセックスを起こすことが知られており、それらによる繁殖不良が減少要因であった可能性も否定できない。		
特 記 事 項	愛知・福岡県など3県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	5, 12, 23, 36, 40, 70, 77, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 丸亀市 撮影者: 松田春菜

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ムシロガイ <i>Nassarius livescens</i> (オリイレヨフバイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦⑧※ 過去の記録では個体数が多かったとされているが、近年では死殻が確認されることも稀であり、減少傾向が強い。		 被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹
種 の 特 徴	殻長約20mm, 殻幅約11mm。殻は卵形で厚い。殻表は褐色、縦肋と螺肋が交わって顆粒状となる。軸唇には滑層が発達する。		
分 布	県内: 三豊市, 宇多津町, 坂出市, さぬき市。 県外: 岩手県以南から九州。東アジアから西太平洋。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底表層に生息する。過去の記録では個体数は「多い」とされているが、近年は限られた地点でごく少数の古い死殻が確認されているのみである。しかし、2017年の調査で三豊市栗島において新鮮な死殻が採集され、2018年には生貝も確認されたことから、回復傾向にある可能性も示唆される。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮通しが良いアマモ場周辺に生息することから、埋め立てなどの生息場所の破壊、富栄養化やそれに伴う底質環境の悪化などが主な減少要因であると考えられる。また、本種もオガイなど同様に、有機スズによってインボセックスを起こすことが知られており、繁殖不良が減少要因であった可能性もある。		
特 記 事 項	兵庫県など4県で絶滅危惧II類(VU)、大阪府・岡山県で準絶滅危惧(NT)に指定されている。		
文 献	10, 11, 23, 24, 30, 40, 41, 70, 73, 75, 77, 128	執筆者: 瀬尾友樹	

オリイレボラ <i>Scalptia scalariformis</i> (コロモガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑥⑦ 近年でも複数地点で生貝が採集されているが、それらは移入個体群である ⑧※ 可能性がある。		 被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹
種 の 特 徴	殻長約20mm, 殻幅約11mm。殻は太い紡錘形、堅固。殻表は強い縦肋があり、肋間は平滑だが、非常に細かい螺肋が入る場合もある。殻色は茶褐色の地に白色の色帯を巡らせる。		
分 布	県内: 丸亀市, 坂出市, 備讃瀬戸沖。 県外: 房総半島から九州。東アジア, インド・西太平洋。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底表層に生息する。1970年代の記録では個体数は「少ない」とされているが、近年でも土器川河口沖、坂出市沙弥で生貝が確認されている。一方、本種はゴマフダマ等と共に、岡山県の個体群が移入である可能性が示唆されており、本県個体群もその点に留意する必要がある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	埋め立てなどの海岸開発、海砂採取、水質汚濁、底質環境の悪化などが主な減少要因であると考えられる。また、現在の個体群は外来個体群の可能性があるので、在来個体群への遺伝的攪乱も懸念される。移入の原因となり得る他地域からの種苗移植は慎重に行われるべきである。		
特 記 事 項	愛知・熊本県などで絶滅危惧I類(CR+EN)、三重・福岡県で絶滅危惧II類(VU)に指定されている。		
文 献	10, 12, 23, 24, 36, 40, 70, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	

イソチドリ <i>Amathina tricarinata</i> (トウガタガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦※ 近年確認された生貝は極めて少なく、新鮮な死殻が採集される機会も少ない。		 被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹
種 の 特 徴	殻長約14mm, 殻幅約19mm。殻は笠形、やや厚い。殻頂は小さく巻く。殻表は白色、3本の強い螺肋があり、生時は茶褐色の厚い殻皮を被る。殻口内は白色で、光沢が強い。		
分 布	県内: 三豊市, 丸亀市, 宇多津町, 坂出市, 備讃瀬戸沖。浚渫砂由来と思われる死殻は広く見られる。 県外: 房総半島以西から九州。中国, 香港, フィリピン。		
県 内 で の 生 息 状 況	二枚貝類の殻表に付着し体液を吸う寄生性の生態を持つ。浚渫砂に由来すると思われる古い死殻は、県内沿岸で広く見られるが、新鮮な死殻が採集される地点は限られ個体数も少ない。近年確認された生貝は、大浜漁港内に係留されたロープに付着したマガキから採集された2個体と、潮下帯のタイラギに付着した1個体のみである。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	タイラギに付着した個体が確認されていることから、宿主となる二枚貝類の生息場所を改変する埋め立てなどの海岸開発、海砂採取や水質汚濁が主要な減少要因であると考えられる。また漁港内のようなやや人工的な環境にも生息するが、あくまで代替的なものであると推測され、自然海岸の保全が原則である。		
特 記 事 項	千葉県で絶滅(EX)、岡山県など5県で絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	12, 24, 36, 40, 70, 73, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

カキウラクチキレモドキ <i>Brachystomia bipyramidata</i> (トウガタガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	③⑤⑦* 本県では本種が寄生するマガキの分布範囲が縮小しており、本種も減少傾向にあると考えられる。		
種 の 特 徴	殻長約4.0mm、殻幅約1.8mm。殻は塔形、半透明で、硬質堅固。殻表には粗い成長線が入る。軸唇に襞を1つ持つ。		
分 布	県内:丸亀市(土器川河口)、高松市(香東川河口)。 県外:宮城県から九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟においてマガキの殻表面に付着・寄生する。本県では本種が寄生するマガキの分布が縮小してケガキに置き換わっており、本種の好むカキ礁のようなまとまったマガキ個体群は規模の大きな河口域に生息が限定されている。そのため、本種の確認地点は限定的で、減少傾向にある可能性が高い。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本県では本種の分布が河口域に限定されることから、河川改修、河口堰の設置などの生息場所の破壊が最大の減少要因であると考えられる。また宿主となるマガキの減少要因は不明であるが、おそらく海洋の貧栄養化に伴うもので抜本的な解決は困難であり、本種の保全にはまず生息場所を破壊しないことが重要である。		
特 記 事 項	大阪府で絶滅危惧II (VU)、愛知・兵庫では準絶滅危惧(NT)に指定されている。		
文 献	10, 30, 40, 102	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 高松市 | 撮影者: 瀬尾友樹

イボキサゴナカセクチキレモドキ <i>Boonea umboniocola</i> (トウガタガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ ⑧* 燈灘沿岸に分布が限定され、近年では個体数の減少傾向が強い。		
種 の 特 徴	殻長約3.8mm、殻幅約1.2mm。殻は細い紡錘形、薄質半透明。縫合はほとんどくびれない。殻表は白色で、弱い螺旋溝を巡らせる。殻口軸唇に弱い襞を持つ。		
分 布	県内:観音寺市、三豊市(仁尾町)。 県外:瀬戸内海、宮崎県、熊本県、朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	前浜干潟に生息するイボキサゴの体表に寄生する。宿主であるイボキサゴが多く生息していた観音寺市、三豊市仁尾町では、本種も多産しており、生貝も複数個体が採集されていた。しかし2017年頃からイボキサゴ個体群の衰退が顕著になり、本種も生貝を確認することが少なくなった。また燈灘以外では死殻も採集されない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	イボキサゴが多産する燈灘沿岸でしか見られないことから、本種の生息にはイボキサゴの健全な個体群が存在することが必須であると推測される。そのため、イボキサゴの減少要因である干潟の埋め立て、水質・底質環境の悪化、人口構造物による潮流の停滞が、本種にとっても主要な減少要因になり得ると考えられる。		
特 記 事 項	熊本県で絶滅危惧II類(VU)、宮崎県で準絶滅危惧(NT)に指定されている。		
文 献	36, 70, 75, 102	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 三豊市 | 撮影者: 瀬尾友樹

アサヒキヌタレ <i>Solemya japonica</i> (キヌタレガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ ⑧* 本県では生息が確認される地点が少なく、生貝もほとんど確認されない。		
種 の 特 徴	殻長約20mm、殻高約5mm。殻は円筒形で、殻後端は細まる。薄質で、やや膨らむ。殻表は強い光沢のある茶褐色の殻皮に覆われ、黄褐色の放射彩を有する。靱帯は外在。		
分 布	県内:三豊市、宇多津町、坂出市。 県外:北海道南部から九州、朝鮮半島、台湾。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮通しが良い前浜干潟から潮下帯の砂泥底に埋込んで生息する。1970年代の記録に無いことから、従来、個体数が少ない種であると推測される。死殻は備讃瀬戸沿岸のアマモ場を伴う状態の良い前浜干潟で継続的に確認できているが、生貝が確認されることは非常に少ない。潮下帯の生息状況は不明である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主にアマモ場周辺の潮通しの良い砂泥底に生息することから、水質汚濁、底質汚染による影響を受けやすいと考えられる。また海岸開発をはじめとした生息場所の破壊も減少要因であると考えられ、特に海砂採取は潮下帯に生息する個体群を大きく縮小させた可能性が高い。		
特 記 事 項	愛知県で絶滅危惧I類(CR+EN)、岡山・福岡県で情報不足(DD)に指定されている。		
文 献	24, 36, 40, 70, 75, 102	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 | 撮影者: 瀬尾友樹

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

キヌタレガイ <i>Solemya pusilla</i> (キヌタレガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦ 過去の記録では健全な個体群が存在したと考えられるが、近年では産地・⑧※ 個体数共に少ない。		
種 の 特 徴	殻長約12mm, 殻高約4mm。殻は円筒形, 薄質で, やや膨らむ。殻後端は細まらない。殻表は強い光沢のある茶褐色の殻皮に覆われ, 黄褐色の放射彩を有する。靱帯は内在する。		
分 布	県内: 三豊市, 宇多津町。 県外: 北海道南部から九州, 朝鮮半島, 台湾。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮通しが良い前浜干潟から潮下帯の砂泥底に生息する。1970年代の記録では個体数は「普通」とされている。しかし, 近年では継続的に死殻が確認できる産地はあるものの, 生貝が確認されることは非常に少ない。このため, 減少傾向にあるのは間違いないと考えられる。潮下帯の生息状況は不明。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主にアマモ場周辺の潮通しの良い砂泥底に生息することから, 水質汚濁, 底質汚染による影響を受けやすいと考えられる。また海岸開発・海砂採取などの生息場所の破壊も主要な減少要因である。		
特 記 事 項	千葉・兵庫県で絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN), 愛知・熊本県で絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。		
文 献	12, 24, 30, 40, 70, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹

ヒメエガイ <i>Mesocibota bistrigata</i> (フネガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧ⅠB類 (EN)
選 定 理 由	③⑤⑦ 本県では回復傾向にあると思われるが, 全国的に希少な種であり, いまだ確認地点, 個体数共に少ない。		
種 の 特 徴	殻長約20mm, 殻高約10mm。殻は横長の箱形で, 厚く, やや膨らむ。殻表には28本内外の縦に二分される放射肋を持ち, 黒褐色の厚い殻皮を被る。内面は白色で, 光沢がある。		
分 布	県内: 三豊市, 丸亀市, 坂出市, 高松市。古い死殻は県内沿岸で広く見られる。 県外: 房総半島から九州, 西太平洋からインド洋。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の転石に付着して生息する。全国的に希少な種であるが, 本県では2013年以降, 備讃瀬戸海域を中心に転石下やたこ壺漁の漁屑から, 生体及び新鮮な死殻が相次いで確認されるようになった。ただし, 備讃瀬戸海域以外での生体の確認例はいまだ無く, 確認される地点は限定されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮通しが良い転石地やや遮蔽的な環境に生息するため, 富栄養化や浮泥などの水質汚濁の影響を受けやすいと考えられる。また海砂採取や底質の還元化に代表される海底環境の荒廃も減少要因の可能性が高い。加えて生息場所そのものを破壊する海岸開発も脅威である。		
特 記 事 項	岡山・熊本県で絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) に指定されている。		
文 献	12, 24, 26, 33, 36, 38, 41, 70, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	




被写体: 高松市 撮影者: 瀬尾友樹

サルボウ <i>Anadara kagoshimensis</i> (フネガイ科)		香川県カテゴリ	情報不足 (DD)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑤⑦⑧※ 生息数が減少している可能性はあるが, 現時点で評価できる情報が不足している。		
種 の 特 徴	殻長約40mm, 殻高約33mm。殻は箱形, 厚く, 膨らむ。殻表は白色, 肋上に顆粒のある32本内外の放射肋を持つ。茶褐色の殻皮を被り, 殻頂を中心に剝離する。腹縁は刻まれる。		
分 布	県内: 県内全域の干潟から浅海域に生息するが, 県東部では少ない。 県外: 房総半島～九州, ロシア沿海州, 朝鮮半島から中国大陸。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に浅く埋込して生息する。過去の記録では個体数は「普通」とされ, 近年でも死殻は県内沿岸で広く確認される。しかし, 死殻は古いものが多く生貝が確認されることは少ない。過去の記録との比較が困難なため情報不足とするが, 個体数が減少している可能性は十分に考えられる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	干潟から浅海域の砂泥底に生息するため, 海岸開発や海砂採取による生息場所の破壊が減少要因であると考えられる。また本県では主に薬場周辺において生貝が採集されていることから, 薬場のような生産量が高いながらも富栄養化が起こっていないバランスのとれた環境が必要と思われる。		
特 記 事 項	岡山県の個体群は他地域からの移入の可能性が高いとされている。		
文 献	11, 14, 24, 73, 75	執筆者: 瀬尾友樹	




被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹


※選 定 理 由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国権限, ④固有種, ⑤県内権限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅


ハイガイ <i>Tegillarca granosa</i> (フネガイ科)		香川県カテゴリ	情報不足 (DD)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ 全国的に減少傾向にあり、本県では1970年代に採集されたと推定される標本が現存するが、県外産標本の可能性があるため情報不足とする。		
種 の 特 徴	殻長約50mm、殻高約35mm。殻は箱形、重厚で、膨らむ。殻表は灰白色、肋上に顆粒を有する20本内外の強い放射肋が走る。厚い褐色の殻皮を被り、腹縁付近以外では剥離する。		
分 布	県内: 丸亀市、宇多津町、坂出市から古い死殻が採集されている。 県外: 三河湾から八代海までの内湾、朝鮮半島から東南アジア。		被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹
県 内 で の 生 息 状 況	香川県博物館所蔵の畠山祥一郎貝類標本中に、合弁標本が1個体のみ存在するのが本県における唯一の生息記録である。ただし標本とラベルの記述に食い違う点がありこの標本は県外産である可能性が高い。過去に生息していたとしても、すでに本県には本種が生息可能な環境は残されておらず絶滅した可能性が極めて高い。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は内湾奥部の泥底に生息するため、大規模な内湾が存在しない本県では近世以前に既に絶滅していたか、絶滅寸前であったと推測される。本種が仮に近世以降も生息していた場合、海岸開発や河川改修による湾奥部の埋め立てが、細々と残存していた個体群を消滅させる最大の要因であったと考えられる。		
特 記 事 項	大阪府・愛知・岡山県で絶滅(EX)、福岡県など4県で絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	11, 24, 36, 40, 70, 73, 75, 102, 128		執筆: 瀬尾友樹

イタボガキ <i>Ostrea denselamellosa</i> (イタボガキ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦ 1980年代頃までは漁業対象種となるほど個体数が多かったが、現在では稀に生体が採集される程度で、個体数の減少が顕著である。		
種 の 特 徴	殻長100mmを超える大型種。不規則な類円形で、殻のふくらみは弱い。左殻内面の殻頂周辺には数個の縁刻歯がある。		
分 布	県内: 死殻は中西部沿岸、生体は備讃瀬戸海域のみ。 県外: 七尾湾、東京湾以西の内湾～韓国、中国に分布。		被写体: 備讃瀬戸沖 撮影者: 瀬尾友樹
県 内 で の 生 息 状 況	沿岸浅海域の砂礫底に生息し、食用となるため過去には水産上重要な種であった。1970年代の記録では産出状況は「多い」とされており、1980年頃までは健全な個体群が存在したと考えられる。しかし、近年では摩滅した死殻が時たま採集される程度で、生体は備讃瀬戸沖合でごく稀に採集されるにすぎない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	高度経済成長期以降の水質悪化、海砂の採取、埋め立てによる生息環境の破壊、過剰な漁獲などによって、個体数が激減したものと考えられる。日本全体をみても健全な個体群はほとんど知られておらず、少ないながらも生体が確認される本県の個体群はきわめて貴重である。		
特 記 事 項	千葉県では絶滅、6県で絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	2, 5, 10, 11, 14, 24, 36, 57, 70, 73, 75, 102, 117, 128		執筆: 瀬尾友樹

イセシラガイ <i>Pegophysema bialata</i> (ツキガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦* 新鮮な死殻が見られる地点はいずれもアマモ場に隣接した状態の良い前浜干潟であり、他の希少種と共に本種も減少傾向にあると考えられる。		
種 の 特 徴	殻長約65mm、殻高約60mm。殻は円形、薄質で強くふくらみ、前後縁は直線的。鉸板は無歯。殻表は白色で、光沢は無く、生時は茶褐色の薄い殻皮に覆われる。		
分 布	県内: 三豊市(仁尾町)、丸亀市、宇多津町、高松市(庵治町)、小豆島沖。 県外: 北海道南部から九州。朝鮮半島から中国大陸、タイランド湾、インド洋。		被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から水深40mまでの砂泥底に深く埋込して生息する。土器川河口沖では2012年に老成した複数の合弁死殻が確認されたが、それ以降、合弁死殻は採集できていない。同時期に合弁死殻が比較的普通に確認できていた宇多津町の産地でも確認数が減少している。その他の地点での個体数はごく少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	新鮮な死殻が確認できる地点はいずれもアマモ場に隣接した干潟であり、海岸開発、海砂採取、水質汚濁などの影響を受けやすいと考えられる。また、ある種のツキガイ科貝類では、海藻の密生した根茎マットの存在が好適な生息環境の条件であることが示唆されており、アマモ場の喪失が本種の減少要因であった可能性もある。		
特 記 事 項	岡山・福岡県など、本種が選定されている7県すべてで絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	10, 11, 24, 36, 40, 57, 70, 73, 75, 100, 128		執筆: 瀬尾友樹

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

オチバガイ <i>Gari chinensis</i> (シオサザナミ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦⑧※ 燧灘沿岸では多産地が存在するものの、備讃瀬戸、播磨灘沿岸では生息が確認できる地点が少なく、個体数も多くない。		
種 の 特 徴	殻長約30mm, 殻高約15mm。殻は長楕円形, 薄質, 光沢のある褐色の殻皮に覆われる。殻内面は暗紫色から赤紫色の多数の放射彩が入る。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(仁尾町・詫間町), 宇多津町, 高松市。 県外: 東京湾以西から九州。朝鮮半島から中国。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟や淡水の湧出のある前浜干潟の砂泥底に生息する。県西部では2017年頃まで観音寺市有明浜で多産していたが、2019年の調査では大幅に減少していた。県中部では死殻が少数確認できる程度で生息個体数はごく少ない。県東部では現在まで死殻も確認できていない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	主に河口から淡水の影響のある干潟に生息する種であり、河川改修などの生息環境の破壊、底質環境の悪化、水質汚濁によって減少したと考えられる。また、有明浜では陸上からの淡水の湧出のある環境に生息しており、防波堤などの海岸構造物による地下水の遮断が減少の一因である可能性も否定できない。		
特 記 事 項	大阪府では絶滅(EX), 兵庫県では絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定されている。		被写体: 観音寺市 撮影者: 瀬尾友樹
文 献	5, 30, 40, 57, 70, 75, 102, 128		執筆者: 瀬尾友樹

ムラサキガイ <i>Hiatula adamsi</i> (シオサザナミガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦※ 県西部では多産する生息地がいくつか存在するものの、中部では確認される個体数は少ない。東部ではほとんど確認できない。		
種 の 特 徴	殻長約100mm, 殻高約48mm。殻は長楕円形。平滑でやや薄質, 殻頂から後背縁にかけて2本の細い白帯が入り, 厚い黄褐色の殻皮に覆われる。殻内面は濃紫色。		
分 布	県内: 観音寺市(旧観音寺市), 三豊市, 丸亀市, 宇多津町, 高松市(屋島西町・庵治町)。 県外: 房総半島以西から九州。中国から東南アジア。		
県 内 で の 生 息 状 況	前浜干潟の低潮帯から潮下帯の砂泥底に生息する。大規模な前浜干潟が発達する燧灘沿岸では健全な個体群が残っているが、備讃瀬戸沿岸および播磨灘沿岸ではそのような環境に乏しく、個体数は少ない。三豊市仁尾町では方言名「オイ」と呼ばれ、フジナミガイと共に潮干狩りの際に採取されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	主に大規模かつ底質が還元的でない前浜干潟に生息するため、埋め立てや海中構造物の設置などによる生息場所の破壊、海砂採取、水質汚濁、底質環境の悪化などが減少要因であると考えられる。また、本種は潮干狩りで採取されているが、生息数が限定されているため過度な採取は慎まれるべきである。		
特 記 事 項	岡山・愛媛県など7県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定されている。		被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹
文 献	5, 11, 24, 30, 36, 40, 43, 70, 75, 102, 128		執筆者: 瀬尾友樹

フジナミガイ <i>Hiatula boeddinghausi</i> (シオサザナミ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦※ 全国的に希少な種であるが、本県では継続的に生貝が確認できているため、環境省カテゴリよりもランクを下げて評価した。		
種 の 特 徴	殻長約100mm, 殻高約70mm。殻は横長の楕円形, やや薄く, 膨らみは弱い。殻表は平滑で, 紫色と淡紫色が交互に出現し, 厚い黄褐色の殻皮に覆われる。殻内面は濃紫色。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市, 丸亀市, 宇多津町, 高松市(屋島西町・庵治町)。 県外: 岩手県以南から九州。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	前浜干潟の低潮帯から潮下帯の砂泥底に生息する。大規模な前浜干潟が発達する燧灘沿岸では健全な個体群が残っているものの、備讃瀬戸・播磨灘沿岸では好適な環境に乏しく、個体数も少ない。また燧灘沿岸では大型個体が確認できるが、それ以外の地域では幼貝の死殻が採集される場合がほとんどである。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	大規模かつ底質が還元的でない前浜干潟に特徴的な種であることから、埋め立てや海砂採取などによる生息場所の破壊、水質汚濁やそれに伴う底質環境の悪化、海中建造物の設置による潮流の停滞などが主な減少要因であると考えられる。また、本種は潮干狩りで採取されているが過度な採取は慎まれるべきである。		
特 記 事 項	千葉県で絶滅(EX), 愛知県など3県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定されている。		被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹
文 献	10, 11, 14, 24, 36, 40, 70, 73, 75, 102, 120, 128		執筆者: 瀬尾友樹

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

イソシジミ <i>Nuttallia japonica</i> (シオサザナミ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 県外では普通種で多産地も存在するが、本県では確認される個体数は非常に少なく、明らかに強い減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約40mm, 殻高約40mm。殻は卵形, 薄質で, 殻頂から後背縁にかけて2本の細かい白帯が走る。殻表は平滑, 藁色の厚い殻皮に覆われ, 内面は紫色。靱帯は太く突出する。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(仁尾町・詫間町)。 県外: 北海道南部以南から九州。韓国から中国。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟や河川水の影響のある前浜干潟の砂泥底に生息する。1977年の記録では県西部において「多産」したとされているが、現在では三豊市仁尾町でごく少数の個体が確認されるのみである。過去には県東・中部でも普通に生息していたと推測されるが、最近では死殻もほとんど確認できない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口干潟の砂泥底に生息するため、河川改修や水質汚濁が減少要因であると考えられる。また、本種は「アケミ貝」と称して釣り餌として採取されることがあり、それらの採集圧も無視できない。加えて産地不明の本種あるいは近似種が、生体のまま販売されており遺伝的攪乱が生じている可能性もある。		
特 記 事 項	愛媛県において絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されている。		
文 献	5, 10, 11, 40, 57, 73	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹

フルイガイ <i>Semele cordiformis</i> (アサジガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦ 1970年代の記録では産出状況が「普通」とされているが、近年では死殻すら確認できず、極めて強い減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約40mm, 殻高約35mm。殻は類円形, 厚く, 膨らみは弱い。殻表は細かい放射肋と輪脈が重なり布目状となる。殻色は白色で, 殻頂は赤橙色に彩色され, 橙色の放射彩が入る。		
分 布	県内: 三豊市(詫間町), 多度津町, 丸亀市, 坂出市。 県外: 房総半島以南の日本本土, 台湾から中国大陸。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮通しの良い礫干潟の転石下や転石の隙間などの砂礫底に生息する。1978年の記録では産出状況は「普通」とされていることから、1970年代までは健全な個体群が存在したと考えられる。しかし、近年では、本種的好む礫干潟の環境が残されているにも関わらず死殻すら確認できない。本県では絶滅した可能性もある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	1970年代以降の海岸開発などによる生息環境の破壊, 水質汚濁, 底質環境の悪化などによって生息数が激減したと考えられる。ただし、好適と思われる環境が残っているにも関わらず個体数が減少していることから、海況の変化が原因である可能性もある。		
特 記 事 項	三重・福岡・熊本の3県で絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	12, 36, 70, 117	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 多度津町 撮影者: 松田春菜

サビシラトリ <i>Limecola contabulata</i> (ニッコウガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦ 1970年代の時点ですでに生息数が少なかったことが推測され、近年でも生貝はほとんど採集されない。		
種 の 特 徴	殻長約50mm, 殻高約45mm。殻は卵形, 灰白色で, 後端はやや突出し裁断状。殻表に光沢は無く, 弱く細かい成長輪脈が刻まれる。茶褐色の殻皮を持つが, 殻頂周辺では剥落する。		
分 布	県内: 丸亀市(土器川河口・安達川河口), 宇多津町(大東川河口), 高松市(屋島) 県外: 北海道から九州。ロシアから中国。		
県 内 で の 生 息 状 況	主に河口干潟の泥～砂泥底に埋込んで生息する。1970年代の時点で死殻が「稀」に採集される程度であったとされ、70年代にはすでに個体数が少なかったことが推測される。近年でも、河口域で古い死殻が採集されることがほとんどで、個体群はほぼ消滅寸前である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本県では本種が好む河口環境の発達が乏しいため、1970年代の時点で個体数が少なかったのもそれらに起因する可能性がある。また主に河口干潟の泥底に生息するため、近年の河川改修による生息場所の破壊, 水質汚濁によって、さらに減少傾向が強まったと考えられる。残存する河口干潟の保全が望まれる。		
特 記 事 項	兵庫・愛媛県をはじめとして5県で絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	5, 12, 24, 30, 40, 70, 75, 128	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹

*選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ウズザクラ <i>Nitidotellina minuta</i> (ニッコウガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦* 新鮮な死殻は比較的多くの場所で見られるが、生貝が確認される地点は少ない。		
種 の 特 徴	殻長約10mm、殻高約6mm。殻は長楕円形で、薄質、膨らみは弱い。殻頂は後方に位置し、後端は尖る。殻表は白から薄黄色で、殻頂から紅色の色帯が入る個体が多く、光沢は強い。		
分 布	県内：観音寺市、三豊市、宇多津町、坂出市、高松市。 県外：北海道南部から九州、朝鮮半島、中国大陸。		
県 内 で の 生 息 状 況	前浜干潟から潮下帯の砂泥底に埋込んで生息する。1970年代の記録において産出状況は「稀」であるとされていることから、従来、生息数は多くない種であると推測される。近年でも県中・西部を中心に新鮮な死殻が確認される地点は比較的多く、顕著な減少傾向にあるとは言えないものの、生貝が確認される地点は少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	主にアマモ場周辺の潮通しの良い砂泥底に生息することから、埋め立てや港湾整備などの海岸開発、水質汚濁、底質汚染が減少要因であると考えられる。また海砂採取は潮下帯に生息する個体群を縮小させる要因となった可能性が高い。		
特 記 事 項	兵庫県では絶滅危惧II類(VU)、三重・愛知県では準絶滅危惧(NT)に指定されている。		
文 献	10, 11, 40, 70, 75, 128		執筆者：瀬尾友樹



被写体：三豊市 撮影者：瀬尾友樹

サギガイ <i>Rexithaerus sector</i> (ニッコウガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 1977年の記録では産出状況が「普通」とされているが、現在では古い死殻が得られるのみで、個体数が大きく減少している。		
種 の 特 徴	殻長約55mm、殻高約40mm。殻は卵形、殻後端は裁断状。殻表は光沢があり平滑、殻のふくらみは弱い。靱帯は黒色で大きい。殻色は白色で、生時は光沢のある茶色の殻皮をかぶる。		
分 布	県内：三豊市(仁尾町・詫間町)。 県外：北海道から九州、サハリン、韓国から台湾。		
県 内 で の 生 息 状 況	砂浜海岸の潮間帯下部から潮下帯の砂底に生息する。1976年に三豊市仁尾町父母ヶ浜で採集された新鮮な合弁標本が香川大学博物館に現存し、1970年代までは燧灘沿岸を中心に健全な個体群が存在したと推測される。しかし、近年では父母ヶ浜で本種は確認できず、燧灘沿岸で古い死殻が少数採集されるのみである。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	貧栄養な外洋に生息する傾向の強い種であり、水質汚濁、底質環境の悪化に弱いと考えられる。主に潮下帯に生息するため生息の現状の把握が困難であり、ドレッジ調査などを含めた生息状況の把握が望まれる。		
特 記 事 項	千葉・愛知・三重の3県で絶滅危惧II類(VU)、大阪・岡山など4府県で準絶滅危惧(NT)。		
文 献	10, 11, 24, 40, 70, 75		執筆者：瀬尾友樹



被写体：三豊市 撮影者：瀬尾友樹

ユウシオガイ <i>Jitlada rutila</i> (ニッコウガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 燧灘沿岸では今も多産地が複数存在するが、それ以外の地域では個体数は少ない。		
種 の 特 徴	殻長約15mm、殻高約12mm。殻は亜三角形、薄く、膨らみは弱い。殻頂は中央に位置し、後端はやや突出する。殻表は桃色または橙黄色で稀に白色の個体が出現し、弱い光沢がある。		
分 布	県内：観音寺市、三豊市、多度津町、丸亀市、高松市。 県外：陸奥湾以南から九州、韓国から中国。		
県 内 で の 生 息 状 況	前浜干潟の中～低潮帯砂泥底に埋込んで生息する。県下の沿岸部に広く生息しているが、多産地は県西部沿岸の河川水の影響を受ける大規模な前浜干潟に限られる。そのような環境が限定される県東・中部では確認される個体数は総じて少なく、個体群は脆弱である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は陸域に近く還元的でない砂泥底に生息するため、埋め立てや水質汚濁による影響を強く受けたと考えられる。また、最近(2017年以降)では、多産地のひとつである父母ヶ浜において、多数の観光客による干潟上での写真撮影が行われるようになっており、踏みつけによる悪影響が生じている可能性も否定できない。		
特 記 事 項	千葉・兵庫県で絶滅危惧I類(CR+EN)、大阪府などで絶滅危惧II類(VU)に指定。		
文 献	10, 11, 24, 30, 40, 70, 75, 102, 128		執筆者：瀬尾友樹



被写体：三豊市 撮影者：瀬尾友樹

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ウネナシトマガイ		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
Neotrapezium liratum (フナガタガイ科)			
選 定 理 由	⑤⑦* 一般的に普通種とみなされている種であるが、本県では好適な環境に乏しく、個体数も多いとは言えない。		
種 の 特 徴	殻長約25mm、殻高約13mm。殻は長楕円形、やや厚く、膨らみは弱い。殻表は白色の地に赤紫色の放射彩が走り、殻皮は剥離しやすい。内面は白色、後背縁付近に紫色の斑が入る。		
分 布	県内：県東部から中部の河口域。 県外：陸奥湾以南から九州。朝鮮半島から中国大陸沿岸。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の転石間に附着して生息する。1970年代の記録では個体数は「普通」とされているが、近年では規模の大きな河口干潟でも確認例は少ない。全国的には多産する普通種であるが、本県では本種が生息する汽水環境に乏しく、その環境も年々開発等により縮小していることから、個体数も減少傾向にあると思われる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は汽水環境にある泥礫地に生息するため、河川改修による生息地の破壊が直接的な減少要因であると考えられる。特に河口堰の設置は元々発達が乏しい本県の汽水域をさらに狭める上、本種の好む安定した低塩分環境を消失させることから、個体数の減少を引き起こした可能性が高い。		
特 記 事 項	東京都では絶滅(EX)、千葉県では絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	10, 12, 55, 70, 73, 102	執筆：瀬尾友樹	



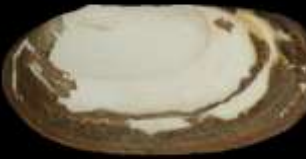
被写体：宇多津町 撮影者：瀬尾友樹

ヤチヨノハナガイ		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
Raeta pellicula (バカガイ科)			
選 定 理 由	過去の記録と比較して顕著な減少傾向は見られないが、状態の良い環境でのみ確認できるため、今後環境が悪化すれば急激に減少することが懸念される。		
種 の 特 徴	殻長約45mm、殻高約30mm。殻は垂三角形できわめて薄質、後端は細まり、畝状の輪脈を有する。殻表は白色半透明でやや光沢があり、生時は茶褐色の薄い殻皮に覆われる。		
分 布	県内：観音寺市(豊浜町)、三豊市(仁尾町・詫間町)、宇多津町、土庄町。 県外：本州から九州。ロシア沿海州からインド・西太平洋。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に埋込んで生息する。近年でも県中・西部沿岸を中心に新鮮な死殻が比較的普通に見られ、1970年代の記録でも死殻が稀に確認できる程度であったとされることから、顕著な減少傾向にあるとは言いがたい。しかし、近年でも生貝は全く確認できておらず、今後の個体数の減少が懸念される。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮通しが良く底質が還元的でない大規模な前浜干潟から浅海域に生息するため、埋め立てや離岸堤の設置などの海岸開発、海砂採取、水質汚濁、底質汚染が減少要因であると考えられる。特に潮流を停滞させ底質を攪乱させる海中構造物の設置は厳密に慎まれるべきである。		
特 記 事 項	愛知・福岡県など4県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)、岡山県で絶滅危惧 II 類(VU)に指定されている。		
文 献	13, 24, 36, 70, 75, 102, 128	執筆：瀬尾友樹	



被写体：宇多津町 撮影者：瀬尾友樹

オオトリガイ		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
Lutraria maxima (バカガイ科)			
選 定 理 由	③⑤⑦* 県下全域の沿岸部で広く死殻は確認されるものの、生貝が確認されることは少ない。特に干潟において生貝が確認できる地点は限られる。		
種 の 特 徴	殻長約120mm、殻高約55mm。殻は長楕円形、殻頂は前方に寄り、後背縁は直線状になる。厚い茶褐色の殻皮に覆われるが殻頂付近では剥落する。水管は長く、殻の外に出る。		
分 布	県内：県下全域の沿岸部に広く生息するが、県東部では少ない。 県外：千葉県以西から九州。朝鮮半島から中国大陸。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から水深10mまでの砂泥底に生息する。釜灘沿岸の前浜干潟から潮下帯まで砂底環境が良好に残っている地点では安定した個体群が存在する。その他の地点では死殻は普通に見られるものの生貝が採集されることは少ない。多産地である仁尾町の干潟では方言名「ドツブリ」と呼ばれ潮干狩りに際して採取されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮通しの良い干潟から潮下帯の還元的でない砂泥底に生息するため、海岸開発や海砂採取、水質汚濁が減少の要因になったと考えられる。三豊市仁尾町など前浜干潟が良好に残っている地点でのみ生貝が確認できるため、本種は良好な前浜干潟環境の指標種として位置づけることが可能と思われる。		
特 記 事 項	千葉県では絶滅危惧 I 類(CR+EN)、大阪府では絶滅危惧 II 類(VU)に指定されている。		
文 献	10, 11, 70, 73, 75, 128	執筆：瀬尾友樹	



被写体：三豊市 撮影者：瀬尾友樹

*選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ミルカイ <i>Tresus keenae</i> (バカガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ 潮下帯には安定した個体群が残されているが、干潟で生貝が確認されることはほとんどない。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約150mmを超える大型種。殻は横に長い卵形、厚く、やや膨らむ。殻は白色で、茶褐色の厚い殻皮を被り、殻の外側まで突出する水管を覆う。後背縁に1本の低い稜角が走る。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市, 丸亀市, 坂出市, 宇多津町, 高松市。 県外: 北海道南部から九州。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に生息する。過去の記録では個体数は「普通」であったとされ、現在も潮下帯には漁獲可能な程度の個体群は維持されている。しかしながら、80年代の時点で資源量が減少していることが指摘されており、近年も干潟では稀にしか生貝が見られないことから、個体数は依然として少ないと考えられる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は潮通しの良い海峡部のやや水深が深い場所に分布の中心があることから、海砂採取による生息場所の破壊、水質汚濁、底質汚染の影響を受けやすいと考えられる。また香川県における本種の漁獲量は操業許可直後に最も多く、その後激減して回復していないため、過剰な漁獲も減少要因となっている可能性が高い。		
特 記 事 項	兵庫県などで4県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)、岡山県など1府2県で絶滅危惧 II 類(VU)に指定。		
文 献	9, 10, 11, 24, 30, 36, 70, 73, 75, 102, 117, 128	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 | 撮影者: 瀬尾友樹

バカガイ <i>Maetra chinensis</i> (バカガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑦⑧* 県外では多産地も存在するが、本県では生貝の確認例が減少しており、予防的に選定する。		
種 の 特 徴	殻長約60mm, 殻高約45mm。殻は横に引き伸ばされた二等辺三角形、やや薄質で、膨らみは強い。殻表は黄褐色の地に茶褐色の放射彩が入り、腹縁付近の太く低い成長脈以外は平滑。		
分 布	県内: 県内沿岸に広く分布する。 県外: 北海道以南から九州。サハリン、朝鮮半島から中国大陸沿岸。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に埋込んで生息する。死殻は県内沿岸で広く採集されるが生貝の確認例は限られる。生貝が継続的に確認できているのは、燈籠沿岸の有明浜、仁尾干拓跡干潟など大規模な前浜干潟が主である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	浅海域の砂泥底に生息するため、海岸開発、海砂採取、水質汚濁などの影響を受けたと考えられる。ただしこれらの要因だけでは減少理由を一概には説明できない。本種を継続的に確認できているのは、他の貝類の種多様性も高い場所である場合が多く、そのような環境の包括的な保全が必要であると思われる。		
特 記 事 項	熊本県で絶滅危惧 II 類(VU)、大阪府では準絶滅危惧(NT)に指定されている。		
文 献	10, 11, 40, 73, 75	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 観音寺市 | 撮影者: 瀬尾友樹

シオフキ <i>Maetra quadrangularis</i> (バカガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 他県では現在も普通種であり、本県でも過去に多産した記録があるが、近年では生体は稀にしか採集されない。		
種 の 特 徴	殻長約40mm, 殻高約35mm。殻は丸みを帯びた重三角形、やや薄質で、膨らみは強い。殻表は白から茶色となり、腹縁付近に低い成長脈が入る。殻内面は白色、套線湾入は浅い。		
分 布	県内: 燈籠、備讃瀬戸、播磨灘沿岸に広く分布する。 県外: 宮城以南から九州。ロシア沿海州、朝鮮半島から中国大陸沿岸。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に埋込んで生息する。1970年代の産出状況は多かつたとされているが、近年では摩滅した死殻が稀に採集される程度で、生貝が採集されるのは燈籠沿岸の大規模な前浜干潟に限られる。近縁種のバカガイよりも格段に生貝の確認例が少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	浅海域の砂泥底に生息するため、海岸開発、海砂採取、水質汚濁などの影響を受けたと考えられる。ただし本種の減少をこれらの要因だけでは十分に説明できない。バカガイと同様に、本種を確認できているのは、他の貝類の種多様性も高い場所である場合が多く、それらの環境の包括的な保全が必要であると思われる。		
特 記 事 項	兵庫県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)、宮城県・大阪府で情報不足(DD)に指定されている。		
文 献	10, 12, 14, 30, 40, 73, 75	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 三豊市 | 撮影者: 瀬尾友樹

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i> (マルスダレガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 他県では普通種であるが、県内では生息場所が限定され個体数も少ない。		
種 の 特 徴	殻長約50mm, 殻高約45mm。殻は類円形, 厚く, よく膨らむ。殻表は不規則な細かい成長脈と殻後方に放射条線が入る。殻色は採集直後は黒色で, その後は黄土色となる。		
分 布	県内: 県内の河口域に広く分布。 県外: 青森県以南から九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の泥底に埋在して生息する。県内の河口干潟において広く死殻は確認されるが, 一回の調査で生貝が複数個体確認される地点は少ない。特に県東部では死殻が確認されることも稀で, 個体数は明らかに減少傾向にあると考えられる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本県は河口干潟の発達が弱く泥質環境に乏しいことから, 本種の生息環境は元々限定されている。これに加え, 河川改修, 河口堰の設置などによる生息場所の消失が最大の減少要因であると考えられる。		
特 記 事 項	大阪府では絶滅(EX), 千葉県では絶滅危惧II類(VU)に指定されている。		
文 献	10, 11, 40, 55, 73, 75	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹

シラオガイ <i>Circe undatina</i> (マルスダレガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦ 過去には多産した記録があるが, 近年では県内全域で著しく摩滅した死殻しか採集されない。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約40mm, 殻高約40mm。殻は卵円形, 厚く, 膨らみは弱い。殻表は不規則な輪肋があり, 殻頂付近では細かい分岐細肋が入る。殻色は黄白色の地に茶褐色のハ状の放射彩が入る。		
分 布	県内: 三豊市(詫間町), 多度津町, 丸亀市, 坂出市, 土庄町。 県外: 房総半島以南, 能登半島以南から九州。中国大陸沿岸。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に浅く埋在して生息する。1977年の記録では個体数は「多い」とされているが, 近年では生貝は全く確認されず, 著しく摩滅した死殻が稀に採集できるのみである。潮下帯にも生息するためまだ未発見の個体群が残っている可能性はあるが, 著しく個体数が減少しているのは確実である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は潮通しが良く還元化していない底質に生息するため, 水質汚濁, 底質汚染による影響を特に受けやすいと考えられる。また底質に浅く埋在する生態から, 入江のように波静かで安定した底質の場所を好むが, そのような環境は漁港建設などの海岸開発によって容易に消失しやすい。		
特 記 事 項	千葉県では絶滅(EX), 岡山・長崎県では絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	10, 11, 14, 24, 40, 70, 73, 75, 117, 128	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹

ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i> (マルスダレガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑥⑦ 県東・中部沿岸ではほぼ絶滅状態にあり, 県西部でも近縁の外來種との交雑が生じている。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約55mm, 殻高約45mm。殻は亜三角形, 厚く, やや膨らむ。殻表は栗色から黄褐色の字にハの字形の放射彩を持つ個体など多様。平滑で, 光沢のある殻皮を被る。内面は白色。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(仁尾町・詫間町), 宇多津町, 坂出市。 県外: 陸奥湾以南~九州。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口から前浜干潟に浅く埋在して生息する。県東部では死殻も確認できず, 県中部では2010年に大東川河口で生貝1個体が採集されて以降, 生息を確認できない。県西部では比較的個体数が多いが, これらの中には国外來種シナハマグリとの交雑個体が存在することが明らかとなっており, 深刻な遺伝子移入が生じている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は成長に伴い河口から前浜干潟へと移動する性質を持つことから, 河川改修, 海岸開発に加え, 陸域と海洋の水質汚濁の影響を同時に受けたと考えられる。またシナハマグリとの交雑個体を駆除することは現実的に不可能に近く, これ以上の交雑を防ぐためにもシナハマグリの放流は厳密に慎まれるべきである。		
特 記 事 項	千葉県・大阪府で絶滅(EX), 兵庫・岡山など3県で絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	5, 10, 15, 24, 30, 36, 40, 70, 73, 75, 102, 104, 128	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹

※選 定 理 由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ヤタノカガミ <i>Dosinia troscheli</i> (マルスダレガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦* 過去には本種との識別が困難な「マルヒナガイ」が普通に確認されており、それが本種であったならば減少傾向にある可能性が高い。		
種 の 特 徴	殻長約53mm, 殻高約49mm。殻は円形, 盾面は弱く翼状に立ち上がる。小月面は茶褐色。殻表は細かい輪脈があり, 通常赤褐色の放射彩を有するが, 欠くこともある。		
分 布	県内: 三豊市(仁尾町), 丸亀市, 宇多津町, 高松市(庵治町), 土庄町, 小豆島町。 県外: 房総半島以西から九州, 日本海。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に生息する。1970年代の近似種の記録が本種ならば, 当時は普通種であったといえるが, 近年では稀に死殻が確認される程度で, 最近の生貝の確認例は宇多津町での1個体のみである。確実に本種と同定される個体は, 他の希少種が多数生息する状態の良い前浜干潟からのみ確認される。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮通しが良く底質が還元的でない前浜干潟から浅海域に生息するため, 埋め立てなどの海岸開発, 海砂採取, 水質汚濁, 底質汚染などによる影響が考えられる。また, 本種は比較的普通に見られる近似種カガミガイとの区別が困難であるため, 開発等に伴うアセスメント調査の際には特別な注意が払われるべきである。		
特 記 事 項	三重・岡山県の2県で情報不足(DD)に指定されている。		
文 献	24, 36, 70	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹

ウスハマグリ <i>Aphrodora kurodai</i> (マルスダレガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧I類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦* 全国的に希少な種であり, 本県では継続的に生貝が確認されているが, 生息地点数は少ない。		
種 の 特 徴	殻長約40mm, 殻高約30mm。殻は亜三角形, やや薄く, 膨らみは強い。殻表は白色, 平滑で, 薄い茶褐色の殻皮を被るが剥離しやすい。生時は殻表に砂粒を付着させる。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(仁尾町・詫間町), 宇多津町, 高松市(庵治町), 備讃瀬戸沖。 県外: 房総半島から九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	アマモ場を伴う干潟から潮下帯の砂泥底に生息する。1970年代には産出状況は「普通」であったとされ, 現在も生息地では継続的に新鮮な死殻が複数確認され, 生貝も少数ながら確認される。しかし, それ以外の地域では死殻が確認されることも少なく, 減少傾向にあるのは間違いないと思われる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	海岸開発に伴う生息場所の破壊が主要な減少要因であると考えられ, 特に海砂採取は潮下帯に生息する個体群減少の一因であったと推測される。また藻場周辺の潮通しの良い砂泥底に生息することから, 水質汚濁, 底質汚染による直接的な影響に加え, これらに伴う藻場減少の影響を受けた可能性も否定できない。		
特 記 事 項	福岡・長崎県で絶滅危惧I類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	10, 11, 36, 70, 75, 102, 128	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 高松市 撮影者: 瀬尾友樹

ケマンガイ <i>Gafrarium divaricatum</i> (マルスダレガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 県内で生体が確認される産地は県西部に限定され, その他の地域では稀に死殻が採集される程度で個体数は少ない。		
種 の 特 徴	殻長約30mm, 殻高約30mm。殻は横に長い卵円形, 厚く, 膨らみは弱い。殻表は分岐細肋があり, 後端周辺で立ち上がる。殻色は黄褐色の地に茶褐色の線状や山型模様を持つ。		
分 布	県内: 県内沿岸に広く分布するが, 県東部では少ない。 県外: 房総半島以南から九州。朝鮮半島から中国大陸沿岸, 西太平洋。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯から潮下帯までの礫底に浅く埋込して生息する。1970年代には本種は記録されておらず, 元々個体数が少なかった可能性がある。燧灘沿岸の礫干潟では比較的個体数が多いが, 備讃瀬戸沿岸では稀に新鮮な死殻が採集される程度で生貝が採集されることはほとんどない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に外洋水の影響のある礫干潟の礫間に生息するため, 水質汚濁や底質の還元化による影響を受けやすいと考えられる。また潮間帯中部の陸域に近い地点にも生息するため, 海岸開発による影響も懸念される。		
特 記 事 項	千葉県では絶滅危惧I類(CR+EN), 兵庫・岡山では絶滅危惧II類に指定されている。		
文 献	24, 30, 33, 40, 41, 70, 73, 75, 102	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ニッポンマメアゲマキ <i>Pseudogaleomma japonica</i> (ウロコガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 本県では生息する環境が限定され、継続的に確認されることが少ない。		
種 の 特 徴	殻長約10mm, 殻高約5mm。殻は長楕円形, 薄く半透明, 膨らみは弱い。殻表は白色または薄い黄色で, 細かい布目上の彫刻が入り, 光沢が強い。		
分 布	県内: 県内沿岸の泥礫干潟に広く分布する。 県外: 男鹿半島以南から九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	泥礫干潟の転石に付着して生息する。生息地では複数個体が見いだされることもあるが, ある程度規模が大きな泥礫干潟に生息が限定され, その中でも限られた環境に生息する。過去に確認された地点でその後確認されないことも多い。2017年には丸亀市昭和町の生息地が埋め立てによって消失した。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口域に近い泥礫干潟に生息することから, 河川改修や埋め立てに伴う生息地の直接的な消失が最大の減少要因であると考えられる。また気候変動に伴う洪水の頻発は本種の生息環境を荒廃させる要因になり得る。		
特 記 事 項	兵庫県で絶滅危惧 I 類 (CR+EN), 愛知県で絶滅危惧 II 類 (VU) に指定されている。		
文 献	10, 30, 40, 70, 75, 128	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹

マゴコロガイ <i>Peregrinamor ohshimai</i> (ウロコガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦* 既知産地, 個体数共にごく少ないが, 未発見の個体群が存在する可能性を踏まえ, 絶滅危惧 II 類と評価する。		
種 の 特 徴	殻長約6mm, 殻高約3mm。殻は著しく横長の楕円形で, 薄質半透明, 膨らみは強い。腹側から見ると和名の由来となったハート型に見える。殻表は白色, 平滑で, 弱い光沢がある。		
分 布	県内: 丸亀市(園の洲・土器川河口)。 県外: 東京湾以西から九州。日本固有種。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口から潮下帯に埋込して生息するアナジャコ類の腹部に付着する。近年では土器川河口周辺でごく少数の生貝が確認されているのみで, 他地域では死殻も見出すことができない。特殊な生態を持つため未発見の生息場所が存在する可能性もあるが, 現時点で生息範囲, 個体数共に極めて限定的であると言わざるを得ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は宿主であるアナジャコ類に強く依存しており, アナジャコ類の減少要因である浅海域の埋め立て, 水質汚濁, 底質環境の悪化などが, 本種にとっても減少要因になり得る。一方で, アナジャコ類は比較的普通に見られるものの, 本種が確認されることは稀なため, 本種特有の減少要因が存在する可能性もある。		
特 記 事 項	千葉県で絶滅 (EX), 大阪府・愛知県など3府県で絶滅危惧 I 類 (CR+EN) に指定されている。		
文 献	10, 24, 40, 43, 70, 102, 128	執筆: 瀬尾友樹	





被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹


オウギウロコガイ <i>Galeommella utinomii</i> (ウロコガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦* 全国的に希少で, 本県でもこれまで1個体のみしか採集されていない。		
種 の 特 徴	殻長約7mm, 殻高約3mm。殻は楕円形, 薄質半透明で, 膨らむ。殻表は白色, 太い放射筋を多数有する。生時は先端が赤色の触手状突起を有する外套膜に殻が覆われる。		
分 布	県内: 坂出市。 県外: 東京湾～九州。日本固有種と考えられている。		
県 内 で の 生 息 状 況	礫干潟の転石下に付着して生息する。2018年1月の調査で, 坂出市沙弥において乾燥した軟体が付着した打上死殻1個体が採集されたのが, 本県で唯一の記録である。これまで記録が無いこと, 過去の調査で確認されていないことを踏まえると, 本県では著しく個体数の少ない種である可能性が高い。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種が唯一確認されている坂出市沙弥は, 県内でも特に潮流が速い環境であるため, 水質汚濁が生息に悪影響を与える可能性が高い。また転石下に生息するとされていることから, 底質環境の悪化による影響も懸念される。生息場所そのものを破壊する海岸開発も主要な減少要因であると考えられる。		
特 記 事 項	兵庫・福岡県など4県で絶滅危惧 I 類 (CR+EN) に指定されている。		
文 献	30, 36, 70, 102	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 坂出市 撮影者: 瀬尾友樹




※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅


マツモトウロコガイ <i>Paraborniola matsumotoi</i> (ウロコガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)	
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	③⑤⑦* 近年でも生貝が確認されているが、生息地点数、個体数は共に限定されている。			
種 の 特 徴	殻長約9mm、殻高約4.5mm。殻は長楕円形で、薄質不透明、膨らみは弱い。殻表は成長脈に加え、ごく弱い放射肋が全面に入る。殻色は白色だが、殻頂部は褐色となることが多い。			
分 布	県内: 三豊市(詫間町)、丸亀市、坂出市(沙弥島)、高松市(屋島東町)。 県外: 房総半島から九州。			
県 内 で の 生 息 状 況	潮通しが良い備讃瀬戸海域において、入江や小島などによって潮流がやや弱まる礫干潟の還元的環境にある転石下に付着する。県内で生貝が確認されている地点は限定的で、1回の調査で確認できる個体数も少ない。また死殻が採集されることも極めて稀で、生息個体数はごく少ないと考えられる。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は小規模な入江のような環境に生息し、そのような環境は港湾建設や海岸開発によって容易に失われやすい。また、潮通しが良い礫干潟の転石下という微生物環境を好むことから、水質汚濁やそれに伴う転石下の過度な還元化も主要な減少要因であると考えられる。			
特 記 事 項	兵庫県で絶滅危惧 I 類 (CR+EN)、熊本・長崎県で準絶滅危惧 (NT) に指定されている。			
文 献	10, 24, 30, 40, 41, 70, 128			
	執筆: 瀬尾友樹			



スジホシムシモドキヤドリガイ <i>Nipponomysella subtruncata</i> (ウロコガイ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	⑤⑦* 宿主であるスジホシムシモドキが多産する地点では本種の個体数も多いが、それ以外では個体数が少ない。			
種 の 特 徴	殻長約3mm、殻高約2mm。横長の亜三角形、薄質半透明で、やや膨らむ。殻表は弱い成長脈以外は平滑、殻色は白色だが、殻頂周辺は付着物によって赤褐色となる場合が多い。			
分 布	県内: 三豊市(仁尾町)、多度津町、丸亀市、宇多津町、高松市 県外: 福島県～九州。日本固有種と考えられている。			
県 内 で の 生 息 状 況	前浜干潟の砂泥底に埋して生息するスジホシムシモドキの体表に付着する。備讃瀬戸、燧灘沿岸の潮通しの良い前浜干潟では、スジホシムシモドキの生息数も多く、本種が付着している確率も高いが、それ以外の地点で確認されることは少ない。潮下帯にも生息すると思われるが、生息状況は不明である。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種はスジホシムシモドキに選択的に付着することから、スジホシムシモドキが生息する潮通しの良い砂泥底の環境を保全する必要がある。富栄養化・海岸開発による生息環境の悪化や生息地の破壊に伴う宿主の減少は、本種の減少にも直結すると考えられる。			
特 記 事 項	兵庫県では絶滅危惧 I 類 (CR+EN)、大阪府では絶滅危惧 II 類 (VU) に指定されている。			
文 献	10, 13, 24, 30, 43, 70, 75, 128			
	執筆: 瀬尾友樹			

オオノガイ <i>Mya japonica</i> (オオノガイ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 本県は本種が好む環境に乏しく分布が局限される。			
種 の 特 徴	殻長約80mm、殻高約50mm。殻は長楕円形、やや厚く、多少膨らむ。殻表は白色で、褐色の厚い殻皮を被るが、腹縁付近以外は剥落する。殻内面は白色、左殻には靱帯受けがある。			
分 布	県内: 県内全域の汽水域に生息するが、県東部では少ない。 県外: 北海道～九州。朝鮮半島から中国大陆。			
県 内 で の 生 息 状 況	淡水の影響を受ける干潟の泥～砂泥底に深く埋して生息する。過去には多産した記録があり、現在でも比較的規模の大きい河口干潟では死殻が少なからず確認できる。しかし、死殻は摩滅したものが多く、生貝が確認されることも少ないことから、減少傾向にあるのは間違いないと考えられる。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は汽水環境にある干潟の泥～砂泥底に限定的に生息し、汽水環境の発達が乏しい本県では元々の生息範囲が狭いと考えられる。それに加え、河川改修や海岸開発などの生息場所の破壊、水質汚濁、底質環境の悪化が主要な減少要因となっている可能性が高い。			
特 記 事 項	熊本・佐賀県で絶滅危惧 I 類 (CR+EN) に指定されている。			
文 献	5, 10, 11, 24, 30, 40, 57, 70, 73, 75, 128			
	執筆: 瀬尾友樹			

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

バラフマテ <i>Solen roseomaculatus</i> (マテガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 死殻は比較的普通に確認できているが、生貝が確認できる地点は限定されている。		  
種 の 特 徴	殻長約30mm、殻高約8mm。殻は著しく横に長い長方形、背側にやや反る。薄く、膨らみは弱い。殻表は平滑で、白色の地に赤褐色の雲状模様が入り、薄い黄褐色の殻皮を被る。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(仁尾町), 丸亀市, 宇多津町, 高松市(庵治町), 備讃瀬戸沖。 県外: 房総半島以南から九州。朝鮮半島, 中国大陸。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に埋れて生息する。状態の良い前浜干潟周辺では比較的普通に死殻が採集されるが、それ以外の地域で死殻が採集されることは少ない。干潟で生貝が確認できる地点は宇多津町などごく一部の地点のみである。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は潮通しの良い前浜干潟に生息するため、干潟の埋め立てなどによる生息地の破壊、水質汚濁、底質汚染の影響を受けやすいと推測される。また潮下帯の個体群では海砂採取・離岸堤の設置なども減少要因であると考えられる。		
特 記 事 項	千葉・愛知県で絶滅危惧 I 類 (CR+EN), 岡山県など3県で準絶滅危惧 (NT) に指定されている。		
文 献	11, 24, 40, 70, 75, 102, 128	執筆: 瀬尾友樹	

シナヤカスエモノガイ <i>Thracia concinna</i> (スエモノガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦* 死殻は継続的に確認されているが、生貝が確認されることは少なく、産地も少ない。		
種 の 特 徴	殻長約14mm、殻高約8mm。殻は横長の楕円形で後端は裁断状、薄質で、やや膨らむ。殻表は白色、弱い成長脈に加え、微細な顆粒が分布する。内面は絞歯を欠き、弾帯を持つ。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(仁尾町), 宇多津町。 県外: 房総半島から九州。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	前浜干潟から潮下帯の砂泥底に埋れて生息する。1970年代の記録では本種は報告されておらず、従来、個体数が少ない種であると考えられる。窪灘沿岸の前浜干潟低潮帯では生貝が採集され、死殻も継続的に確認できているが、それ以外の地域では死殻が採集されることも稀である。潮下帯の生息状況は不明。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	潮通しの良い大規模な前浜干潟の還元的でない底質を好むことから、海岸開発や海砂採取による生息場所の破壊が主な減少要因であると考えられる。また水質汚濁・底質環境の悪化も減少要因である可能性が高く、離岸堤などの海中構造物の設置は潮流を停滞させるため減少の一因となり得る。		
特 記 事 項	千葉県で絶滅危惧 I 類 (CR+EN), 熊本県で絶滅危惧 II 類 (VU) に指定されている。		
文 献	10, 36, 70, 75, 102	執筆: 瀬尾友樹	

フトヘナタリ <i>Cerithidea moerchii</i> (キバウミナ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 生息地点数は少なくないが、生息範囲は限定されており、地点によっては個体数も少ない。		 
種 の 特 徴	殻長約35mm、殻幅約13mm。殻は塔形で、堅固。殻表は数本の縦肋と螺旋肋が交わり、縦張肋がある。殻頂部は欠損する。殻色は多彩で、一般に白色から紫褐色の色帯を持つ。		
分 布	県内: 県中部から西部の河口に広く生息し、県東部では少ない。 県外: 東北地方から南西諸島。朝鮮半島, 台湾, 中国からベトナム。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の泥上からヨシ原に生息する。泥礫環境がある河口干潟にはおおむね生息し個体数も多い傾向にあるが、小規模な河川では個体数が少なく生息が認められない場合も多い。県内で最大規模の個体群が存在した土器川河口では、2012年にヨシ原の一部で掘削が行われ、2019年現在、いまだ個体群が回復していない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種はヨシ原とその周辺の泥干潟を好み、それらの環境を有しない河口干潟では生息が認められないことから、ヨシ原の掘削、護岸工事、河口堰の設置などの生息場所の変更が、主要な減少要因であると考えられる。また、土器川のように河川改修工事を行う際には、アセスメントに加え何らかの保全対策を講じることが望まれる。		
特 記 事 項	全国の13都道府県でレッドデータブックに掲載されている。		
文 献	10, 11, 23, 24, 28, 29, 40, 43, 55, 70, 73, 75, 128	執筆: 瀬尾友樹	

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ヘナタリ <i>Pirenella nipponica</i> (キバウミナ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦ 1978年の記録では産出状況は「普通」とされているが、近年では摩滅した ⑧* 死殻しか確認できず、個体数の減少が顕著である。		
種 の 特 徴	殻長約30mm, 殻幅約13mm。細長い円錐形で、次体層には3本の螺肋があり、縫合下の螺肋の幅が最も広い。螺層上部では縦肋が強くなる。殻口外唇は肥厚し、広がる。		
分 布	県内: 三豊市(詫間町), 多度津町, 丸亀市, 宇多津町, 坂出市, 高松市。 県外: 東京湾以南の本州, 琉球列島。韓国から台湾。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口域泥底の表層を匍匐して生息する。1970年代までは県内各地の河口域に広く生息していたと推測されるが、近年では摩滅した死殻ばかりで生体を確認できない。死殻すら確認できない近縁種のカワアイと比べると絶滅した可能性は幾分低い、それでも個体群が危機的状況にあることに変わりはない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口域泥底に生息するため、泥干潟の発達が少ない本県では、元々個体群が脆弱であった可能性がある。それに加え、高度経済成長期以降の埋め立て、河川改修などの生息環境の悪化により、個体数が急激に減少したと考えられる。		
特 記 事 項	東京都で絶滅(EX), 岡山・愛媛など6県で絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	5, 10, 12, 24, 28, 29, 30, 40, 43, 55, 70, 72, 73, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 高松市 撮影者: 瀬尾友樹

カワアイ <i>Pirenella pupiformis</i> (キバウミナ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ 1978年の記録では産出状況は「多い」とされているが、その後は死殻も採集 ⑧* されていない。		
種 の 特 徴	殻長約30mm, 殻幅約10mm。細長い紡錘形で、次体層には3本の螺肋があり縦張肋と交わって四角形の小結節となる。殻口外唇は近似種のヘナタリほど張り出さない。		
分 布	県内: 中西部河口域のみで記録があるが、河口域に広く生息していたと推測される。 県外: 宮城県以南の本州, 琉球列島。韓国からベトナム。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口域泥底の表層を匍匐する。1978年の記録では産出状況は「多い」とされているが、近年の調査では全く確認できず、1980年代以降に個体数が急激に減少したと考えられる。県下の主要な河口域すべてで調査を行ったものの死殻すら採集されないため、本県では絶滅した可能性もある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は他のウミナ類よりも泥底を好むことが知られており、泥干潟の発達が少ない本県では、元々個体群が脆弱であった可能性がある。それに加え、高度経済成長期以降の埋め立てなどの生息環境の悪化により、個体群が壊滅的な状況に陥ったと考えられる。残存している泥干潟環境の保全が最重要である。		
特 記 事 項	東京都・大阪府で絶滅(EX), 岡山・高知など6県で絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	5, 10, 12, 23, 24, 28, 29, 30, 36, 40, 43, 55, 70, 72, 73, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 丸亀市 撮影者: 松田春菜

タケノコカワニナ <i>Stenomelania crenulata</i> (トゲカワニナ科)		香川県カテゴリ	情報不足 (DD)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ やや信憑性に欠ける文献記録が唯一の報告例であるため、情報不足とする ⑧* が、実際は生息していた可能性が高く、本県からは絶滅したと推測される。		
種 の 特 徴	殻長約40mm, 殻幅約14mm。殻は細長い塔形、やや硬質。殻表は茶褐色で、数本の殻底肋を持つ以外は平滑、鈍い光沢がある。殻頂部は浸食される場合が多い。		
分 布	県内: 詳細な地名の記録は無い。 県外: 伊豆半島から九州。ムチカワニナと同種とする見解もある。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口汽水域の泥底表層を匍匐して生息する。1930年代のやや信憑性に欠ける文献記録が唯一の報告例であるが、岡山県では過去に生息していたことが知られており、本県で生息していたとしても不自然ではない。ただし仮に過去に生息していたとしても、80年以上生息情報が無く絶滅したものと考えられる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種が仮に絶滅したとするならば、本県では元々汽水環境が限定的であることに加え、河川改修によって生息場所が破壊されたことが絶滅の要因であると考えられる。特に本種は低塩分の泥底を好み、成長段階に応じて移動を行うため、低塩分環境を喪失させ分散を阻害する河口堰の設置が最大の減少要因である可能性が高い。		
特 記 事 項	愛知・岡山県で絶滅(EX), 大阪府・兵庫県など6府県で絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	5, 23, 24, 30, 36, 40, 55, 70, 71, 73, 102	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 高知市 撮影者: 矢野重文

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
<i>Assimineae</i> sp. (カワザンショウガイ科)		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	過去の記録でも限られた環境でごく少数の個体が採集されていたに過ぎず、近年生息が確認されていた地点の一部は消失し、他地点では全く確認できない。		
種 の 特 徴	殻長約4.5mm。殻幅約3.2mm。殻は太い紡錘形、やや厚く、半透明。殻表は平滑で、光沢が強い。殻色は赤褐色から茶褐色で、縫合下と殻底部は黄色を呈する。		
分 布	県内: 観音寺市(豊浜町), 丸亀市, 土庄町。 県外: 陸奥湾以南から九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟ヨシ原の表層や漂着物の下に生息する。土庄町の記録は1970年代のもので現状不明。豊浜町の産地では再確認できない。近年、生息が確認されていた安達川河口でも再確認できず、土器川河口ではヨシ原の掘削が行われ生息地ごと消失した。他地点ではこれまで全く確認できておらず、絶滅した可能性もある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主にヨシ原内に生息し、ヨシ原の発達ที่乏しい本県では元々個体群が脆弱であった可能性がある。それに加え、近年の埋め立て、護岸工事、河口堰の設置などの生息環境の悪化により、ほぼ全ての個体群が消滅するに至ったと考えられる。未発見の個体群の詳細な調査とヨシ原の保全が急務である。		
特 記 事 項	前版の「ムシヤドリカワザンショウガイ」は本種。全国14都道府県でレッドデータブックに掲載されている。		
文 献	5, 24, 30, 40, 43, 47, 55, 70, 75, 102		執筆: 瀬尾友樹



被写体: 土庄町 撮影者: 松田春菜

ヨシダカワザンショウガイ		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
<i>Assimineae yoshidayukioi</i> (カワザンショウガイ科)		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 既知産地では再確認が出来ず、近年生息が確認できる地点は生息範囲、個体数共に極めて限定的である。		
種 の 特 徴	殻長約3.5mm。殻幅約2.5mm。殻は太い紡錘形、やや厚く半透明。螺層はやや膨らみ、縫合は多少くびれる。殻表は赤褐色、平滑で、光沢が強い。臍孔は狭いが明瞭に開く。		
分 布	県内: 丸亀市, 坂出市, 高松市, 東かがわ市, 土庄町, 小豆島町。 県外: 北海道南部から九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の潮上帯からやや高位置の礫間や漂着物の下に生息する。高松・坂出市の既知産地では再確認できていない。一方、2019年には東かがわ市や小豆島において、新たに個体群が発見され、継続的に観察できている土器川では、護岸の撤去が行われた地点で新たな定着を確認した。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	河川改修による生息場所の破壊が主要な減少要因である。特に河口干潟やヨシ原周辺の陸域に接した環境に生息するため、護岸工事の影響を受けやすいと考えられる。一方、土器川の事例は人工構造物の撤去によって本種の保全が可能であることを示唆しており、今後の自然再生の際には検討がなされるべきである。		
特 記 事 項	香川県を含む全国の17都道府県においてレッドデータブックに掲載されている。		
文 献	23, 24, 30, 40, 43, 48, 55, 70, 102		執筆: 瀬尾友樹




被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹


ツブカワザンショウガイ		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
<i>Assimineae estuarina</i> (カワザンショウガイ科)		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 県下では比較的普通に見られるが、生息範囲は限定的で、人為的かく乱によって個体群は消失しやすいと考えられる。		
種 の 特 徴	殻長約3.0mm。殻幅約2.7mm。殻は球形、厚く、半透明。殻表は平滑だが、螺層上部に螺溝を巡らせる個体もある。殻色は黄褐色、2~3本の赤褐色の色帯がある。臍孔は開く。		
分 布	県内: 観音寺市(豊浜町・旧観音寺市), 多度津町, 丸亀市, 坂出市, 高松市, 東かがわ市, 土庄町, 小豆島町。 県外: 宮城県以南から九州, 奄美大島, 沖縄島。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟から内湾奥部において、ハマサジなどの塩性植物が生える泥礫地周辺の礫間や漂着物の下に生息する。県下に広く分布し、産地によっては個体数も多い。しかし、多産地でも生息面積は限定されている場合が多く、わずかな人為的改変によって個体群が消滅する恐れがある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口干潟の泥礫地に生息し、汽水環境の発達が乏しい本県では元々個体群が脆弱であった可能性がある。それらに加え、近年の護岸工事、河川内の浚渫、河口堰の設置などに伴って生息範囲が狭められ、各個体群は縮小傾向にあると考えられる。		
特 記 事 項	ヒメカワザンショウは同種。全国の15都道府県でレッドデータブックに掲載されている。		
文 献	24, 30, 40, 55, 57, 70, 75, 102		執筆: 瀬尾友樹




被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

オオウスイロヘソカドガイ <i>Paludinellassiminea tanegashimae</i> (カワザンショウガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤⑦* これまで1ヶ所のみで死殻が確認されただけであり、生息数は極めて少ない可能性が高い。		
種 の 特 徴	殻長約7mm。殻幅約4mm。殻は太い塔形、厚く、半透明。螺塔は高い。螺層の膨らみは弱く、縫合は多少くびれる。殻表は平滑で、光沢がある。殻色は赤褐色。		
分 布	県内:小豆島町。 県外:茨城県・男鹿半島以南から九州(種子島・屋久島)。		
県 内 で の 生 息 状 況	岩礁地帯飛沫帯において岩の間隙や転石下に付着する。本県では小豆島東部の1ヶ所のみで生息が確認されており、これまで死殻しか採集されていない。生態が特殊であるため、まだ未発見の個体群が存在する可能性もあるが、他地点で全く確認されていないことから、個体数は極めて少ない可能性が高い。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	主に自然海岸の岩礁地に生息し、道路建設や護岸工事などにより生息場所の破壊が行われやすい。加えて、外洋寄りの環境に生息することから、水質汚濁も減少要因であると考えられる。また近年の生息状況は不明であるため、詳細な調査を行い、正確な生息状況の把握を行うことが望まれる。		
特 記 事 項	全国5都道府県でレッドデータブックに掲載されている。		被写体: 小豆島町 撮影者: 松田春菜
文 献	30, 57, 108		執筆: 瀬尾友樹

クリイロカワザンショウガイ <i>Angustassiminea castanea</i> (カワザンショウガイ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 県下の河口域に広く分布するが、生息範囲は限定され、個体数も少ない場合が多い。		
種 の 特 徴	殻長約5.5mm。殻幅約3.5mm。殻は塔形、やや厚く、半透明。螺塔は高く、螺層はほとんど膨らまない。殻表は平滑で、縫合下に1本の螺溝が入る。殻色は赤褐色。		
分 布	県内:観音寺市(豊浜町・旧観音寺市)、丸亀市、坂出市、高松市、さぬき市、東かがわ市、土庄町、小豆島町。 県外:岩手県以南から九州(種子島)。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の泥礫地やヨシ原のやや高い位置において、表層や礫間、漂着物の下に生息する。県下に広く分布し、土器川河口、新川河口などでは個体数も多い。しかし、比較的個体数が多い場所でも生息範囲は限定されており、特にヨシ原を伴わない河口干潟ではほとんど見られない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口干潟のヨシ原周辺に生息し、汽水環境の発達が乏しい本県では元々個体群が脆弱であった可能性がある。加えて、近年の護岸工事、河川内の浚渫、河口堰の設置などによって生息範囲が狭められ、各個体群は縮小傾向にあると考えられる。		
特 記 事 項	全国の12都道府県でレッドデータブックに掲載されている。		被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹
文 献	13, 24, 30, 40, 43, 47, 55, 57, 70, 75, 108, 128		執筆: 瀬尾友樹

カワザンショウガイ <i>Assiminea japonica</i> (カワザンショウガイ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤⑦* 県下の河口域に広く分布するが、生息範囲は限定され、わずかな人為的変化によって個体群が消滅する恐れがある。		
種 の 特 徴	殻長約5.0mm。殻幅約3.5mm。殻は球形で厚く、ピロート状の殻皮を有する。螺層の膨らみは強く、縫合のくびれも強い。殻色は黄褐色で、赤褐色の3本の色帯を巡らせる。		
分 布	県内:観音寺市、三豊市、丸亀市、宇多津町、坂出市、高松市、東かがわ市、土庄町、小豆島町。 県外:北海道南部以南から九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の礫地やヨシ原において、表層や礫間、漂着物の下などに生息する。県下に広く分布し、土器川河口、新川河口周辺などでは個体数も多い。また、他のカワザンショウ類がほとんど生息していないヨシ原の無い小規模な河口干潟にも本種は生息している。ただし、個体数が多い生息地でも生息範囲は限定されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口干潟のヨシ原周辺に生息し、汽水環境の発達が乏しい本県では、元々個体群が脆弱な可能性がある。加えて、近年の護岸工事、河川内の浚渫、河口堰の設置などによって、生息範囲が狭められ、各個体群は縮小傾向にあると考えられる。		
特 記 事 項	全国の3都道府県でレッドデータブックに掲載されている。		被写体: 高松市 撮影者: 瀬尾友樹
文 献	40, 47, 55, 57, 75, 108, 117		執筆: 瀬尾友樹

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ヒラドカワザンショウガイ <i>Assiminea hiradoensis</i> (カワザンショウガイ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤⑦*	県下の河口域に広く分布するが、生息範囲は限定され、わずかな人為的改変によって個体群が消滅する恐れがある。	
種 の 特 徴	殻長約6.8mm、殻幅約4.7mm。殻は球形で厚く、螺層の膨らみは弱く、縫合のくびれも弱い。殻表は平滑で光沢がある。殻色は茶褐色から赤橙色、赤みを帯びた個体が多い。		
分 布	県内: 観音寺市(豊浜町・旧観音寺市)、三豊市、丸亀市、坂出市、高松市、東かがわ市、土庄町。 県外: 陸奥湾以南から九州。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の礫地やヨシ原において、表層や礫間、漂着物の下などに生息する。県下に広く分布し、土器川河口、新川河口周辺などでは個体数も多い。しかし、比較的個体数が多い場所でも生息範囲は限定されており、特にヨシ原を伴わない河口干潟ではほとんど見られない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口干潟のヨシ原周辺に生息し、汽水環境の発達が少ない本県では元々個体群が脆弱な可能性がある。加えて、近年の護岸工事、河川内の浚渫、河口堰の設置などによって生息範囲が狭められ、各個体群も縮小傾向にあると考えられる。		
特 記 事 項	ダテカワザンショウは同種。茨城・愛知県で絶滅危惧II類(VU)に指定されている。		
文 献	30, 40, 47, 55, 75	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 高松市 撮影者: 瀬尾友樹

ヤマトクビレガイ <i>Truncatella pfeifferi</i> (クビレガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤⑦*	死殻は広く見られ生息地では個体数も多いが、生息地は限定的で生息面積も狭い。	
種 の 特 徴	殻長約6.0mm、殻幅約2.4mm。殻は円筒形、硬質半透明。殻表は赤橙色、通常強い縦筋が入るが、時に消失し平滑な個体も存在する。殻頂は成長に伴い欠失する。		
分 布	県内: 観音寺市、三豊市(詫間町)、丸亀市、坂出市、東かがわ市、土庄町、小豆島町。死殻は広く見られる。 県外: 北海道南部から九州。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	海岸飛沫帯の漂着物下に生息し、本県ではほとんど潮汐の影響を受けない、かなり陸側の場所からも発見される。死殻は県内沿岸で広く見られ、生息地では生貝の個体数も多い。一方で、生貝が確認される地点は数ヶ所程度しかなく、その範囲も限定されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は自然海岸や河口の陸域に近い飛沫帯に生息するため、護岸工事や港湾建設などの影響に晒されやすく、それらによる生息環境の破壊が主な減少要因である。また自然物由来の漂着物が長期間安定している微生物環境を好むが、そのような環境は一見すると不衛生に見られやすく、海岸清掃時には注意が必要である。		
特 記 事 項	香川県を含めた東北地方以西の1都10県でレッドデータブックに掲載されている。		
文 献	12, 24, 27, 30, 40, 41, 43, 55, 57, 75, 108, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹

サザナミツボ <i>Nozema ziczac</i> (ワカウラツボ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦⑧*	既知産地が限定され、確認されている生貝の個体数も非常に少ない。	
種 の 特 徴	殻長約2.3mm、殻幅約1.3mm。殻は微小、太い紡錘形で、薄質半透明。体層は大きく、縫合のくびれは弱い。殻表は淡黄褐色、ジグザグ状になる弱い螺溝を多数巡らせる。		
分 布	県内: 観音寺市、丸亀市、宇多津町。 県外: 陸奥湾以南から九州、南西諸島。朝鮮半島。		
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の砂泥底表層や転石下に付着して生息する。宇多津町ではおそらく大東川に由来すると思われる多数の新鮮な死殻を継続的に確認できているが、生貝は土器川河口で少数個体が採集されたのみで非常に少ない。上記地点以外では観音寺市で確認されているだけで、生息が確認される地点は極めて限定的である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は河口干潟の泥底に生息するため、河口干潟の発達が少ない本県では元々個体群が脆弱であった可能性がある。それに加え、近年の河川改修などによる生息環境の悪化が主な減少要因であると考えられる。死殻は多数見られることがあるため、健在産地が存在する可能性もあり、生息状況の正確な把握が望まれる。		
特 記 事 項	愛知県など3県で絶滅危惧I類(CR+EN)、三重・岡山県で絶滅危惧II類(VU)に指定されている。		
文 献	23, 24, 40, 70, 75, 102, 128	執筆者: 瀬尾友樹	



被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹

*選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

カワグチツボ <i>Fuviocingula elegantula</i> (ワカウラツボ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 生息地が限定され、報告されている個体数も極めて少なく、再調査でも発見できなかった。		
種 の 特 徴	殻長約3.5mm、殻幅約2.0mm。殻は紡錘形で、薄質半透明。体層の膨らみは強く、縫合はくびれる。殻表は黄褐色、ごく弱い螺溝を多数巡らせる。臍孔は狭いが、明瞭に開く。		
分 布	県内: 高松市(詰田川河口・本津川河口)。 県外: 北海道から九州、ロシア沿海州、朝鮮半島、中国。		
県 内 生 息 状 況	河口干潟の軟泥底表層に生息する。2008年に高松市内の3ヶ所でごく少数の生貝が確認されたのが、本県における唯一の報告例であるが、2019年に同産地において調査を行った際には生息を確認できなかった。また産地のうち1ヶ所はすでに埋め立てにより消失した。本県では生息範囲、個体数共に極めて限定されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は主に河口域泥底に生息するため、泥干潟の発達が乏しい本県では、元々個体群が脆弱であった可能性がある。それに加え、河口域の埋め立て、護岸工事、河口堰の設置などの生息環境の悪化により、個体数が急激に減少したと考えられる。潜在的な生息地は存在すると思われるため、早急な生息状況の把握が望まれる。		
特 記 事 項	全国の17都道府県でレッドデータブックに掲載されている。		
文 献	5, 10, 24, 30, 34, 40, 55, 70, 102	執筆: 瀬尾友樹	



被写体: 高松市 撮影者: 復建調査設計KK

ワカウラツボ <i>Wakauraia sakaguchii</i> (ワカウラツボ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ 前版よりも確認地点数は増加したが、依然として生息範囲は限定され、個体数も少ない。 ⑧* 前版よりも確認地点数は増加したが、依然として県下に広く分布しているとは言えず、地点内でも狭い範囲にしか生息していない。さらに、1回の調査で複数個体が見いだされることは稀で、各個体群が脆弱であることに変化は無い。以前に確認されていた地点で再確認されないことも多い。		
種 の 特 徴	殻長約6.0mm、殻幅約3.0mm。殻は紡錘形で、厚い。各螺層はやや膨らむ。殻表は赤褐色で、多数の細い螺状脈を巡らせる。		
分 布	県内: 観音寺市(豊浜町)、丸亀市、宇多津町、高松市、土庄町。 県外: 三河湾以西から九州。朝鮮半島。		
県 内 生 息 状 況	河口干潟の転石下に付着して生息する。前版よりも確認地点数は増加したが、依然として県下に広く分布しているとは言えず、地点内でも狭い範囲にしか生息していない。さらに、1回の調査で複数個体が見いだされることは稀で、各個体群が脆弱であることに変化は無い。以前に確認されていた地点で再確認されないことも多い。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は河口干潟の泥礫地に特徴的な種であり、干潟上に転石があることに加え、アナジャコなどの生物の巣穴が存在することが必要であり、微生物環境が極めて限定されている。そのため、護岸工事、埋め立てなどの河川改修が最大の減少要因であり、また水質汚濁も要因のひとつであると考えられる。		
特 記 事 項	前版のカテゴリと変更なし。6県で絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)に指定されている。		
文 献	5, 24, 30, 36, 55, 70, 75, 102, 112, 128	執筆: 瀬尾友樹	




被写体: 宇多津町 撮影者: 瀬尾友樹


ミズゴマツボ <i>Stenothyra japonica</i> (ミズゴマツボ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦* 現在、県内で確認されている地点は1ヶ所のみで、生息範囲も極めて限定される。		
種 の 特 徴	殻長約4.5mm、殻幅約2.7mm。殻はやや厚く、半透明。螺層の膨らみは強い。殻表は赤褐色または緑白色で、多数の刻点列を巡らせる。殻口は丸く、小さい。		
分 布	県内: 丸亀市(金倉川河口)。 県外: 東北地方以南から九州。朝鮮半島。		
県 内 生 息 状 況	海岸近くの汽水～淡水域に見られ、本県では河口側が水門で仕切られ池状となった淡水環境の泥底に生息している。過去には個体数は多かったとされているが、近年では金倉川河口付近に流入する小河川周辺からのみ知られる。2015年には小河川周辺の水路でも確認できていたが、それ以降再確認できない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本県では本種が生息する低塩分の泥底環境が限定されていることに加え、河川改修などの生息地の破壊、水質汚濁、外来種(スクリンゴガイ)との競争が、本種の主な減少要因であると考えられる。現時点で唯一の生息地の面積は50×10mほどしか無く、たとえ軽微な環境変化であっても本県から絶滅する可能性が極めて高い。		
特 記 事 項	全国の22都道府県でレッドデータブックに掲載されている。		
文 献	5, 13, 22, 24, 30, 36, 40, 43, 52, 55, 70, 102	執筆: 瀬尾友樹	




被写体: 丸亀市 撮影者: 瀬尾友樹


※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅


エドガワミスゴマツボ <i>Stenothyra edogawensis</i> (ミスゴマツボ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)	
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 既知産地の一部は消失し、生息が確認されていた地点でも近年は確認できない。最近確認された産地の個体数も非常に少ない。			
種 の 特 徴	殻長約2.0mm、殻幅約1.2mm。殻は微小、卵円形で、薄質半透明。体層は大きく、縫合はややくびれる。殻口は小さく丸い。殻表は黄褐色、微細な刻点状の彫刻を多数巡らせる。			
分 布	県内: 丸亀市, 宇多津町, 高松市, 土庄町。 県外: 宮城県以南から九州, 沖縄本島。			
県 内 で の 生 息 状 況	河口干潟の軟泥底表層に生息する。2007-08年にかけて高松市内で行われた調査では、複数地点でまとまった個体数が確認されていた。しかし同産地で2019年に調査を行った際には再確認できず、産地の一部はその後埋め立てられて消失した。最近では丸亀市安達川河口で生貝5個体が採集されているのみである。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種は河口干潟の泥底に生息するため、河口干潟の発達ที่乏しい本県では元々個体群が脆弱であった可能性がある。それに加え、近年の河川改修、護岸工事、河口堰の設置などによる生息環境の悪化が本種の主要な減少要因であると考えられる。殻が微小で生息状況の把握が困難なため、今後の詳細な調査が望まれる。			
特 記 事 項	全国13都道府県でレッドデータブックに掲載されている。			
文 献	5, 23, 24, 30, 34, 40, 43, 55, 70, 75, 102			執筆: 瀬尾友樹

シノミミミガイ <i>Cassidula plecotrematoides japonica</i> (オカミミガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)	
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)	
選 定 理 由	③⑤⑦⑧* 生貝は数十年間確認されておらず、死殻が確認されるのも稀である。			
種 の 特 徴	殻長約12mm、殻幅約7mm。殻は太い紡錘形、堅固。殻表は赤褐色で、弱い成長線以外は平滑、淡い光沢がある。殻口は狭く、内唇に2個、軸唇に1個の歯状突起がある。			
分 布	県内: 三豊市, 丸亀市, 宇多津町, 小豆島町。 県外: 三浦半島から九州。			
県 内 で の 生 息 状 況	潮間帯上部の転石間に生息する。過去には死殻が「普通」に見られたとされているが、近年では摩滅した死殻が稀に採集されるのみで、少なくとも40年間生貝が確認できていない。そのため、本県からすでに絶滅した可能性が高いが、生息環境が特殊であるため、生息している可能性は少ないながらもまだ残されている。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	河川改修・海岸開発など生息場所の破壊が最大の減少要因である。本種は波静かな内湾奥部や河口の飛沫帯に生息し、陸域に近い古い自然石護岸の間隙のような微生息環境を好むため、護岸工事や港湾建設など開発の影響に晒されやすい。また水質汚濁も減少要因のひとつであると考えられる。			
特 記 事 項	9県で絶滅危惧 I 類(CR+EN)に指定されている。			
文 献	5, 12, 24, 36, 39, 40, 55, 57, 70, 75, 102, 108, 128			執筆: 瀬尾友樹

ナギサノシタタリガイ <i>Microtralia acteocinoides</i> (オカミミガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)	
		環境省カテゴリ	—	
選 定 理 由	⑤⑦* 未発見の個体群が存在する可能性はあるが、近年生息が確認されている個体数は極めて少ない。			
種 の 特 徴	殻長約3mm、殻幅約1.8mm。殻は楕円形で、薄質半透明。殻表は白色、平滑で淡い光沢がある。殻口内唇部に1~2個、軸唇に1個の歯状突起を有する。			
分 布	県内: 宇多津町, 坂出市, 土庄町, 小豆島町。 県外: 北海道以南から九州, 沖縄本島。			
県 内 で の 生 息 状 況	河口から自然海岸岩礫地の飛沫帯に深く埋もれた転石下に生息する。小豆島における記録は1970年代のもので現状不明。近年では2015年の調査で宇多津町の崩れかけた自然石護岸から生貝1個体が確認されたのみである。生態が特殊なため未発見の個体群が存在する可能性は高いが、生息数は少ないと推測される。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	主に自然海岸の岩礫地に生息し、道路建設や護岸工事などにより生息場所の破壊が行われやすい。加えて、外洋寄りの環境に生息することから、水質汚濁も主な減少要因であると考えられる。潜在的な生息地は存在すると思われるため、早急な生息状況の把握が望まれる。			
特 記 事 項	香川県を含む全国の11都道府県でレッドデータブックに掲載されている。			
文 献	30, 39, 57, 108			執筆: 瀬尾友樹

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ウスコミミガイ <i>Laemodonta exaratooides</i> (オカミミガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)	
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 死殻は広く採集されるが、分布範囲が狭く、確認される生貝の個体数も少ない。			
種 の 特 徴	殻長約6.0mm。殻幅約4.0mm。殻は卵円形、厚く、体層が占める割合は大きい。殻表は黄褐色、多数の細い螺溝を巡らせる。殻口内には歯状突起を持つ。			
分 布	県内: 島嶼部を含めた県沿岸全域。ただし県東部では少ない。 県外: 東北地方から九州。朝鮮半島。			被写体: 三豊市 撮影者: 瀬尾友樹
県 内 で の 生 息 状 況	河口から磯干潟において積み重なった転石の奥のような間隙環境に生息する。死殻は県内沿岸で広く採集され、生貝が見られることも少ない。しかし、生息環境は限定され、同時に複数個体が確認されることも少ないことから、減少傾向にあると考えられる。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息場所が陸域に近いことから、埋め立てや護岸工事など海岸開発・河川改修などの生息地の破壊が主な減少要因であると考えられる。また崩れかけた自然石護岸のような半人工的な環境にも生息するが、垂直護岸のような完全に人工的な環境には生息できないため、本来の生息場所である自然海岸の保全が優先されるべきである。			
特 記 事 項	全国の13府県でレッドデータブックに掲載されている。			
文 献	24, 30, 39, 40, 55, 57, 70, 75, 102, 128		執筆: 瀬尾友樹	

ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i> (シジミ科)		香川県カテゴリー	情報不足 (DD)	
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)	
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 近年の記録は投棄に由来する個体である可能性が否定できず、正確な希少性の評価を行うことが困難。ただし強い減少傾向にあることは確実である。			
種 の 特 徴	殻長約25mm、殻高約21mm。殻は三角形で厚く、やや膨らむ。殻表は黒色の殻皮を被り、細かい成長脈を密に巡らし、光沢がある。内面は淡い紫色から白色。			
分 布	県内: 丸亀市、宇多津町。投棄物と思われる殻は各地で見られる。 県外: 北海道から九州。ロシア沿海州、朝鮮半島。			被写体: 丸亀市 撮影者: 松田春英
県 内 で の 生 息 状 況	河口汽水域の砂泥底に埋まって生息する。1960年頃に丸亀市で採集された標本が現存するもの、現在は同産地で再確認できない。また近年の記録は食用にした後に投棄した個体の可能性が否定できず、仮に投棄個体であった場合、本県における最近の確実な確認例は無く、絶滅した可能性が高い。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本県は汽水環境の発達が乏しく、元々本種の生息可能な環境が限定されていたと考えられる。それに加え、河口堰の設置は本種に好適な低塩分環境を喪失させるため、主要な減少要因であった可能性が高い。また干潟の埋め立て・護岸工事などによって生息場所が破壊されたことも減少の一因であると考えられる。			
特 記 事 項	愛媛・千葉県で絶滅危惧 I 類 (CR+EN)、兵庫・岡山県など8県で準絶滅危惧 (NT) に指定されている。			
文 献	5, 24, 30, 40, 55, 70, 73, 74, 75, 117		執筆: 瀬尾友樹	

マルタニシ <i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (タニシ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)	
		環境省カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)	
選 定 理 由	⑧* 東讃・小豆島地域では、以前生息が確認できた場所でもほとんど見られなくなり、中讃地域でも外来種の侵入によって生息環境が悪化し、減少している。			
種 の 特 徴	殻長約60mm、殻幅40mmの緑がかった黒色の殻をもつ。約6層の円錐形で、老成すると殻頂部が欠損しやすい。螺層が著しく膨れ、縫合部がくびれて深い。赤褐色の蓋をもつ。			
分 布	県内: 中讃地域を中心に観音寺市、三豊市(高瀬町)、高松市、小豆島に分布している。 県外: 北海道から南西諸島まで日本全国に分布している。			被写体: 丸亀市 撮影者: 塩田浩之
県 内 で の 生 息 状 況	溜池や用水路の泥底を這いながら有機物を摂取する。初夏に水を張った水田で幼貝がみられる。丸亀市や満濃町の溜池やその周辺の水路では比較的多くみられるが、高松市、小豆島では最近は見られなくなった。			
絶 滅 危 険 性 の 要 因	溜池やその周辺の水路の改修により生息に適した環境が少なくなっている。また、外来種のスクミンゴガイの猛烈な拡散により、ニッチの同じマルタニシには、その侵入圧が激しくかかる。			
特 記 事 項	香川県を含め、31都府県でレッドリストに掲載されている。			
文 献	55, 87, 111, 118		執筆: 塩田浩之	

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

チリメンカワナ		香川県カテゴリー	情報不足 (DD)
<i>Semisulcospira reiniana</i> (カワナ科)		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤* 最近になって県内の1地域で生息が確認された種であり、現在のところ他に生息が確認できていない。		
種 の 特 徴	殻長20～50mm、殻幅10～15mmの細長い円錐形右巻きの殻をもつ。カワナに比べて螺肋や縦肋が顕著であるが、変異が激しい。成長固体は殻頂部が浸食されている場合が多い。		
分 布	県内:坂出市(王越町)。 県外:北海道から西日本にかけての河川や湖沼に分布する。		被写体: 坂出市 撮影者: 松田春菜
県 内 で の 生 息 状 況	河川や浅い池の泥底や転石上を這っている。坂出市王越町で確認されているが、変異が著しい種のため、他の地域でもカワナと混同している可能性がある。DNA分析など精度の高い調査が必要である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	現在、確認されている場所が限定されているため、河川改修が行われ環境変化に伴い絶滅の可能性がある。		
特 記 事 項	1府3県でレッドリストに掲載されている。		
文 献	55	執筆: 塩田浩之	



ホリアナミジンナ		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
<i>Bythinella (Moria) nipponica</i> (ヌマツボ科)		環境省カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	⑦* 讃岐山脈最上部の浅い小川という特殊な環境に適応した種であり、他県でも特異な環境でのみ確認されている種である。		
種 の 特 徴	殻長1.5mm、殻幅0.8mm程の微小種である。殻は右巻き約4層ほどで殻口が外側にやや広がる。殻は白色から乳白色、半透明で蓋をもつ。		
分 布	県内:中・西讃の讃岐山脈 県外:紀伊半島, 中国山地, 四国, 九州の石灰岩地や山間部上流の沢に分布している。		被写体: 観音寺市 撮影者: 松田春菜
県 内 で の 生 息 状 況	山間部の最上部の沢や洞窟などの浅い場所の転石や落ち葉の下に付着していることが多い。個体数は比較的多い。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林伐採や河川改修などによる環境の変化やダム建設による生息地の破壊により絶滅が危惧される。		
特 記 事 項	九州を中心とした9県で、レッドリストに掲載されている。		
文 献	55, 81, 118	執筆: 塩田浩之	



コウチミジンツボ		香川県カテゴリー	情報不足 (DD)
<i>Saganao morimotoi</i> (ヌマツボ科)		環境省カテゴリー	情報不足 (DD)
選 定 理 由	⑤⑦* 地下水系という特殊な環境が生息場所であるため、ほとんど情報がなく調査も難しい種である。		
種 の 特 徴	殻長約1.5mm、殻幅約0.7mmと微小で約5層の右巻きの殻をもつ。殻色は透明感のある白色で光沢がある。体層が大きく、円錐形で、殻口には石灰質の蓋をもつ。		
分 布	県内:観音寺市(大野原町) 県外:四国各県の掘り抜き井戸から採取されている。		被写体: 観音寺市 撮影者: 松田春菜
県 内 で の 生 息 状 況	地下水系に生息している。パイプ式打ち抜き井戸から排出される砂の中から、偶然発見された。地下水系は、まったく調査できていないため現状は、わからない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	地下水系のため、化学物質の流入による汚染が心配される。		
特 記 事 項	四国各県で情報不足として掲載されている。		
文 献	6, 8, 46, 55, 81, 107, 118	執筆: 塩田浩之	



*選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

マメタニシ <i>Parafoissarulus manchouricus japonicus</i> (エゾマメタニシ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I B 類 (EN)
選 定 理 由	⑧※	以前は、県内各地の溜池に生息していたが、10年以上確認されていない。時折、海岸に打ち上った死殻が採集されるが、県内のものとは断定できない。	
種 の 特 徴	褐色で殻長約13mm、殻幅約7mm、約5層右巻きで10条内外の螺肋がみられるが、個体変異が大きい。卵形で光沢があり、外唇が肥厚して黒くなる。肝ジストマの中間宿主である。		
分 布	県内: 綾川町, 高松市(庵治町), さぬき市(寒川町)。 県外: アジア大陸, 北関東以西の本州, 九州, 四国に分布している。		
県 内 で の 生 息 状 況	以前は、県内各地の溜池や沼、河川の淀みなど止水系で生息し、水草や泥底、礫底など多様な場所で生活していたが、現在では以前生息していた池も含めて確認できていない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	溜池の改修、農薬や化学肥料による汚染など生息環境の悪化に伴い、絶滅に瀕していると考えられる。		
特 記 事 項	香川県も含め、20都府県でレッドリストに掲載している。		
文 献	55, 79, 80, 81, 87, 118	執筆者: 塩田浩之	



被写体: さぬき市 撮影者: 塩田浩之

ヒメマルマメタニシ <i>Gabbia kiusiuensis</i> (エゾマメタニシ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 II 類 (VU)
選 定 理 由	⑧※	水田の環境に適応した種であり、香川県では比較的多く生息しているが、近隣では確認できなくなった県もあり、香川県でも個体数の減少がみられる。	
種 の 特 徴	クリーム色で半透明の殻長約5mm、殻幅約4mm、約5層の右巻き。螺層はよく膨らみ、石灰質の蓋をもつ。土中や藁の下で冬を越し、水田に水が張られると活発に泥底を這う。		
分 布	県内: 西讃地域南部, 小豆島を除く各市町。 県外: 兵庫県以西の本州, 九州, 四国に分布する。		
県 内 で の 生 息 状 況	主に平野部の水田で見られる。同一地域でも生息している水田と生息していない水田がパッチ上に分布する。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	水田という特殊環境にしか適応していないため、水田の改修や土の入れ替え、農薬の使用等による環境の変化があると絶滅する可能性がある。また、用水路から侵入した外来種のスクミンゴガイの稚貝との競争が深刻な状況をもたらしている。		
特 記 事 項	香川県も含めて13府県でレッドリストに掲載されている。		
文 献	55, 78, 79, 81, 89, 118	執筆者: 塩田浩之	



被写体: 三木町 撮影者: 塩田浩之

モノアラガイ <i>Limnaea auricularia</i> (モノアラガイ科)		香川県カテゴリ	情報不足 (DD)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑧※	以前は、溜池や水路でよく見かけることがあったが、最近別の種の移入により生息環境が乱され、急激に個体数が減少した。	
種 の 特 徴	殻長約20mm、殻幅約15mm、右巻きで光沢があり、螺塔が小さく体層が大きく膨らむ。成長固体は殻口が外側へ広がる。		
分 布	県内: 全域の平野部。 県外: 日本各地に分布している。		
県 内 で の 生 息 状 況	流れのない用水路や池の水草や石の上を這う姿が見られたが、近年急速に生息場所が減少している。確認される池では多産する傾向にある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	本種だと思われるものの中に外来種が混じっていることが確認されたため、純粋な在来種がどの程度、生息しているのか精度の高い調査が必要である。		
特 記 事 項	大阪府では絶滅危惧 I 類、京都府と福岡県で準絶滅危惧種とされている。		
文 献	55, 81, 91, 111, 114, 118	執筆者: 塩田浩之	




被写体: 高松市 撮影者: 松田春菜


※選 定 理 由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅


ヒメヒラマキミズマイマイ <i>Gyraulus pulcher</i> (ヒラマキガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I B 類 (EN)
選 定 理 由	⑦⑧※ 生息が確認できている地域が少なく限定されている。近年、同じ環境に適応した外来種の急激な分布拡大により、ほとんど生息が確認できなくなった。		
種 の 特 徴	淡褐色から褐色の薄質、右巻きだが、軟体部は左巻き状態で生活している。殻長約0.8mm、殻幅約3mmの円盤状で臍孔が非常に広く、殻径の半分程度を占める。		
分 布	県内: まんのう町, 坂出市, 東かがわ市, 小豆島 県外: 日本全国に分布している。		
被写体:	小豆島町	撮影者:	
県 内 で の 生 息 状 況	浅い池や水田, 休耕田, 湿地などで確認されているが、個体数も少なく、ほとんどの場所で再確認できていない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	溜池の改修や水田, 休耕田, 湿地の埋め立て, 宅地化により、生息できる場所が極めて少なくなっている。また、農業や化学肥料に伴う水質汚濁により生息環境も悪化している。		
特 記 事 項	香川県も含め2県で絶滅危惧種, 7県で情報不足種としてレッドリストに掲載されている。		
文 献	6, 55, 68, 81, 118		執筆: 塩田浩之

ミスコハクガイ <i>Gyraulus soritai</i> (ヒラマキガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 II 類 (VU)
選 定 理 由	⑧※ 同じ環境を好む在来種との競争, 更に外来種の侵入圧によって生息域, 個体数共に急激に減少している。		
種 の 特 徴	殻は褐色で光沢があり, 薄質, 殻長約1mm, 殻幅約4mmと円盤状をしている。ヒラマキミズマイマイとヒラマキガイモドキの中間的な形態で, 臍孔が殻径の約1/3程度である。		
分 布	県内: 三豊市(高瀬町), 綾川町, 高松市, 三木町。 県外: 関東・北陸地方以西に分布している。		
被写体:	高松市	撮影者:	
県 内 で の 生 息 状 況	ガマやヨシなどの水生植物の生えている池や湿地またその周辺の水路で確認されているが、個体数が少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	溜池やその周辺の水路の改修や水田, 湿地の宅地化により、生息できる場所が極めて少なくなっている。また、農業や化学肥料に伴う水質汚濁により生息環境も悪化している。		
特 記 事 項	高知県では絶滅危惧 I 類, その他16都県でレッドリストに掲載されている。		
文 献	7, 55, 81, 114, 118		執筆: 塩田浩之

カワネジガイ <i>Campoceras hirasei</i> (ヒラマキガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅 (EX)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I A 類 (CR)
選 定 理 由	⑨※ 県内では、1951年に高松市で確認された個体が知られているのみである。		
種 の 特 徴	淡褐色で殻質は極めて薄く, 殻長約10mm, 殻幅約2mmと非常に細長い。左巻きで3~4層の螺層が互いに離れており, 螺管の肩部が角張ってドリルの刃状である。		
分 布	県内: 高松市(一宮町) 県外: 以前は、東北以南に広く分布していたが、ほとんど再確認できない。近年、関西地方を中心に新たな産地が確認されているが、その生息は不安定である。		
被写体:	高松市	撮影者:	
県 内 で の 生 息 状 況	溜池や沼などの止水系で生息しており, ヨシやガマなどの茎や沈んだ木などに附着して生活するが、県内では、1951年に高松市一宮町の出水で確認されて以来、70年近く確認できていない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	溜池の改修, 農業や化学肥料による汚染など生息環境の悪化に伴い絶滅したと考えられる。		
特 記 事 項	香川県も含め、8都府県で絶滅となっている。		
文 献	6, 66, 81, 87		執筆: 塩田浩之

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

マツカサガイ <i>Inversidens japonensis</i> (イシガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑧※ 香川県は、雨が少なく淡水二枚貝が生息しにくい環境であるが、最近の河川や溜池の改修により、砂泥の堆積した場所が減少し、個体数が激減している。		
種 の 特 徴	殻皮は黒色、やや光沢がある。殻幅約60mm、殻高約40mmの卵形で殻頂は浸食される。主歯は三角形で強く平たい。殻表にはさざ波状の起伏があり、内面は真珠光沢がある。		
分 布	県内: さぬき市から観音寺市まで広く分布しているが、生息地は限られた場所で点在している。 県外: 東北から九州、四国まで全国的に分布している。		
県 内 で の 生 息 状 況	河川や池の殻が十分埋まる程度の深さと柔らかさのある砂礫底を好む。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息している河川や溜池の改修に伴い、生息に適した底質が失われ、絶滅が危惧されている。		
特 記 事 項	香川県も含め35都府県でレッドリストに掲載されている。		
文 献	6, 42, 55, 81, 114, 118, 122	執筆: 塩田浩之	

カタハガイ <i>Pseudodon omiensis</i> (イシガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	⑤⑧※ 県内で確認されている場所が限定されており、更に最近の河川や溜池の改修により、砂泥の堆積した場所が減少し、生息が確認できなくなってきている。		
種 の 特 徴	殻皮は黒色、殻幅約60～100mm、殻高約30～60mmになり、後背縁が張り出してこの部分が最大殻高となる。後背にはさざ波状の彫刻があるが、老成すると浸食により消失する。		
分 布	県内: まんのう町, 三木町。 県外: 中部地方から九州北部, 四国に分布している。		
県 内 で の 生 息 状 況	用水路や池で確認されているが、三木町の産地では用水路が改修工事され、その後再確認できない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	県内での生息地が局限しており、生息している河川や溜池の改修に伴い、生息に適した底質が失われ、絶滅が危惧されている。		
特 記 事 項	15府県でレッドリストに掲載されている。		
文 献	55, 81, 118, 122	執筆: 塩田浩之	

マルドブガイ <i>Anodonta calipygos</i> (イシガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	⑤※ 生息が確認されている場所が、県内で1地点のみである。		
種 の 特 徴	褐色から黒色の殻幅約200mm、殻高約130mmで卵形の殻をもつ大型の二枚貝。殻はよく膨らみ、殻頂部が背縁より突き出すのが特徴で、内部はやや真珠光沢のある白色である。		
分 布	県内: 高松市栗林公園で確認されている。 県外: 琵琶湖水系の特産種。		
県 内 で の 生 息 状 況	高松藩主にゆかりのある栗林公園に生息しており、江戸時代以降に何らかの形で移入されたものと推定されるが、前回リストアップした種のため、今回も掲載することにした。泥底の中に潜り込んで生活している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	栗林公園は、今のところ水環境がよく保全されているが、農業やコイヘルペス駆除のための薬剤使用等による水質悪化の危険性ははらんでいる。		
特 記 事 項	香川県を含めて5府県でレッドリストに掲載されている。		
文 献	6, 55, 81, 118	執筆: 塩田浩之	

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

フネドブガイ <i>Anodonta arcaeiformis</i> (イシガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤※	県内で確認できている場所が限定されており、確認された個体数も極めて少ない。	
種 の 特 徴	殻幅約120mm、殻高約70mm程度で前後にやや長く、殻は比較的膨らむ。他のドブガイ類に比べて殻頂が中央寄りにある。緑色から黒褐色の殻皮をもつ。		
分 布	県内: 三豊市(財田町)、さぬき市(志度町)。 県外: 北海道・本州で報告されているが、個体数は少ない。		
県 内 で の 生 息 状 況	池や水路で確認されているが、生息地は限られており、個体数は非常に少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息場所が限定されているため、溜池の改変や農薬等の流入による水質の悪化により、絶滅する可能性が高い。		
特 記 事 項	8県でレッドリストに掲載されている。中国・朝鮮半島に生息する大陸種と同種かどうか疑わしい。		
文 献	55	執筆: 塩田浩之	



被写体: さぬき市 撮影者: 瀬尾友樹

ドブシジミ <i>Sphaerium japonicum</i> (マメシジミ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑧※	浅い泥底という特殊な環境に生息しており、近年の河川工事や水路の三面コンクリート化により、急激に個体数が減少している。	
種 の 特 徴	殻幅約10mm、殻高も同程度で円形に近い。殻は薄く、白色から黄灰色で半透明、殻皮は光沢がある。		
分 布	県内: 全域の平野部。 県外: 全国的に広く分布しているが、地域によって変異が大きく、いろいろなタイプに分類される。		
県 内 で の 生 息 状 況	平野部田圃地帯の池や水路の止水域の泥底に生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	水が溜まった浅い泥底という特殊な環境のため、溜池の改変や湿地帯、水田の埋め立て、水路の改変や農薬等の流入に伴う水質の悪化等により絶滅の危険性がある。		
特 記 事 項	青森から沖縄まで13府県のレッドリストに掲載されている。		
文 献	55, 81, 118	執筆: 塩田浩之	



被写体: 高松市 撮影者: 塩田浩之

ウエジマメシジミ <i>Pisidium uejii</i> (マメシジミ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤※	浅い溜池や水路の砂泥底という特殊な環境に生息しており、近年の河川工事や水路の三面コンクリート化により、急激に個体数が減少している。	
種 の 特 徴	殻幅約1.8mm、殻高約1.5mmで横に長い卵円形の微小二枚貝である。殻色は乳白色から黄白色で泥が付着していることが多い。殻表には規則的な成長肋がある。		
分 布	県内: 東讃から西讃までの数か所。 県外: マメシジミ類は、全国的に広く分布しているが、微小で特徴が乏しいため同定が難しく、本種の分布は、正確にはわかっていない。		
県 内 で の 生 息 状 況	水田脇の用水路や湿地の泥の中で生息しており、で確認されている。また、三豊市の徳島県境に近い山の中の湿地でも確認された。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	泥の溜まった用水路や浅い湿地という特殊な環境に生息しているため、河川改修や池や湿地の改変によりコンクリート化や水質汚濁等、生息環境が悪化した場合絶滅が危惧される。		
特 記 事 項	兵庫県・鳥取県・山口県でレッドリストに掲載されている。		
文 献	31, 32, 55, 67, 91, 118	執筆: 塩田浩之	



被写体: 三豊市 撮影者: 松田春菜

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ゴマオカタニシ		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
<i>Georissa japonica</i> (ゴマオカタニシ科)		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑦* 県内の各市町村に分布しているが、湿気のある礫地という特殊な環境に生息しているため、生息地が限られている。		
種 の 特 徴	殻長約2.3mm、殻幅約1.7mm、約5層。塔形の微小巻貝で石灰質の蓋を有する。縫合は深くてよくびれ、体層や螺層における螺条の肋が明瞭である。		
分 布	県内: 讃岐山脈と里山。 県外: 本州、四国、九州、南西諸島。		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈やその北側に形成された里山において、その山腹や山麓の礫地に堆積した落葉中に生息している。生息環境が特殊なため生息地は限られているが、各生息地においては多産している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発、人工造林、ダム建設、道路建設などによる生息環境の破壊などが絶滅危険性の最も大きな要因である。その対策として林業関係者に生息環境保全の重要性を周知すること、開発するに当たっては、環境アセスメント調査を綿密に実施することが重要な課題である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、20都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 36, 37, 38, 91, 111, 114, 118	執筆: 矢野重文	



被写体: まんのう町 撮影者: 矢野重文

ヤノムシオイガイ		香川県カテゴリー	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
<i>Chamalycaeus yanoshigehumii</i> (ムシオイガイ科)		環境省カテゴリー	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	①③④⑤ 県固有種であり、まんのう町内の3地点のみに生息している。近年、3地点共⑦⑧* に絶滅が危惧されており、早急な保護対策が望まれる。		
種 の 特 徴	殻長約1.7mm、殻幅約3.5mm、約3.5層。平巻き形の微小巻貝で蓋は角質。殻口上部が隆起し、殻口内部に舌状の突起を有するのは日本産ムシオイガイ類の中ではこの種だけである。		
分 布	県内: まんのう町。 県外: 見つかっていない。		
県 内 で の 生 息 状 況	3地点の生息地のうち、新種記載された模式産地では、斜面からの土砂の流入と、植林により環境が破壊され、第2産地は1個体見つかっただけであり、第3産地もイノシシによる攪乱のため絶滅が危惧されていたが、近年わずかながら生息が確認された。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発、人工造林、ダム建設、道路建設などによる生息環境の破壊が絶滅危険性の最も大きな要因である。環境が変化しやすいガレ場に生息しているため、環境の悪化による絶滅が危惧される。また、近年模式産地付近で林道が建設されたり、植林によって破壊された生息地もあるので、早急な保護対策が望まれる。		
特 記 事 項	香川県固有種である。		
文 献	36, 37, 38, 86, 110, 113, 118, 119, 127	執筆: 矢野重文	



被写体: まんのう町 撮影者: 矢野重文・松田春菜

コウツムシオイガイ		香川県カテゴリー	絶滅危惧 II 類 (VU)
<i>Cipangocharax akioi</i> (ムシオイガイ科)		環境省カテゴリー	絶滅危惧 II 類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦* 香川県と徳島県の固有種である。県内では讃岐山脈の山麓や中腹の湿気のある礫地という特殊な環境に生息しているので、生息地が非常に少ない。		
種 の 特 徴	殻長約1.5mm、殻幅約3.4mm、約3.5層。平巻き形の微小巻貝で、蓋は石灰質で厚い。殻は殻口近くで螺管が収縮し、殻口上部が隆起し、殻口が反転して肥厚することが特徴である。		
分 布	県内: 県中部～東部の讃岐山脈やその北側に隣接する里山。 県外: 徳島県北部(模式産地)。		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈やその北側に形成された里山において、その山腹や山麓の礫地に堆積した湿気のある落葉中に生息している。生息環境が特殊なため生息地は限られているが、環境が良好な場合は多産することもある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発、人工造林、ダム建設、道路建設などによる生息環境の破壊が絶滅危険性の最も大きな要因である。その対策として林業関係者に生息環境保全の重要性を周知すること、開発するに当たっては、環境アセスメント調査を綿密に実施することが重要な課題である。		
特 記 事 項	模式産地の徳島県では、絶滅危惧 II 類に指定されている。		
文 献	1, 36, 37, 38, 50, 86, 110, 113, 118, 119	執筆: 矢野重文	



被写体: 高松市 撮影者: 矢野重文・松田春菜

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

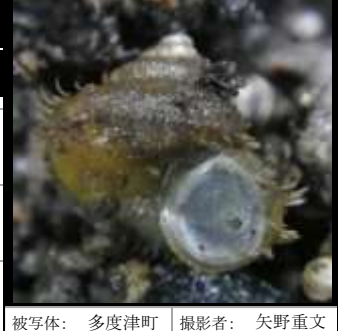
ハリマムシオイガイ <i>Chamalycaeus harimensis</i> (ムシオイガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑤⑦⑧※ 讃岐山脈と里山における、落葉の積もった湿気のある礫地という特殊な環境に生息しているため、生息地が限られ、近年生息数が減少している。		
種 の 特 徴	殻長約1.6mm, 殻幅約3.4mm, 約3.5層。平巻き形の微小巻貝で角質の蓋を有する。体層の収縮部が殻口近くにあり、殻口が二重唇になることが特徴である。		
分 布	県内: 讃岐山脈中部～西部と里山。 県外: 本州, 四国東部。		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈と生息環境の保全された里山において、その山腹や山麓の礫地に堆積した落葉中に生息している。生息環境が特殊なため生息地は限られているが、環境が良好な場合は、多産することもある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が絶滅危険性の最も大きな要因である。その対策として林業関係者に生息環境保全の重要性を周知すること, 開発するに当たっては, 環境アセスメント調査を綿密に実施することが重要な課題である。		
特 記 事 項	カガワムシオイガイと仮称されていた種。模式産地の兵庫県では、絶滅危惧のランクAに指定されている。		
文 献	30, 86, 91, 95, 110, 113, 114, 115, 118	執筆者: 矢野重文	



ピルスブリムシオイガイ <i>Chamalycaeus pilsbryi</i> (ムシオイガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑦※ 県内の各市町村に分布しているが、湿気のある落葉中で腐葉土が十分に形成された特殊な環境に生息しているため、生息地が限られている。		
種 の 特 徴	殻長約2.1mm, 殻幅約3.8mm, 約3.5層。平巻き形の微小巻貝で角質の蓋を有する。体層の収縮部から殻口にかけて螺管が膨らみ、ムシオイガイ類の中でも標準的な形状である。		
分 布	県内: 讃岐山脈の一部と里山, 小豆島(2地点)。 県外: 本州, 四国北部。		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈や里山において、その山腹や山麓に堆積した湿気のある落葉中で、腐葉土が十分に形成された特殊な環境に生息している。生息地は限られているが、各生息地においては多産することもある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が絶滅危険性の最も大きな要因である。ただ、香川県産の個体は、模式産地(兵庫県)の個体(殻幅3.2mm)より大型で遺伝子の配列もやや異なっており、新種の可能性がある。その意味からも、生息環境の保全が望まれる。		
特 記 事 項	香川県以外では、大阪府において絶滅危惧I類に指定されている。		
文 献	1,108,110,113,114	執筆者: 矢野重文	



サドヤマトガイ <i>Japonia sadoensis</i> (ヤマタニシ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑦※ 県内では讃岐山脈と里山の、湿気のある礫地という特殊な環境に生息しているため、生息地が限られているが、全国的に見ても生息地が少ない。		
種 の 特 徴	殻長約4.0mm, 殻幅約4.0mm, 約4.5層。円錐形の小型巻貝で角質の蓋を有する。縫合は深くよくくびれ、体層や螺層における螺条の肋と2~4列の毛状突起列が明瞭である。		
分 布	県内: 讃岐山脈と里山。 県外: 本州, 四国, 九州北部, 佐渡島(模式産地)。		
県 内 で の 生 息 状 況	県西部讃岐山脈やその北側に形成された里山において、その山腹や山麓の礫地に堆積した落葉中に生息している。生息環境が特殊なため生息地は限られているうえ、各生息地における個体数は非常に少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、17都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 30, 36, 37, 38, 54, 87, 91, 114, 115, 118	執筆者: 矢野重文	



※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

シリブトゴマガイ <i>Arinia japonica</i> (ゴマガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	②③⑤⑦ 四国では唯一の産地で、生息域が局限している上に、近年個体数が激減している。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約2mm、殻幅約1.2mm、約5層。円筒形の微小なゴマガイ。殻頂部は紅色、殻口付近は白色の美しい貝。ゴマガイ類は通常殻頂部が細くなるが、本種は尻太の特異な形態をしている。		
分 布	県内：高松市。 県外：長崎県、大分県、熊本県、宮崎県、鹿児島県。		被写体： 高松市 撮影者： 多田 昭
県 内 で の 生 息 状 況	高松市の讃岐山脈寄りの広葉樹林の落葉下に生息している。生息域は約4㎡と極端に狭く個体数も少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	極めて狭いところに少数確認されているだけで、環境が悪くなれば絶滅するだろう。		
特 記 事 項	相当以前に人為的に移入された可能性がある。長崎県・熊本県・鹿児島県の絶滅危惧種である。		
文 献	54, 83, 84, 118, 119	執筆：多田 昭	



アベゴマガイ <i>Diplommatina tosanella abe</i> (ゴマガイ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	②③⑤⑦ 四国固有種で、讃岐山脈の西方にのみ分布しており、県内に於ける分布は局限している。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約2.5mm、殻幅約1.5mm、約7層。橙紅色でゴマガイ科としては中形。各層はよく膨らみ、殻表の縦肋は全体に粗く、内壁にある腔襞は緊線から伸び短い。		
分 布	県内：讃岐山脈中西部。 県外：徳島県中西部、愛媛県四国中央市、高知県中部の各山岳部。		被写体： まんのう町 撮影者： 多田 昭
県 内 で の 生 息 状 況	分布域内では広葉樹林の落葉下に広く生息しているが、個体数は減少傾向にある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息域は針葉樹の植林や林道開発などにより分断、年々環境は悪化している。		
特 記 事 項	四国固有種である。		
文 献	1, 50, 84, 86, 91, 118, 119	執筆：多田 昭	



トサゴマガイ <i>Diplommatina tosana tosana</i> (ゴマガイ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	②③⑤⑦ 山地性のゴマガイの仲間、讃岐山脈の中部を中心とした地域に局限している。近年生息域が針葉樹の植林やイノシシの攪乱などあり、減少傾向にある。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約3mm、殻幅約1.7mm、約6層。赤みがかった橙色でゴマガイ科では中形に属する。殻口上部にある腔襞が緊線から縫合に平行に長く伸びる。		
分 布	県内：讃岐山脈。 県外：徳島県、高知県東部。		被写体： 高松市 撮影者： 多田 昭
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈の中部から東部にかけての深い谷の落葉下に生息している。数産地が知られているのみで、各産地での個体数も少ない。本来は落葉広葉樹林に適応していた種と思われるが、現在はスギの植林の中でも少数生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	模式産地からは相当離れており、本県のはやや模式的ではなく、その意味でも大切にしていかなければならない。乾燥を嫌うので環境が変われば絶滅してしまう。		
特 記 事 項	四国固有種である。		
文 献	1, 50, 54, 84, 91, 118, 119	執筆：多田 昭	



※選定理由：①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

<h2>キュウシュウゴマガイ</h2> <p><i>Diplommatina tanegasimae kyushuensis</i> (ゴマガイ科)</p>		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤⑦* 分布の辺縁に当たり、本県西部山岳部の狭い範囲に少数分布している。		
種 の 特 徴	殻長約2.7mm、殻幅約1.5mm、7層。淡黄褐色でゴマガイ類では中形。次体層が大きく膨らみ蛹形。腔壁も広域分布のゴマガイより長い。		
分 布	県内: 観音寺市。 県外: 徳島県三好市、愛媛県四国中央市・松山市周辺、高知県の一部、九州、山口県。		
県 内 で の 生 息 状 況	分布域はもともとは落葉広葉樹林であったようであるが、現在では杉の植林内にも生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	分布域は局限しており、環境が変われば絶滅する可能性は高い。		
特 記 事 項	香川県以外では、鹿児島県において準絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	84, 97, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 観音寺市 撮影者: 多田 昭

<h2>シコクゴマガイ</h2> <p><i>Diplommatina shikokuensis</i> (ゴマガイ科)</p>		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	②③⑤⑦ 四国固有種で、生息地が山岳部に局限されており、針葉樹の植林などもあり⑧* 減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約4mm、殻幅約2mm、約7層。黄紅色のゴマガイ科では大形に属する。模式的には殻口の軸唇部と外唇部と交差する所が角張るが、香川県の個体はそれが弱い。		
分 布	県内: 讃岐山脈、五色台。 県外: 徳島県、高知県、愛媛県。		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈の標高の高い所と五色台の谷筋に分布する山地性の貝で、通常は広葉樹林の落葉下に生息している。杉の植林中にも生息するが個体数は少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	山岳部の限定された所に生息しており、森林開発などで生息個体数は少なくなっている。香川県の個体は模式的な形態ではないためカワゴマガイと言われていた。これからの分類研究のためにも、守っていかねばならない。		
特 記 事 項	四国固有種である。		
文 献	1, 50, 84, 115, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 高松市 撮影者: 多田 昭

<h2>ヘソカドガイ</h2> <p><i>Paludinella japonica</i> (カワザンショウガイ科)</p>		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	⑤⑦⑧* ツブキの生えているような潮風の吹く潮上帯に生息しているが、自然海岸の減少に伴い、生息環境が失われて、生息数が著しく減少している。		
種 の 特 徴	殻長約5.5mm、殻幅約3.6mm、約6層。塔形の小型巻貝で角質で透明な薄い蓋を有する。縫合は深く、黄褐色の殻表は平滑で光沢がある。殻底の狭い臍孔の周辺に強い角がある。		
分 布	県内: 観音寺市、三豊市(詫間町・仁尾町)、多度津町、土庄町、小豆島町。 県外: 本州、四国、九州、南西諸島。		
県 内 で の 生 息 状 況	潮風の吹く潮上帯に生えるツブキの根元や礫間に生息する。県全域の自然海岸の残る磯浜に生息していたと思われるが、自然海岸の減少と共に、生息数が著しく減少している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	海辺の改変などによる生息環境の破壊が絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、9都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 57, 108, 118	執筆: 矢野重文	



被写体: 多度津町 撮影者: 矢野重文

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ニホンケシガイ <i>Carychium nipponense</i> (オカミガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑤* 本県では、讃岐山脈にのみ生息しており、それも、数地点でしか生息が確認されていない。		
種 の 特 徴	殻長約1.5mm, 殻幅約0.7mm, 約4層。塔形の微小巻貝。縫合はよくくびれ、殻は黄褐色透明で殻表には光沢がある。殻口内には軸唇に2本、外唇に1本の歯状襞がある。		
分 布	県内: 観音寺市(大野原町), 三豊市(財田町), まんのう町(琴南町), 高松市(塩江町)の5地点。 県外: 北海道南西部, 本州, 四国, 老岐。		被写体: まんのう町 撮影者: 松田春菜
県 内 で の 生 息 状 況	他県では海岸地帯において多産することがあるが、本県では讃岐山脈の山頂付近や山麓に堆積した広葉樹林や杉林の落葉中に、わずかながら生息している。各地点における生息個体数は、1地点を除いて、数個体ずつしか確認されていない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県以外では、大阪府において絶滅危惧 I 類に指定されている。		
文 献	1, 91, 110, 118	執筆者: 矢野重文	



イボイボナメクジ <i>Granulilimax fuscicornis</i> (ホソアシヒダナメクジ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	①⑤⑦* 丸亀市がこの種の模式産地である。讃岐山脈や里山、さらに塩飽諸島や小豆島でも見つかっているが、各地点共に生息個体数が非常に少ない。		
種 の 特 徴	殻長約30mm, 肉食性の小型ナメクジ。体表は全体に淡茶褐色で、背面を取り囲むように茶褐色の帯がある。全体にイボ状の突起を有するためこのような和名が付けられた。		
分 布	県内: 讃岐山脈と里山, 塩飽諸島, 小豆島。 県外: 本州, 四国。		被写体: 高松市 撮影者: 矢野重文
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈やその北側に形成された里山において、その山腹や山麓の礫地に堆積した落葉中に生息している。生息環境が特殊なため生息地が限られているうえ、各生息地における生息数が非常に少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	1989年に丸亀市で採集された個体で新種記載された。近年肉食性のナメクジとして注目されている。		
文 献	5, 36, 37, 38, 62, 64, 108, 118	執筆者: 矢野重文	



サナギガイ <i>Pupilla cryptodon</i> (サナギガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤⑦ ⑧* 全国的にも生息地が限定されている。県内では、無人島の海岸付近という特殊な環境に生息しており、人の手が加わることによって生息数が減少している。		
種 の 特 徴	殻長約3.4mm, 殻幅約1.7mm, 約6層。殻頂が円く俵形で茶褐色の微小巻貝である。成員では殻口縁が肥厚し、殻口内に数本の歯状突起を有する。		
分 布	県内: 三豊市(詫間町), 丸亀市, 小豆島町, 東かがわ市(大内町)の6地点(1地点は絶滅)。 県外: 本州, 四国北部, 九州北部。		被写体: 丸亀市 撮影者: 矢野重文・松田春菜
県 内 で の 生 息 状 況	小さな無人島の海岸付近に生えるツブキ等の根元付近に生息している。落ち葉の中など湿気が保たれているような場所に、群棲していることがあるが、生息地点が限られている。近年生息数が減少しているが、無人島の調査が不十分なので、今後新たな生息地が見つかる可能性がある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	海辺の改変などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。詫間町の生息地は、埋め立てによって離島が陸続きになったため、生息環境が悪化し、本種は絶滅した。海浜地域を開発するに当たって特に注意を要する。		
特 記 事 項	香川県を含めて、7都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	5, 36, 37, 38, 105, 106, 108, 118	執筆者: 矢野重文	



*選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ナタネキバサナギガイ <i>Vertigo eogea</i> (キバサナギガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ 湿地という特殊な環境に生息しており、生息地点も限られている。近年都市郊外の土地造成によって、湿地が消滅して生息数が極端に減少している。		
種 の 特 徴	殻長約1.8mm、殻幅約1.2mm、約4層。殻頂が円く俵形で茶褐色の微小巻貝である。各螺層はよく膨らみ、殻口内に数本の歯状襞を有する。		
分 布	県内:三豊市(高瀬町)、三木町、土庄町の各1地点と小豆島町の2地点。 県外:本州、四国。		
県 内 で の 生 息 状 況	湿気のある休耕地や溜池の周囲の湿地などに生息しており、水につかっているガマなどの草の根元や枯れ葉、枯れ枝などに附着している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	溜池の改変、湿地の改変、農地改修、土地造成などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。休耕地は耕作再開によって生息環境が改変されることがあり、小豆島町の2地点はそのために絶滅したと思われる。		
特 記 事 項	香川県を含めて、21都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	24, 36, 37, 38, 43, 54, 108, 110, 114, 118, 126	執筆者: 矢野重文	



被写体: 小豆島町 撮影者: 松田春菜

スナガイ <i>Gastrocopta armigerella</i> (キバサナギガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 島嶼部の海岸付近の草むらに生息しているが、生息地点が限られており、各生息地においてはそれぞれ数個体ずつしか確認されていない。		
種 の 特 徴	殻長約2.0mm、殻幅約0.9mm、約5層。殻は塔型、殻表は平滑で光沢があり、白色透明な微小巻貝である。殻口内には数本の歯状襞を有するが、その周辺の白色滑層が広い。		
分 布	県内:小豆島町、土庄町の各1地点。 県外:本州、四国、九州、南西諸島。		
県 内 で の 生 息 状 況	島嶼部の海岸付近に生えるツワブキなどの海浜植物の根元付近で、湿気が保たれているような場所に生息している。各生息地点共に、生息個体数が非常に少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	海辺の改変による生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、14都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	4, 5, 36, 37, 38, 43, 57, 63, 108, 118	執筆者: 矢野重文	



被写体: 小豆島町 撮影者: 松田春菜

チョウセンスナガイ <i>Gastrocopta (Sinalbinula) theeli</i> (キバサナギガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧I類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	③⑤⑦* 県内では、わずか2地点で各2個体の死殻が見つかっただけであり、絶滅が危惧される。		
種 の 特 徴	殻長約2.1mm、殻幅約1.0mm、約5層。ふつらした塔形の微小巻貝。殻は白色透明で、殻口内にある数本の歯状襞のうち、壁唇の下位壁唇板を欠く。		
分 布	県内:小豆島町、三豊市(詫間町)の各1地点。 県外:本州、四国、九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	小豆島の海岸付近の神社の境内と三豊市詫間町の海岸林で2個体の死殻が見つかっただけであり、絶滅が危惧される。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	海辺の改変による生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。本県では2地点のみの記録なので絶滅が危惧されるが、他県においては、海岸地帯のみならず、内陸の河川敷や石灰岩地帯など多様な環境に生息しており、本県においても今後のさらなる調査が望まれる。		
特 記 事 項	香川県を含めて、5都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	4, 5, 30, 57, 63, 98	執筆者: 矢野重文	



被写体: 小豆島町 撮影者: 松田春菜

*選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

キバサナギガイ <i>Vertigo hirasei</i> (キバサナギガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
選 定 理 由	③⑤* 山間部の低木や草むらに生息しているが、県内で生息が確認されているのは、4地点だけであり、絶滅が危惧されている。		
種 の 特 徴	殻長約1.6mm, 殻幅約1.0mm, 約4層。ふつらした塔形の微小巻貝。殻は茶褐色で殻口に数本の歯状襞があり、外唇にある2本(特に上側の1本)の歯状襞が短いことが特徴である。		
分 布	県内: 普通寺市, 高松市(屋島東町・庵治町), さぬき市(志度町)の各1地点。 県外: 北海道西南部, 本州, 四国, 九州, 南西諸島。		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐平野の里山の、わずかに3地点において見つかっただけである。山間部の落葉中に生息するが、低木の葉裏で見つかることもある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、12都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	24, 36, 37, 38, 126	執筆: 矢野重文	



被写体: 普通寺市 撮影者: 松田春菜

ヤマトキバサナギガイ <i>Vertigo japonica</i> (キバサナギガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦* 海岸地帯の低木や草むらに生息しているが、自然海岸の減少に伴って、生息地点が限定され、生息数も減少している。		
種 の 特 徴	殻長約1.8mm, 殻幅約1.0mm, 約4層。ふつらした塔形の微小巻貝。殻は茶褐色で、殻口に数本の歯状襞があるが、外唇にある2本の歯状襞が長いことが特徴である。		
分 布	県内: 丸亀市, 土庄町, 東かがわ市(大内町)の4地点。 県外: 本州, 四国, 九州, 南西諸島。		
県 内 で の 生 息 状 況	海岸地帯の湿気のあるツブキなどの根元付近に生息しているが、生息が確認できているのはわずか4地点であり、各地点共に生息個体数が少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	海辺の改変による生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、15都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 24, 30, 36, 37, 38, 95, 118, 126	執筆: 矢野重文	



被写体: 丸亀市 撮影者: 松田春菜

ミジンマイマイ <i>Vallonia pulchellula</i> (ミジンマイマイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑤⑦* 都市周辺や海岸地帯に生息しているが、その分布が偏在しているだけでなく、高波や高潮の影響や植樹などの影響を受けるなど、生息環境が不安定である。		
種 の 特 徴	殻長約0.9mm, 殻幅約2.3mm, 約4層。平巻形の微小巻貝。殻は白色透明で、一定間隔で規則的な成長肋が発達している。殻口は反転し、臍孔は広い。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(詫間町), 丸亀市, 坂出市, 土庄町, 小豆島町, 東かがわ市(大内町)。 県外: 本州, 四国, 九州, 南西諸島。		
県 内 で の 生 息 状 況	都市周辺の庭園や海岸地帯の低木林の落葉中や海浜植物の根元に生息しており、かなり古い時代の海外からの移入種ではないかと思われる。また、その分布はかなり偏在している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	海辺の改変や公園の整備などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、7都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 5, 43, 57, 108, 118, 121	執筆: 矢野重文	



被写体: 坂出市 撮影者: 松田春菜

*選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

カゴシマノミギセル		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	—
Zaptyx hirasei (キセルガイ科)			
選 定 理 由	③⑤⑦ 屋島で1本の樹に多産していたが、依存木が枯死し、最近では発見が困難になっている。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約10mm, 殻幅約2.2mm, 約10層。褐色で殻表の光沢は鋭く、キセルガイでは小形に属する。殻口右側面内壁にある腔襞はJ状、その上部にある主癖と縫合との間に縫合癖がある。		
分 布	県内: 高松市。 県外: 鹿児島県, 宮崎県, 大分県。		
県 内 で の 生 息 状 況	屋島の境内の1本の巨木に生息していたが近年枯死、倒れてしまった。一時は倒木下で多産していたが、それが腐食・分解されたため、生きた個体が発見できない。絶滅したかもしれない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	鹿児島が原産地で、分布域の九州から遠く離れた屋島に生息していることについては人為的な移入と推測している。依存木が枯死・腐食・分解されてしまった現在、生貝が見つからなくなっている。		
特 記 事 項	鹿児島県においては、準絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	61, 94	執筆: 多田 昭	



被写体: 高松市 撮影者: 多田 昭

ツムガタギセル		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
		環境省カテゴリ	—
Pinguiphaedusa pinguis (キセルガイ科)			
選 定 理 由	⑤⑦⑧* 里山の社寺林の敷カ所に少数生息し、減少傾向の著しい種。		
種 の 特 徴	殻長約27mm, 殻幅約5.5mm, 約12層。淡褐色で弱い光沢がある。殻頂部は尖ったように細くなる。キセルガイ科としては大形。殻口を前にして右側面内壁にある腔襞は逆J状。		
分 布	県内: 高松市より西部。 県外: 徳島県, 愛媛県東部, 淡路島, 本州(兵庫県以北)。		
県 内 で の 生 息 状 況	高松市から西部にかけて、古木のある敷地点の社叢に少数生息している。広葉樹の幹に這い上っていることがある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	大形で樹上に登るところから環境の変化には弱い。近年、生息地は荒廃の傾向があり、個体数は激減している。		
特 記 事 項	香川県以外では、滋賀県・愛媛県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 50, 61, 69, 82, 86, 94, 114, 115, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 高松市 撮影者: 多田 昭

トサギセル		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
Placeophaedusa tosana (キセルガイ科)			
選 定 理 由	②③⑤⑦ 讃岐山脈の限られた森林にのみ生息する。本種の北限であり東限にも当たる。近年、減少が著しい。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約12mm, 殻幅約2.5mm, 約10層。紫褐色でキセルガイ科では小形に属する。殻表には鋭い光沢があり、貝殻の内面にある腔襞は不鮮明な梯子状を呈す。		
分 布	県内: 讃岐山脈。 県外: 徳島県, 愛媛県, 高知県。		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈の広葉樹の鬱蒼とした森に生息している。主として倒木下に棲み、雨上がりには這い出ている。現在までに10産地が記録されているが、各産地ともに個体数は少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	環境の変化に弱い種とみえ近年、個体数が激減している。生息地での生息範囲も狭い。		
特 記 事 項	四国固有種である。		
文 献	1, 50, 61, 69, 82, 86, 115, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 高松市 撮影者: 多田 昭

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

コシボソギセル <i>Tyrannophaedusa nankaidoensis nankaidoensis</i> (キセルガイ科)		香川県カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	③⑤⑦* 広葉樹林のガレ場に生息、近年減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約12mm、殻幅約2.8mm、約12層。白色で殻頂部が細長く棍棒状。キセルガイ科の中では小形に属する。内壁にある腔壁はエ状。生殖器の盲管が受精囊より長い。		
分 布	県内: 島嶼部を除く全域。 県外: 四国、淡路島、大阪府、和歌山県。		
県 内 で の 生 息 状 況	香川県では讃岐山脈、平地部の低山、五色台のガレ場の石の間に生息している。近縁種とみられるショウドシマギセルと同所的分布を確認している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	ガレ場という限られた環境に適応した種で、環境の変化には弱い種である。近年、減少傾向にある。		
特 記 事 項	香川県以外では、大阪府・岡山県・愛媛県・高知県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 5, 43, 50, 58, 61, 69, 85, 86, 94, 95, 96, 114, 115, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 高松市 撮影者: 多田 昭

ショウドシマギセル <i>Tyrannophaedusa nankaidoensis yanoi</i> (キセルガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	①③④⑤ 小豆島を模式産地とする本県固有亜種で、生息地が局限しており、環境が変われば絶滅する。近年、減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約13mm、殻幅約3.3mm、約11層。白色で中型の細長いキセルガイ。コシボソギセルに酷似しているがやや大きく、生殖器(盲管が短小)では明瞭に分類できる。		
分 布	県内: 小豆島と豊島、屋島の離島部で生息が確認されている。 県外: 見つかっていない。		
県 内 で の 生 息 状 況	コシボソギセルと同様ガレ場の石の下に生息しており、屋島では2亜種を同所で確認している。基亜種と亜種が同所で確認されたことにより、ショウドシマギセルは独立種の可能性を示唆している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息地がガレ場という特殊な環境のため、環境の変化には弱い種と思われる。現段階では県固有亜種であり、大切に守っていかねばならない。		
特 記 事 項	香川県固有亜種である。		
文 献	58, 61, 82, 85, 108, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 小豆島町 撮影者: 多田 昭

トサシリボソギセル <i>Tyrannophaedusa tosaensis</i> (キセルガイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	②③⑤⑦ 四国固有種で分布の北限になる。生息地が局限しており、個体数が少なく、減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約20mm、殻幅約4.5mm、約12層。黄褐色で殻表に光沢があり、キセルガイ科の中では中形に属する。殻口上部内壁には逆J状の腔壁がある。		
分 布	県内: 観音寺市。 県外: 高知県、徳島県、愛媛県。		
県 内 で の 生 息 状 況	観音寺市の山岳部の狭い範囲に生息している。ガレ場の落葉下に少数確認されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息域が局限されており、付近に林道が伸びたため減少が顕著である。今以上に環境が変われば絶滅する可能性がある。		
特 記 事 項	四国固有種である。		
文 献	1, 61, 69, 82, 94, 115, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 観音寺 撮影者: 多田 昭

※選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

ホソヒメギセル <i>Tyrannophaedusa gracilispira</i> (キセルガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	⑤⑦⑧※ 広葉樹の根元や樹洞に生息し、付近の環境が変われば絶滅する。近年減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約9mm、殻幅約2mm、約9層。淡褐色から黄褐色でキセルガイ科では小形。殻表には粗い成長肋があり、古木の洞などでよく見られる。殻口にある上板の右に、深い切れ込みがある。		
分 布	県内: 全域。 県外: 四国, 本州中部以西, 大分県。		
県 内 で の 生 息 状 況	通常カエデ、エノキなど広葉樹の樹洞などに生息しているが、古木の根元落葉下でもみられる。山岳部、里山、離島部にも生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	全域に分布している割には生息地は多くない。うっそうと繁った広葉樹林に棲息し、環境の変化には弱い。特に樹木に依存しているものは依存木が枯死すると絶滅する。		
特 記 事 項	香川県以外では、西日本の12都道府県において、絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 61, 69, 91, 94, 95, 96, 108, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 高松市 | 撮影者: 多田 昭

モリサキギセル <i>Tyrannophaedusa morisakii</i> (キセルガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	②③⑤⑦ 分布域は四国東北部と狭い上に、分布の中心は本県にあるので準固有種⑧※と言える。近年減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約13mm、殻幅約3mm、約11.5層。紫褐色の小形のキセルガイ。殻頂部は棍棒状で、殻口右側面内部にある腔襞は逆J状。殻口にある上板右脇に1・2本の切れ込みがある。		
分 布	県内: 中東部。 県外: 徳島県。		
県 内 で の 生 息 状 況	中部以東に広く分布している。ガレ場の石の下や落ち葉の下に生息する。讃岐山脈とその丘陵地の貝は大形で個体数は少ない。屋島の個体は多産するが小形。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息域が主にガレ場という特殊な環境に適応しているので、環境の変化に弱いと思われる。過去に女木島の記録があったが、今回の調査では発見することができなかった。		
特 記 事 項	香川県、徳島県の固有種である。		
文 献	50, 61, 82, 86, 89, 94, 95, 96, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 東かがわ市 | 撮影者: 多田 昭

ナラビヒダギセル <i>Tyrannophaedusa proba caryostoma</i> (キセルガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	②③⑤⑦ ⑧※ 落葉広葉樹の巨木を生活圏とする種で、近年減少傾向が著しい。		
種 の 特 徴	殻長約15mm、殻幅約3.8mm、約10層。褐色で半樹上性のキセルガイ。殻口が殻径の割に大きく開き、殻口上部内壁にある腔襞は三状を呈す。		
分 布	県内: 中東部。 県外: 徳島県, 近畿(京都南部-淡路島)。		
県 内 で の 生 息 状 況	本県はすべて巨木の根元で見つかっている。雨上がりになどは樹幹に這い上る。環境の変化に弱いとみえ、絶滅したと見られる産地が増えている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	樹木に依存する種のため、生息している樹木や付近の環境変化で絶滅する可能性がある。		
特 記 事 項			
文 献	1, 60, 61, 69, 82, 86, 89, 94, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 高松市 | 撮影者: 多田 昭

*選定理由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

オオギセル <i>Megalophaedusa martensi</i> (キセルガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦⑧※ 近年減少の顕著な種で、絶滅が心配である。		
種 の 特 徴	殻長約38mm, 殻幅約9.5mm, 約11層。淡褐色で殻表に鈍い光沢がある。キセルガイ類の中でも特に大形。腔襞は側面に短いプリカが7-8本平行に並ぶ、独特の形態をしている。		
分 布	県内: 全域。 県外: 四国, 東京都以西の本州(岡山県まで)。		
県 内 で の 生 息 状 況	本県では東かがわ市から観音寺市までの山岳部に生息、広葉樹林のよく茂った森の倒木、落葉下に生息している。現在までに30産地を記録しているが、10産地では絶滅した可能性がある。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	貝殻が大きく環境の変化に対し、適応しにくい種と思われる。外敵や採集圧にもかかわらず近年減少が著しい。		
特 記 事 項	香川県以外では、9都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	1, 5, 54, 61, 69, 82, 86, 87, 90, 91, 94, 115, 118, 119	執筆者: 多田 昭	



被写体: 高松市 撮影者: 多田 昭

コンボウギセル <i>Mesophaedusa hickonis</i> (キセルガイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	⑤⑦⑧※ 生息地が少ない上、近年減少傾向が目立ってきた。		
種 の 特 徴	殻長約26.5mm, 殻幅約5.7mm, 約13層。黄褐色の大形のキセルガイ。殻頂部が棍棒状をしている。殻口右側面内壁に三状の腔襞がある。		
分 布	県内: 全域。 県外: 四国, 本州中部以西(岡山県まで)。		
県 内 で の 生 息 状 況	山地性のキセルガイで小豆島町にも記録がある。落葉下などに普通に見られたが、近年個体数が減り、生息が確認できないところが出ている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	生息地が限定されており、近年めっきり少なくなった種の1つ。環境の変化に弱いとみられ絶滅が心配である。小豆島では局限しており、近年見つけることができない。		
特 記 事 項	香川県以外では、石川県・滋賀県・兵庫県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	54, 60, 61, 69, 82, 86, 94, 108, 118, 119	執筆者: 多田 昭	



被写体: 高松市 撮影者: 多田 昭

ツクシナタネ <i>Punctum morseanum</i> (ナタネガイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	③⑤⑦ 休耕田などの湿地や、海岸地帯の海浜植物の根元などに生息しており、湿地の埋め立てや海辺の改変などによる絶滅の危険性が大きい。 ⑧※		
種 の 特 徴	殻長約1.0mm, 殻幅約2.0mm, 約4層。低い円錐形の巻貝。殻は茶褐色で、殻表に一定間隔で弱い成長脈が密にある。臍孔は狭い		
分 布	県内: 三豊市(詫間町), 高松市, 小豆島町, 東かがわ市(大内町)の5地点。 県外: 本州, 四国, 九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	従来ナタネガイの一種として未同定であったが、近年の研究によりツクシナタネと同定された。都市周辺の湿気のある庭園や休耕田などの湿地、さらに、海岸地帯の低木林の落葉中に生息しており、かなり古い時代の海外からの移入種ではないかと思われる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	湿地の改変、海辺の改変、農地改修、土地造成などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	ナタネガイ類の分類が十分になされていなかったため、各都道府県では絶滅危惧種に指定されていない。		
文 献	21,118,124	執筆者: 矢野重文	



被写体: 三豊市 撮影者: 矢野重文・松田春菜

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

オオコウラナメクジ <i>Nipponarion carinatus</i> (オオコウラナメクジ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 讃岐山脈の稜線近くの2地点でしか見つかっておらず、生息環境の変化によって絶滅する危険性が大きい。		
種 の 特 徴	殻長約40mm。頭部の背面に大きな楕板があり、頭巾状の外殻膜で被われている。背面後方には、中央に鋭いキール状の稜角がある。体色は茶褐色で、全体に白い霧降状の模様が入る。		
分 布	県内: 観音寺市(大野原町)、高松市(塩江町)の2地点。 県外: 北海道西南部, 本州, 四国, 九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	1955年、鳥取市久松山を模式産地として新種記載された。北方系の種のため、冷涼な気候に適応しており、讃岐山脈でも高度の高い、稜線付近の落葉中に生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、19都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	24, 30, 36, 37, 38, 103, 110, 115, 118, 119	執筆: 矢野重文	



被写体: 観音寺市 | 撮影者: 矢野重文

タカキビ <i>Trochochlamys praealta</i> (シタラ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤* 小豆島のそれも1地点で見つかっただけであり、その生息地点周辺の環境の変化によって、絶滅する危険性が大きい。		
種 の 特 徴	殻長約3.0mm, 殻幅約2.5mm, 約7層。塔形の微小巻貝。殻は茶褐色で光沢があり、薄くて壊れやすい。殻頂は鋭く尖り、周縁はキール状に角張る。臍孔は閉じている。		
分 布	県内: 小豆島町の1地点。 県外: 本州, 九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	対岸の中国地方には、かなり広く分布しているが、四国側では、小豆島の1地点で確認されただけである。広葉樹林の落葉中に生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、15都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	17, 24, 36, 37, 38, 108, 118, 119, 123	執筆: 矢野重文	




被写体: 小豆島町 | 撮影者: 松田春菜


オキノクニキビ <i>Trochochlamys okiensis</i> (シタラ科)		香川県カテゴリ	情報不足 (DD)
		環境省カテゴリ	情報不足 (DD)
選 定 理 由	③⑤* 県内での生息確認地点はわずか3地点であり、今後新たな生息地が見つかる可能性はあるが、早急な保護対策が必要である。		
種 の 特 徴	殻長約2.2mm, 殻幅約3.0mm, 約5層。低い円錐形の微小巻貝。殻は茶褐色で光沢があり、薄くて壊れやすい。殻頂は尖り、周縁はキール状に角張る。臍孔は閉じている。		
分 布	県内: 琴平町, 高松市(塩江町)の3地点。 県外: 本州, 四国, 九州, 屋久島。		
県 内 で の 生 息 状 況	隠岐において見つかり、1908年に新種記載されたが、近年四国地方にも生息していることが分かった。本県においては、トサキビの1型と見なされてきたため、その分布の全貌が明らかにされていなかった。讃岐山脈や讃岐平野の里山における、広葉樹林の落葉中に生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	近年の研究で、県内での生息が確認された。模式産地である島根県では、絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。		
文 献	20, 36, 37, 38, 54, 125	執筆: 矢野重文	



被写体: 高松市 | 撮影者: 松田春菜

*選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

アワキビ <i>Parakaliella higashiyamana</i> (シタラ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリ	情報不足 (DD)
選 定 理 由	③⑤* 徳島県の固有種であったが、近年の研究により県内にも生息していることが分かった。確認された生息地は数地点であり、環境の保全が必要である。		 <p>被写体: 高松市 撮影者: 松田春菜</p>
種 の 特 徴	殻長約2.3mm, 殻幅約3.2mm, 約5層。ふつらした円錐形の微小巻貝。殻は茶褐色で光沢があり、薄くて壊れやすい。周縁はやや角張るが、殻口付近では角張りは消滅して円くなる。		
分 布	県内: 高松市(塩江町), 三木町, さぬき市(大川町), 東かがわ市(白鳥町・引田町)。 県外: 徳島県。		
県 内 で の 生 息 状 況	徳島県鳴島町で見つかり、1903年に新種記載されたが、その後近似種との区別が難しいことより、長い間不明種とされた。近年の研究により、その分布域が明らかになり、本県では讃岐山脈東部に生息していることが分かった。広葉樹林の落葉中に生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	近年の研究で、県内での生息が確認された。模式産地は徳島県吉野川市川島町である。		
文 献	1, 18, 36, 37, 38, 54, 110, 118, 119, 125		
	執筆: 矢野重文		

トガリキビ <i>Parakaliella acutanguloides</i> (シタラ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	情報不足 (DD)
選 定 理 由	⑤* 近年まで、不明種であったが、各地でその生息が確認されつつある。県内でも、わずか3地点ではあるが生息が確認され、早急な保護対策が必要である。		 <p>被写体: 東かがわ市 撮影者: 松田春菜</p>
種 の 特 徴	殻長約3.0mm, 殻幅約3.7mm, 約5層。高い円錐形の微小巻貝。殻は茶褐色で光沢があり、薄くて壊れやすい。周縁は円いが、弱い角がある。臍孔は閉じている。		
分 布	県内: 東かがわ市(白鳥町), 東かがわ市(引田町)の3地点。 県外: 本州, 四国。		
県 内 で の 生 息 状 況	大阪府河内長野市で見つかり、1982年に新種記載されたが、その後模式産地以外での生息が確認されず、長い間不明種とされた。近年長野県や四国にも生息していることが分かった。県内では讃岐山脈東部において、広葉樹林の落葉中に生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	近年の研究で、県内での生息が確認された。模式産地の大阪府では、絶滅危惧 I 類に指定されている。		
文 献	51, 36, 37, 38, 125		
	執筆: 矢野重文		

カサネシタラ <i>Sitalina insignis</i> (シタラ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	⑤⑦* 讃岐山脈の稜線付近でその生息が確認されたが、わずか5地点のみであり、生息個体数は非常に少ない。		 <p>被写体: まんのう町 撮影者: 松田春菜</p>
種 の 特 徴	殻長約1.0mm, 殻幅約1.7mm, 約4層。円錐形の微小巻貝。殻は茶褐色の殻皮に被われ、薄くて壊れやすい。周縁はキール状に角張り、螺層はやや下方にずれて巻くため覆瓦状になる。		
分 布	県内: 観音寺市(大野原町), まんのう町, 高松市(塩江町)の5地点。 県外: 本州, 四国, 九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	全国的に広く生息しているが、微小種であるため、各地とも確認された生息地および生息個体数は少ない。本県では、讃岐山脈の西部・中部・東部で各1地点ずつ生息地が見つかる。広葉樹林や杉林の落葉中に生息する。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	香川県を含めて、16都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	19, 24, 30, 36, 37, 38, 57, 110, 115, 118, 119		
	執筆: 矢野重文		

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

ウラウスダカキビ <i>Coneuplecta</i> sp. (シタラ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	情報不足 (DD)
選 定 理 由	⑤⑦* 低木の葉裏に付着して生息しているが、同じ環境に生息しているマルシタラなどに比べて、その生息地点は限定されており、生息地の保全が望まれる。		
種 の 特 徴	殻長約1.9mm, 殻幅約2.0mm, 約5層。塔形の微小巻貝。殻は淡褐色半透明で光沢があり、非常に薄くて壊れやすい。周縁は角張るがキール状にはならない。臍孔は閉じている。		
分 布	県内: 観音寺市, 三豊市(豊中町・山本町・高瀬町), 綾川町の7地点。 県外: 本州, 四国, 九州, 南西諸島。		
県 内 で の 生 息 状 況	タカキビの仲間と捉えられていたが、落葉中に生息するタカキビとは全く異なり、マルシタラのように、讃岐山脈や里山の低木の葉裏に付着して生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	前回同定したサダタカキビはタカキビの一型であることが分かり、本種は未記載種となった。		
文 献	17, 36, 37, 38, 54, 90, 91, 114, 118, 119, 129, 130, 131		執筆: 矢野重文



被写体: 三豊市 | 撮影者: 松田春菜

アワクリイロベッコウ <i>Japanochlamys awaensis</i> (シタラ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	②③⑤ ⑦* 四国の固有種であり、香川県はこの種の北側の分布境界になっている。生息地は非常に限られており、讃岐山脈の高度の高い稜線付近に生息している。		
種 の 特 徴	殻長約4.0mm, 殻幅約7.3mm, 約6層。平巻形の小型巻貝。殻は茶褐色で光沢があり、薄くて壊れやすい。臍孔は閉じている。殻の大きさの割には、巻き数が多いのが特徴である。		
分 布	県内: 讃岐山脈。 県外: 四国。		
県 内 で の 生 息 状 況	徳島県阿南市で見つかり、1902年に新種記載されたが、四国の中部～東部に広く分布している。本県では讃岐山脈の高度の高い稜線付近において、広葉樹林の落葉中に生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。		
特 記 事 項	四国固有種であり、愛媛県と高知県において絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。		
文 献	1, 5, 16, 36, 37, 38, 43, 54, 86, 87, 110, 115, 118, 119		執筆: 矢野重文



被写体: まんのう町 | 撮影者: 矢野重文

ケハダビロウドマイマイ <i>Nipponochloritis fragilis</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	②⑤⑦ ⑧* 見つかった生息地は数地点で、そこでの個体数も少ない。環境の変化には極めて弱い種で、絶滅が心配される。		
種 の 特 徴	殻長約11mm, 殻幅約18mm, 約5層。畑でよく見られるウスカワマイマイの形態によく似ているが、紫褐色で殻表にピロウド状の粗い殻皮毛がある。		
分 布	県内: 東かがわ市, 土庄町, 小豆島町。 県外: 中国地方を除く本州。		
県 内 で の 生 息 状 況	豊島, 小豆島, 東かがわ市に少数生息している。乾燥を嫌うため適度の湿気のある所に生息している。生貝を見つけることは非常に困難である。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	常に湿気のある空洞などに生息しており、生息個体数は少ないと思われる。環境の変化でたちまち絶滅する。東かがわ市の生息地はイノシシの地表攪乱で発見が困難になっている。		
特 記 事 項	香川県以外では、西日本の11都道府県において絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	88, 108, 118, 119		執筆: 多田 昭



被写体: 東かがわ市 | 撮影者: 多田 昭

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

トサビロウドマイマイ <i>Nipponochloritis tosanus</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	③⑤⑦ 常に適度の湿気のある所に生息するため、生息地が限定され、生息個体数も少ないと思われる。環境の変化に弱い種のため絶滅が心配される。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約11mm, 殻幅約19mm, 約5層。黄褐色で平巻き状、殻頂部は少し突き出る程度。殻表にはピロウド状に殻皮毛がある。生殖器の鞭状器が長い。		
分 布	県内: 中部より西部の山岳部。 県外: 四国, 岡山県。		
県 内 で の 生 息 状 況	中部から西部にかけての山岳部に分布するが、常に適度の湿気のある倒木下や空洞に生息するため、産地が少なく個体数も少ない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	環境の変化に弱く、乾燥が続くと絶滅する。過去に生息が確認できている所でも、近年発見できないところが多くなっている。		
特 記 事 項	香川県レッドデータブック2004年版では、シコクピロウドマイマイとして掲載した。		
文 献	88, 90, 91, 92, 93, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: まんのう町 撮影者: 多田 昭

ツルギサンマイマイ <i>Satsuma tsurugisanica</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
選 定 理 由	②③⑤⑦ 山岳部の狭い範囲に生息しており、近年減少傾向が顕著である。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約14mm, 殻幅約15mm, 約5.5層。淡褐色から褐色の円錐形の貝。殻表には鋭い光沢がある。生殖器の鞭状器が短く、先端部が切断されたような独特の形態をしている。		
分 布	県内: 東かがわ市山岳部, 西讃の山岳部。 県外: 愛媛県東部山岳部, 徳島県山岳部。		
県 内 で の 生 息 状 況	讃岐山脈の東と西に分かれて分布、西部山岳部では倒木下や空洞のある所に少数確認されている。東部では東かがわ市の山岳部で過去に発見されたが、最近では生貝の確認ができない。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	もともと個体数の少ない種であるが、近年は生息域にイノシシによる地表攪拌があり、生息地の荒廃が著しい。		
特 記 事 項	四国の固有種であり、香川県以外では、愛媛県において絶滅危惧 I 類に指定されている。		
文 献	1, 50, 65, 90, 91, 118, 119	執筆: 多田 昭	



被写体: 東かがわ市 撮影者: 多田 昭

アキラマイマイ <i>Satsuma akiratadai</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリー	絶滅危惧 I B 類 (EN)
選 定 理 由	②③⑤ 岡山県と本県の瀬戸内側の狭い範囲に分布、近年減少傾向にある。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約12mm, 殻幅約16mm, 約5層。淡褐色の低円錐形の貝。近縁種であるシメクチャマイマイに酷似する。生殖器の鞭状器の先端が細くならない。		
分 布	県内: 中西部島嶼部。 県外: 岡山県瀬戸内側。		
県 内 で の 生 息 状 況	塩飽諸島, 伊吹島, 荘内半島部など瀬戸内に面した島嶼部の落葉下に少数生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	畑付近のゴミ捨て場などに多産していたが、近年生息に適した環境が少なくなっている。		
特 記 事 項	岡山県・香川県の固有種である。		
文 献	24, 35, 65	執筆: 多田 昭	



被写体: 三豊市 撮影者: 多田 昭

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④県固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

チクヤケマイマイ <i>Aegista aemula</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	②⑤⑦* 本県内では西讃地方の半島部や離島部の狭い範囲に分布していて、近年減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約0.9mm, 殻幅約16mm, 約6層。低円錐形, 周縁角は角張り, そこに殻皮毛がある。ケマイマイと名付けられているが老成すると殻皮毛は殆ど摩耗してしまう。		
分 布	県内: 西讃の島嶼部, 坂出市(王越町)。 県外: 愛媛県, 中国地方。		
県 内 で の 生 息 状 況	本島, 広島, 高見島など塩飽諸島の石垣の間や草地に生息する。乾燥には強いようである。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	島の人口が減り自然環境が荒廃し, 生息好適地が少なくなっている。		被写体: 丸亀市 撮影者: 多田 昭
特 記 事 項	環境省のレッドデータブックでは, シコクケマイマイ(チクヤケマイマイの亜種)とされている。		
文 献	53, 118, 119	執筆: 多田 昭	

ハタケダマイマイ <i>Aegista hatakedai</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	②③⑤⑦ 岡山県・広島県・香川県の固有種であり, 本県は南側の分布境界になっている。生息地が限られており, どの生息地においても, 生息数が減少している。 ⑧*		
種 の 特 徴	殻長約7mm, 殻幅約13mm, 約6層。低い円錐形の中型巻貝。殻は黄褐色で, 殻表は波状の成長肋と微細な螺旋を有するが, 鱗片状の突起は発達しない。周縁はキール状に角張る。		
分 布	県内: 土庄町(豊島), 小豆島町の3地点。 県外: 本州(岡山県・広島県)。		
県 内 で の 生 息 状 況	岡山県新見市において見つかかり, 1951年に新種記載されたが, 岡山県西部と南部に広く分布している。本県では1977年に豊島で見つかったのを皮切りに, 小豆島や五色台でも生息が確認された。大きな岩の側面や下面に付着して生息している。ところが, 近年に調査においては再確認されておらず, 絶滅が危惧されている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, 道路建設などによる生息環境の破壊が, 絶滅危険性の最も大きな要因である。		被写体: 土庄町 撮影者: 松田春菜
特 記 事 項	模式産地の岡山県では, 準絶滅危惧種に指定されている。		
文 献	24, 36, 37, 38, 44, 109, 118, 119	執筆: 矢野重文	

イソトラマイマイ <i>Aegista stenophala</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
選 定 理 由	①③④⑤ 本県固有種。高松市牟礼町が模式産地。高松市内に限られた環境に生息し, 近年減少傾向が著しい。 ⑦⑧*		
種 の 特 徴	殻長約5.5mm, 幅約7mm, 約5層。淡褐色で円錐形の小形巻貝。マヤサンマイマイに似ているが殻表に短く細い特異な殻皮毛がある。		
分 布	県内: 高松市。 県外: 見つかっていない。		
県 内 で の 生 息 状 況	模式産地では狭い場所に, かろうじて種を維持している。近年, 他の産地では生きている個体を見かけることができなくなっている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	半日陰で草本の茎や葉に着いて生活しており。環境が変われば個体数が減る傾向がある。1生息地には食草と思える草本が少なくなっており絶滅が心配される。		被写体: 高松市 撮影者: 多田 昭
特 記 事 項	香川県固有種であり, 香川県希少野生生物の保護に関する条例による指定希少野生生物である。		
文 献	49, 66, 116, 118, 119, 127	執筆: 多田 昭	

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

マヤサンマイマイ <i>Aegista mayasana</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
選 定 理 由	③⑤* 兵庫県の固有種であったが、近年本県においても6地点において生息が確認された。しかし、各地点における生息数は少なく、絶滅が危惧される。		
種 の 特 徴	殻長約5.0mm、殻幅約7.0mm、約6層。ふつらした低い円錐形の微小巻貝。殻は茶褐色で、周縁角は円く、殻表全体に微小な鱗片状の突起を有することが特徴である。		
分 布	県内: 高松市, 坂出市, 土庄町の6地点。 県外: 本州(兵庫県)。		
県 内 で の 生 息 状 況	神戸市摩耶山で見つかり、1969年に新種記載された。その後、神戸市周辺では新産地は見つからず、1978年に瀬戸内海を越えた小豆島土庄町、1992年に五色台、1993年に岩清尾山塊で見つかった。広葉樹林のシロダモなどの低木やヤマアイなどの草本植物の葉裏に付着して生息し、冬季には落葉下で冬眠する。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発、人工造林、道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。特に本種は、兵庫県と本県のみが生息する種なので、自然に手を加える場合は、本種の生息地点を把握したうえで、特別な配慮が必要である。		
特 記 事 項	模式産地の兵庫県では、絶滅危惧種(Aランク)に指定されている。		
文 献	3, 30, 36, 37, 38, 108, 118, 119, 127		執筆者: 矢野重文



被写体: 高松市 撮影者: 矢野重文

チャイロオトメマイマイ <i>Trishoplita mesogonia</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	②⑤⑧* 本州には広く分布し、本県は南側の分布境界になっている。県内では、小豆島にのみ生息し、生息地の乾燥化が進行して、個体数が減少している。		
種 の 特 徴	殻長約7.5mm、殻幅約10.5mm、約5層。ふつらした低い円錐形の小型巻貝。殻は茶褐色で、弱い波状の成長肋を有する。亜成貝の周縁は角張るが、成貝は円い。殻口は反転する。		
分 布	県内: 小豆島町, 土庄町。 県外: 本州, 四国。		
県 内 で の 生 息 状 況	近畿地方北部や中国地方東部には広く分布しているが、本県では唯一小豆島に生息している。集塊岩地帯の落葉樹林におけるシロダモなどの低木の葉裏に付着して生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発、人工造林、道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。幸い小豆島の寒霞渓周辺は国立公園のため、大きな開発は回避されると思われるが、それでも自然に働きかける場合は、十分な配慮が望まれる。		
特 記 事 項	香川県以外では、滋賀県において絶滅危惧要注目種に指定されている。		
文 献	53, 109, 118, 119		執筆者: 矢野重文




被写体: 小豆島町 撮影者: 松田春菜

クマドリオトメマイマイ <i>Trishoplita dacostae tosana</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリ	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)
		環境省カテゴリ	—
選 定 理 由	③⑤⑧* 四国西南部から九州東部に生息する種が飛び地分布したものであるが、県内では小豆島にのみ生息し、生息地の乾燥化が進行し、個体数が減少している。		
種 の 特 徴	殻長約7.5mm、殻幅約10.5mm、約5層。ふつらとした低い円錐形の小型巻貝。殻は茶褐色で縫合下が広く淡色になる。殻表は、弱い波状の成長肋と微細な螺旋脈がある。		
分 布	県内: 小豆島町。 県外: 四国, 九州。		
県 内 で の 生 息 状 況	本種は九州に広く分布しているダコスタマイマイの亜種とされており、縫合下の淡色の帯が広いことにより区別されている。本県では小豆島に飛び地分布しており、集塊岩地帯の落葉樹林におけるシロダモなどの低木の葉裏に付着して生息している。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発、人工造林、道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。幸い小豆島の寒霞渓周辺は国立公園のため、大きな開発は回避されると思われるが、それでも自然に働きかける場合は、十分な配慮が望まれる。		
特 記 事 項	香川県RDB2004年版では、クマドリオトメマイマイの分布域と離れていることより、類似種としていた。		
文 献	53, 109, 118		執筆者: 矢野重文



被写体: 小豆島町 撮影者: 松田春菜

※選 定 理 由: ①模式産地、②分布境界、③全国極限、④県固有種、⑤県内極限、⑥交雑移行、⑦限定生育・生息環境、⑧近年減少、⑨絶滅

シロマイマイ <i>Trishoplita pallens</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリー	絶滅 (EX)
		環境省カテゴリー	準絶滅危惧 (NT)
選 定 理 由	四国には広く分布しており、本県は北側の分布境界になっている。県内では、讃岐山脈の谷筋において、かろうじて数個体死殻が確認されたのみである。		
種 の 特 徴	殻長約12mm, 殻幅約20mm, 約7層。平巻形の中型巻貝。殻は和名の通り白色半透明で、やや鈍い光沢がある。周縁は円く、臍孔は大きく開く。		
分 布	県内: 観音寺市 (大野原町) の1地点。 県外: 四国。		
県 内 で の 生 息 状 況	本種は四国中部から南東部に広く分布しているが、本県では観音寺市大野原町の讃岐山脈中腹にその分布の北限があり、1987年に新鮮な死殻が採集された。ところが、2002年に調査したときには砂防ダムが建設されて、低木の葉裏に付着して生息する本種は、死殻さえも見つからなかった。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	森林開発, 人工造林, ダム建設, 道路建設などによる生息環境の破壊が、絶滅危険性の最も大きな要因である。本種は、砂防ダムの建設によって、生息地が破壊されたものと思われる。		被写体: 観音寺市 撮影者: 高木真人
特 記 事 項	四国固有種である。		
文 献	1, 36, 37, 38, 53, 57, 110, 118, 119		執筆: 矢野重文

アワマイマイ <i>Euhadra awaensis</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧II類 (VU)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	②③⑤⑦ うっそうと繁った森林の岩の間や倒木の下に生息しており、近年生きた個体⑧*を見かけることが少なくなった。		
種 の 特 徴	殻長約35mm, 殻幅約60mm, 約6層。褐色の日本最大級のカタツムリ。夜行性で昼間は石垣の間や空洞などに潜んでいる。殻表の光沢は弱く、殻底に打痕がある。		
分 布	県内: 讃岐山脈と里山。 県外: 四国固有種。徳島, 香川県の個体は巨大で重厚。愛媛県, 高知県の個体はやや低平で恋矢の形態も異なる。		
県 内 で の 生 息 状 況	自然の残る森林に少数個体生息している。過去には広く分布していたが、近年姿を見かけることが極めて少なくなっている。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	スギ, ヒノキの植林による単純林化や林道の延長などにより生息域が狭まった。集落付近に生息していた個体は過疎の影響か姿を消してしまった。		被写体: 高松市 撮影者: 高木真人
特 記 事 項	中国地方西部に生息するイワマイマイを別種であると見れば、本種は四国固有種である。		
文 献	1, 50, 86, 90, 91, 115, 118, 119, 127		執筆: 多田 昭

ヤハタマイマイ <i>Euhadra sandai yahatai</i> (ナンバンマイマイ科)		香川県カテゴリー	絶滅危惧 I 類 (CR+EN)
		環境省カテゴリー	—
選 定 理 由	①③④⑤ 香川県固有亜種で、小豆島町の限られた所に少数個体生息している。近年、減少傾向にある。		
種 の 特 徴	殻長約32mm, 殻幅約55mm, 約6層。茶褐色に黄褐色の火炎彩のある大形の美しいカタツムリ。夜行性で岩の間などに生息している。幼貝は樹上に這い上っていることがある。		
分 布	県内: 小豆島が模式産地であり、現在は小豆島町の限られた所にだけに棲息している。 県外: 見つかっていない。		
県 内 で の 生 息 状 況	小豆島の狭い範囲に隔離・分化した種で、岩の間でひっそりと種を維持している状況である。乾燥化が進んでいる現在、絶滅が心配される。ヤハタマイマイは近似種ニシキマイマイの一型とする見解があり、環境省のカテゴリーはその見解に沿ったものと思われる。		
絶 滅 危 険 性 の 要 因	過去には採集圧があったが県指定希少野生生物に指定して以来、地元の方の理解もあって個体数は少ないながら、平衡状態を維持していると推測している。地球環境の変化などもあり、今後生息地への影響が心配される。		被写体: 小豆島町 撮影者: 高木真人
特 記 事 項	香川県固有亜種であり、香川県希少野生生物の保護に関する条例による指定希少野生生物である。		
文 献	51, 109, 118, 119		執筆: 多田 昭

※選定理由: ①模式産地, ②分布境界, ③全国極限, ④固有種, ⑤県内極限, ⑥交雑移行, ⑦限定生育・生息環境, ⑧近年減少, ⑨絶滅

◎ 陸産・淡水産・海浜産貝類 ◎

文 献

- 1 阿部近一. 1981. 徳島県陸産ならびに淡水産貝類誌. 教育出版センター(徳島). 88pp. 29pls.
- 2 明石英幹・山賀賢一・内海範子・吉松定昭. 2011. イタボガキをめぐる7つの疑問. まいご(18). 四国貝類談話会:10-14.
- 3 東 正雄. 1969. 摩耶山オトメマイマイ(Trishoplita)の一新種. 兵庫生物(6-1):19-22.
- 4 東 良雄. 1987. スナガイとその模式産地(三崎)について. 神奈川自然史資料(8):111-117.
- 5 愛媛県. 2014. 愛媛県レッドデータブック2014愛媛県の絶滅のおそれのある野生生物. 愛媛県県民環境部環境局自然保護課.
- 6 波部忠重. 1973. 軟体動物 in 日本淡水生物学. 北隆館(東京):309-341.
- 7 Habe T 1976. New Land and Freshwater Snails(Mollusca) from Japan .Bull. Natn. Sci. Mus:225-228.
- 8 波部忠重・稲葉明彦監修. 1996. 黒田徳米博士記載貝類模式標本目録. 西宮市:1-152.
- 9 濱本俊策. 1984. 香川県潜水器漁業の現状と漁業と漁業者の意識. 香川県水産試験場試験報告(21):103-113.
- 10 濱村陽一. 2004. 芸南の海産貝類図鑑. 蘭島文化振興財団(呉).
- 11 畠山祥一郎. 1977. 香川県海産生物目録(その1. 燧灘東部・備讃瀬戸西部). 香川生物(6):1-10.
- 12 畠山祥一郎・矢野重文. 1978. 香川県海産生物目録(その2. 燧灘東部・備讃瀬戸西部). 香川生物(7):1-8.
- 13 畠山祥一郎・矢野重文. 1979. 香川県海産生物目録(その3. 燧灘東部・備讃瀬戸西部). 香川生物(8):9-14.
- 14 畠田和一. 小豆島貝類方言. ヴキナス(6-2):114-118.
- 15 逸見泰久. 2009. 第4章 蛤の生物学・第5章 日本各地におけるハマグリ現状. 内野明德(編). 熊本大学政創研叢書6. 肥後ハマグリ資源管理とブランド化. 成文堂(熊本). :81-153.
- 16 平瀬信太郎. 1907. 日本陸産貝類圖説(6). 介類雑誌(1-11). 平瀬介館(京都):362-368.
- 17 平瀬信太郎. 1908. 日本陸産貝類圖説(11). 介類雑誌(2-5). 平瀬介館(京都):153-158.
- 18 平瀬信太郎. 1908. 日本陸産貝類圖説(13). 介類雑誌(2-7). 平瀬介館(京都):221-226.
- 19 平瀬信太郎. 1908. 日本陸産貝類圖説(15). 介類雑誌(2-9). 平瀬介館(京都):283-292.
- 20 平瀬信太郎. 1908. 日本陸産貝類圖説追加(1). 介類雑誌(2-12). 平瀬介館(京都):403-406.
- 21 平瀬信太郎. 1909. 日本陸産貝類圖説(16). 介類雑誌(3-1). 平瀬介館(京都):13-18.
- 22 保坂健市・福田 宏. 1996. 絶滅危惧種ミズゴマツボ(腹足綱:新紐舌目:ミズゴマツボ科)の山口県小野田市産個体群と周辺の貝類相の特徴, およびその保護の必要性. ユリヤガイ(4). 山口貝類研究談話会:65-96.
- 23 福田 宏 2007. 軟体動物門 腹足綱. In 飯島明子(編), 第7回自然環境保全基礎調査 浅海域生態系調査(干潟調査)報告書, 環境省自然環境局 生物多様性センター(富士吉田):153-161.
- 24 福田 宏 2010. 昆虫類以外の無脊椎動物. In 岡山県野生動物調査検討会(編), 岡山県版レッドデータブック2009 絶滅のおそれのある野生生物 動物編. 岡山県生活環境部自然環境課(岡山):253-255, 257-258, 278-404.
- 25 福田 宏・藤野睦子・江田伸司 2014. 岡山県倉敷市高洲で生貝が見出されたウミヒメカノコ(腹足綱:アマオブネ科), ならびに同種とキンランカノコ・レモンカノコを巡る同定の混乱. 倉敷市立自然史博物館研究報告(29):29-38.
- 26 福田 宏・瀬尾友樹. 2014. ヒメエガイの在来個体群が瀬戸内海に残存している可能性. まいご(21). 四国貝類談話会:25-28.
- 27 福田 宏. 2017. 日本産クビキレガイ科(新生腹足類:クビキレガイ上科)の再検討に向けて. Molluscan Diversity(5). 軟体動物多様性学会:33-77.
- 28 風呂田利夫. 2000. 内湾の貝類, 絶滅と保全—東京湾のウミナナ類 衰退からの考察—. 月刊海洋号外(20):74-82.
- 29 風呂田利夫. 2005. 内湾ベントスにおける地域個体群間ネットワークの重要性. 水産総合研究センター研究報告(別冊3):35-46.
- 30 兵庫県. 2015. 兵庫県版レッドデータブック2014(貝類・その他無脊椎動物). (財)ひょうご環境創造協会(神戸).
- 31 家山博史・水藤充彦. 1999. 西日本に分布するチビマメシジミ亜属の貝. ちりばたん30(2):32-35.
- 32 家山博史. 2011. 水ノ口峠近くの湿地で見つかったマメシジミ. まいご(18). 四国貝類談話会:6-7.
- 33 石川 裕. 2015. 昨年の四国貝類談話会で採れた貝二題. まいご(22). 四国貝類談話会:19-20.
- 34 香川県土木部港湾課・復建調査設計株式会社. 2008. 平成19年度 高松港 環境実態調査業務委託 成果報告書. 香川県.
- 35 亀田勇一・福田 宏. 2015. シメクチマイマイ(ナンバンマイマイ科)の再定義, ならびに瀬戸内海中部沿岸・島嶼に固有な新隠蔽種アキラマイマイの記載. Venus(73):15-40.
- 36 環境省自然環境局野生生物課 希少種保全推進室(編). 2014. レッドデータブック2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 6 貝類. ぎょうせい(東京).
- 37 環境省自然環境局野生生物課 希少種保全推進室(編). 2017. 環境省レッドリスト 2017 補遺資料.
- 38 環境省自然環境局野生生物課 希少種保全推進室(編). 2018. 環境省レッドリスト 2018 補遺資料.
- 39 河邊訓受. 1992. 邦産オカミミガイ類についての数種の紹介と生息環境並に分布. かきつばた(18). 名古屋貝類談話会:6-12.
- 40 木村昭一・木村妙子. 2013. 貝類, pp. 7-59, 118-184. In: 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森啓介・多留聖典, 干潟ベントスフィールド図鑑. 257pp. 日本国際湿地保全連合(東京).

- 41 木村昭一・木村妙子. 2019. 粟島港東側周辺で採集された貝類. まいご(26). 四国貝類談話会:4-10.
- 42 近藤高貴. 1987. マツカサガイ属の分類学的再検討. VENUS(41-3). 181-198.
- 43 高知県. 2018. 高知県レッドデータブック2018 動物編. 高知県林業振興・環境部環境共生課.
- 44 黒田徳米・波部忠重. 1951. 中国地方産オホベソマイマイ属の2新種並に2新亜種. VENUS(16-5・8):78-82.
- 45 黒田徳米・波部忠重. 1954. 日本産水棲新巻貝. VENUS(18-2):71-79.
- 46 黒田徳米・波部忠重. 1957. 日本の洞窟並に地下水産巻貝類. VENUS(19-3・4):183-196.
- 47 黒田徳米. 1958. 日本産カワザンショウガイ属の追補. VENUS(20-1):16-22.
- 48 黒田徳米. 1959. カワザンショウガイ新種今一種. VENUS(20-4):335-338.
- 49 黒田徳米・阿部近一. 1963. オトメマイマイとオウベソマイマイとの連継新型. 夢蛤(72). 吉良哲明:3-4.
- 50 黒田徳米・阿部近一. 1980. 徳島県陸産並びに淡水産貝類の分類と分布について. 徳島県博物館紀要(11):1-46.
- 51 黒田徳米・東 正雄. 1982. 日本陸産貝類3新種1新亜種. VENUS(41-1):10-19.
- 52 黒住耐二. 1996. ミズゴマツボ. 日本の希少な野生水生生物に関する基礎資料(III). 軟体動物日本水産資源保護協会(東京):22-28, 83-84.
- 53 前田和俊・太田 秀・大里明博・鹿野康裕・上島 励. 1983. 横須賀市自然博物館所蔵平瀬貝類標本目録(I)陸産貝類(1)オナジマイマイ科(有肺類). 横須賀市博物館資料集(8):1-60. Pls(1-24).
- 54 前田和俊・太田 秀・大里明博・鹿野康裕・上島 励. 1987. 横須賀市自然博物館所蔵平瀬貝類標本目録(II)陸産貝類(2)前鰓亜綱, 有肺亜綱(オナジマイマイ科を除く). 横須賀市博物館資料集(11):1-71. Pls(1-20).
- 55 増田 修・内山りゅう. 2004. 日本産淡水貝類図鑑②汽水域を含む全国の淡水貝類. ビーシーズ(東京).
- 56 増田 修. 2017. 姫路市家島諸島周辺(播磨灘北部)で採集されたオガイ. かいなかま(51-1). 阪神貝類談話会:25-28.
- 57 まつやま自然環境調査会(編). 2013. レッドデータブックまつやま2012 松山市における絶滅の恐れのある野生生物. 松山市環境部.
- 58 湊 宏. 1978. コシボソギセルと近縁の小豆島の1新亜種. VENUS(37-1):19-21.
- 59 湊 宏. 1987. 日本産ムシオイガイ科の2新種. VENUS(45-4):222-225.
- 60 湊 宏. 1997. 珍奇な日本産ナメクジ類2種. ちりぼたん(18-3・4). 115-117.
- 61 湊 宏. 1988. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究 貝類学雑誌(別巻2). 日本貝類学会
- 62 湊 宏. 1989. 日本産ナメクジ科の新属新種 イボイボナメクジの記載. ちりぼたん(26-3・4):100-101.
- 63 湊 宏・神田正人. 1993. チョウセンヌナガイ大分県に産す. ちりぼたん(23-3):65-67.
- 64 湊 宏・増田 修・矢野重文. 1996. イボイボナメクジの新分布記録. ちりぼたん(26-3・4):100-101.
- 65 湊 宏・多田 昭. 2000. 四国のシメクチマイマイ種群の生殖器の形態とその分布. ちりぼたん(31-1):3-10.
- 66 Minato, H. 2004. *Aegista stenomphala* n. sp. (Plmonata:Bradybaendae) from Mt. gokenzan, Kagawa Prefecture, Shikoku, Japan. VENUS(62-3・4):135-140.
- 67 Mori S 1938. Classification of Japanese Pisidium. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ(B)(14-2). 255-278.
- 68 Mori S 1938. Classification of the Japanese Planorbidae. Mem. Coll. Sci. Kyoto Imp. Univ(B)(14-2). 279-300.
- 69 Motochin R, Wang R, Ueshima 2017. Molecular phylogeny, frequent parallel evolution and new system of Japanese clausiliid land snails (Gastropoda:Stylommatophora). Zool JourLinnean Soc(20):1-51.
- 70 日本ベントス学会(編). 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック. 東海大学出版会(秦野).
- 71 岡崎朋子・和田恵次. 2007. 汽水性巻貝タケノコカワニナの生態分布. 南紀生物(49):1-5.
- 72 小澤智生・吉崎和美・井上恵介・鈴木尊仁・社本 学. 2017. 日本の干潟に生息するフトヘナタリ科およびウミニナ科絶滅危惧種の生息地保全にむけての生態学調査および保全遺伝学的研究. 第25期プロ・ナトゥーラ・ファン ド助成 国内研究助成 自然保護助成基金成果報告書(25):61-76.
- 73 坂口清一. 1936. 香川県採集貝類. 香川県博物学会誌(1):31-39.
- 74 酒井基介・西岡智哉・住友寿明・平野 匠. 2013. 吉野川汽水域におけるヤマトシジミの浮遊幼生および着底稚貝の分布. 徳島県水産研究課研究報告(9):1-5.
- 75 瀬尾友樹・Tanangonan, J. 2014. 2009~2013年における香川県沿岸の海産貝類相について. 近畿大学農学部紀要(47):87-124.
- 76 瀬尾友樹. 2019. 香川県粟島において採集されたハツカネズミガイの生貝. まいご(26). 四国貝類談話会:11-12.
- 77 Shi H H, Huang C J, Zhu S X, Yu X J, Xie W Y 2005. Generalized system of imposex and reproductive failure in female gastropods of coastal waters of mainland China. Marine Ecology Progress Series(30):179-189.
- 78 塩田浩之. 2000. 香川県の淡水産貝類. 1. ヒメマルマメタニシ. みせばや(3). 香川の自然教育研究会:18-19.
- 79 塩田浩之. 2002. 香川県のエゾマメタニシ科貝類について. まいご(10). 四国貝類談話会:22-23.
- 80 塩田浩之. 2002. 香川県の淡水産貝類(2)マメタニシ. みせばや(4). 香川の自然教育研究会:17-18.
- 81 塩田浩之. 2007. 香川県の淡水・汽水産貝類. 香川の生物. 平成19年度(2007)年度 日本生物教育会 第62回全国大会 香川大会 大会記念誌:97-100.
- 82 多田 昭. 1982. 四国を中心としたキセルガイの分布. 香川県高等学校教育研究会理化生地部会会誌(18):2-8.
- 83 多田 昭. 1982. 香川県のシリプトゴマガイは人為分布?. かいなかま(16-2). 阪神貝類談話会:8-9.
- 84 多田 昭. 1989. 四国産ゴマガイ類. 香川県高等学校教育研究会理化生地部会会誌(25):39-47.
- 85 多田 昭. 1991. ショウドシマガセル屋島に産す. かいなかま(25-1). 阪神貝類談話会:4.
- 86 多田 昭・矢野重文. 1994. 大滝大川県立自然公園地域の陸産貝類. 大滝大川県立自然公園地域の自然と人文景観(12). 香川県:1-12.

- 87 多田 昭・矢野重文. 1995. センター所蔵香川県の陸産および淡水産貝類標本目録. 高松市市民文化センター(高松市):1-10.
- 88 多田 昭. 2002. 四国産ピロウドマイマイ属貝類. まいご(10). 四国貝類談話会:4-9.
- 89 多田 昭. 2003. 貝類 in 大内町史補遺. 大内町:67-76.
- 90 多田 昭. 2005. 陸産・淡水産貝類. 観察図鑑財田の自然:67-71. 財田町自然観察同好会・財田町.
- 91 多田 昭. 2007. 財田町の陸産・淡水産貝類相. 続財田の自然. 財田町自然観察同好会・三豊市財田支所:185-199.
- 92 多田 昭・大原健司. 2010. 四国におけるピロウドマイマイ属の分類—特にトサビロウドマイマイとシコクピロウドマイマイについて—徳島県立博物館研究報告(20):37-42.
- 93 多田 昭・早瀬善正. 2011. トサビロウドマイマイの岡山県の分布記録および類似種に関する考察. ちりばたん(41-3・4):120-126.
- 94 多田 昭・大原健司・大谷洋子. 2013. 四国のキセルガイ科(腹足綱・柄眼目). 西宮市貝類館研究報告(8):104+4pp.
- 95 多田 昭. 2014. 屋島の陸産貝類・屋島の淡水産貝類. 天然記念物屋島調査報告書. 高松市・香川大学天然記念物屋島調査団:264-280.
- 96 多田 昭. 2015. 興味深い屋島のキセルガイ科貝類. まいご(22). 四国貝類談話会:11-16.
- 97 多田 昭・石川 裕・矢野重文. 2017. 四国のゴマガイ科(2) キュウシュウゴマガイ・ゴマガイ. まいご(24). 四国貝類談話会:15-19.
- 98 高橋 茂. 1993. 群馬県におけるチョウセンスナガイの分布について. ちりばたん(24-2):39-40.
- 99 玉置昭夫・万田敦昌・大橋智志・Mandal Sumit・浜口昌巳. 2009. 橘湾および有明海湾口部の砂質干潟に生息するハルマンスナモグリ(十脚甲殻類スナモグリ科)・イボキサゴ(腹足綱ニシキウズガイ科)幼生の輸送. 沿岸海洋研究(46):119-126.
- 100 van der Heide T, Govers L L, de Fouw J, Olf H, van der Geest M, van Katwijk M M 2012. A three-stage symbiosis forms the foundation of seagrass ecosystems. *Science*(336): 1432-1434.
- 101 Vishwakiran. Y. ・Anil. A. C. ・Venkat. K. ・Sawant. S. S. 2006. *Gyrineum natator*: A potencial indicator of imposex along the Indian coast. *Chemosphere*(62):1718-1725.
- 102 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島 哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤 真・島村賢正・福田 宏. 1996. 日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状. WWF Japan サイエンスレポート(3):1-182.
- 103 山口 昇・波部忠重. 日本産ナメクジ類の研究(1). 貝類学雑誌 VENUS(18-4):234-240.
- 104 Yamakawa Y A, Imai H 2012. Hybridization between *Meretrix lusoria* and the alien congeneric species *M. petechialis* in Japan as demonstrated using DNA markers. *Aquatic Invasions*(7):327-336.
- 105 山下博由・福田 宏. 1996. サナギガイの殻形態と分布. ユリヤガイ(4-1・2). 山口貝類研究談話会:169-177.
- 106 山下博由・福田 宏・堀 成夫・本田治朗. 1998. 山口県豊北町角島におけるユリヤガイ・サナギガイ観察会. ユリヤガイ(6-1). 山口貝類研究談話会:59-62.
- 107 矢野重文. 1987. コウチミジンツボ香川県に出現. ちりばたん(18-1). 四国貝類談話会:4-5.
- 108 矢野重文. 1990. 香川県小豆島・豊島の陸産貝類目録Ⅰ. 南紀生物(32-2):81-88.
- 109 矢野重文. 1990. 香川県小豆島・豊島の陸産貝類目録Ⅱ. 南紀生物(33-1):15-18.
- 110 矢野重文. 1991. ヤノムシオイガイの分布について. いそこじき(77). 京都大学貝類同好会:5-16.
- 111 矢野重文. 1996. 陸産及び淡水産貝類. 町史ことひら1. 琴平町:72-77(生物資料編), 391-395(自然環境編).
- 112 矢野重文. 1997. ワカウラツボ採集記. いそこじき(88). 京都大学貝類同好会:2-5.
- 113 矢野重文. 2002. 四国産ムシオイガイ科貝類. まいご(10). 四国貝類談話会:10-15.
- 114 矢野重文. 2003. 陸産・淡水産貝類. 高瀬町史民俗編自然編. 高瀬町:576-581.
- 115 矢野重文. 2005. 軟体動物. 新修大野原町誌. 大野原町:90-97.
- 116 矢野重文. 2005. イソムラマイマイとマヤサンマイマイ. まいご(13). 四国貝類談話会:26-30.
- 117 矢野重文. 2006. 故小鹿朝司氏を偲んで. まいご(14). 四国貝類談話会:13-15.
- 118 矢野重文. 2007. 香川県産陸産淡水産貝類目録. まいご(15). 四国貝類談話会:18-23.
- 119 矢野重文. 2007. 香川県の陸産貝類. 香川の生物. 平成19年度(2007)年度 日本生物教育会 第62回全国大会 香川大会大会記念誌:163-178.
- 120 矢野重文. 2010. フジナミガイの生息状況と採集方法. まいご(17). 四国貝類談話会:20-21.
- 121 矢野重文. 2010. 香川県において見つかったイシノシタ科貝類の一種. まいご(17). 四国貝類談話会:22-23.
- 122 矢野重文. 2010. 香川県におけるマツカサガイ及びカタハガイの生息状況. まいご(17). 四国貝類談話会:24-25.
- 123 矢野重文. 2015. 種の考察, 分布図からのアプローチ. まいご(22). 四国貝類談話会:21-31.
- 124 矢野重文. 2016. ナタネガイ類の分類について. まいご(23). 四国貝類談話会:3-10.
- 125 矢野重文. 2018. 点と線, それから面へ(分布調査の面白さ). まいご(25). 四国貝類談話会:22-35.
- 126 矢野重文. 2019. キバサナギガイ類の分類について. まいご(26). 四国貝類談話会:18-22.
- 127 矢野重文. 2019. コラム18 日本最大のカタツムリ・コラム19 香川県固有種のカタツムリ. 坂出市史 通史下 地誌・生物篇. 坂出市:132, 136.
- 128 吉松定昭・深尾剛志. 2018. 「干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック—」に掲載された底生動物に関する香川県における知見. 香川生物(45):57-74.
- 129 早瀬善正, 2018. 東海地方で確認されたウラウズタカキビ. かきつばたNo.43. 名古屋貝類同好会:35-37
- 130 西邦雄・西浩孝, 2018. 宮崎県のカタツムリ. 黒潮文庫:99
- 131 上島 励・久保弘文, 2017. ウラウズタカキビ. In 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版 動物編. 沖縄県:523